生理と心理

# 精神分析

★第5巻・第3號★昭和12年5月・6月★

主要項目



詳細目次は巻頭に

T・I・P・A・




VERLAG

東京精神分析學研究所出版部

# フロイド精神分析學全集

第四卷

## 快不快原則を超えて　大槻憲二譯

## 何故の戰爭か？　伊東豐夫譯

改譯重版出來！　實質的に新刊書！

定價一圓八十錢・送料十二錢

精神分析學の本能觀は『快不快原則を超えて』に至つて第三段に發展を示し、驚くべき死の本能の發見となつた。佛教の涅槃思想を科學的に裏付けるものとして、我等東洋人にとつて實に深甚の興味ある書。今や、重版に當り全文改譯新裝の姿清々しく再登場しました。御愛讀を乞ふ。

### 內容要目

（口繪）一九二二年のフロイド（フロイド肖像として代表的のもの）

一、快不快原則を超えて——（第一章）快不快原則の意義及び限界（第二章）不快の再現と快不快原則（第三章）轉嫁及び運命に於ける反復强迫（第四章）外傷性神經症に於ける反復强迫（第五章）早期狀態再現傾向と死の本能（第六章）生物學及び分析學より見たる死の意義（第七章）結語

二、强迫神經症

三、何故の戰爭か？

四、精神分析學の興味

（附錄）「快不快原則を超えて」の解說

全十卷全部重版完成。　重版に際し良心的に改訂改譯を加へました。

春陽堂發行・東京精神分析學研究所取次

本郷區動坂町三三七
振替東京七八八一七番

# 合本単冊『精神分析』（特輯題目及び定價）一覧表

東京精神分析學研究所
本郷區動坂町三二七・振替東京七八八一七番

## 第一巻・上

創刊號（昭和八年五月）「エディポス研究號」＊
第二號（同　六月）「フロイド喜壽祝祭劇記念號」
第三號（同　七月）「教育研究號」
第四號（同　八月）「夢の研究號」（第一）＊
（合本としては品切）

## 第一巻・下

第五號（同　九月）「兒童心理研究號」（第一）＊
第六號（同　十月）「社會思想・犯罪心理研究號」
第七號（同　十一月）「戰爭心理研究號」
第八號（同　十二月）「夢の研究號」（第二）
（合本としては品切）

## 第二巻・上

第一號（同九年一月）「心理療法研究號」
第二號（同　二月）「女性心理研究號」
第三號（同　三月）「傳說研究號」
第四號（同　四月）「文學研究號」
金二圓五十錢（送料共）

## 第二巻・下

第五號（同　五月）「ドストイフェスキー研究」
（六月休刊・以下隔月刊行）
第六號（同　七・八月）「戀愛心理研究號」
第七號（同　九・十月）「性慾心理研究號」
第八號（同　十一・十二月）「夫婦生活研究號」
金二圓五十錢（送料共）

## 第三巻

第一號（同十年一・二月）「兒童心理研究號」（第二）
第二號（同　三・四月）「宗教心理研究號」＊
第三號（同　五・六月）「自殺・情死心理研究號」
第四號（同　七・八月）「同性愛と異性愛」
第五號（同　九・十月）「家庭問題と親子關係」
第六號（同　十一・十二月）「常態及び變態の性心理」
金三圓（送料十五錢）

## 第四巻

第一號（同十一年一・二月）「性格改造研究號」
第二號（同　三・四月）「母性と妖婦研究號」
第三號（同　五・六月）「夢と幻覺研究號」
第四號（同　七・八月）「兒童分析と教育研究號」
第五號（同　九・十月）「愛慾葛藤の諸問題」
第六號（同　十一・十二月）「道德の分析」
金三圓（送料十五錢）

## 第五巻

第一號（同十二年一・二月）「思春期の研究」
第二號（同　三・四月）「不良少年少女の心理」
第三號（同　五・六月）「生理と心理」
第四號（同　七・八月）「男性と女性」

＊印は單冊としては品切、その他は在庫す。單冊代價送料共各五十錢

# 生理と心理號・內容目次

# 『精神分析』第五巻・第三號

アプフウブ

探訪

講座

内外彙報

隔月刊行誌
定價五十錢
送料共

# 精神分析

半年 一圓五十錢
一年 三圓
送料共

昭和十二年 三月四月 不良少年少女心理 第五巻第二號

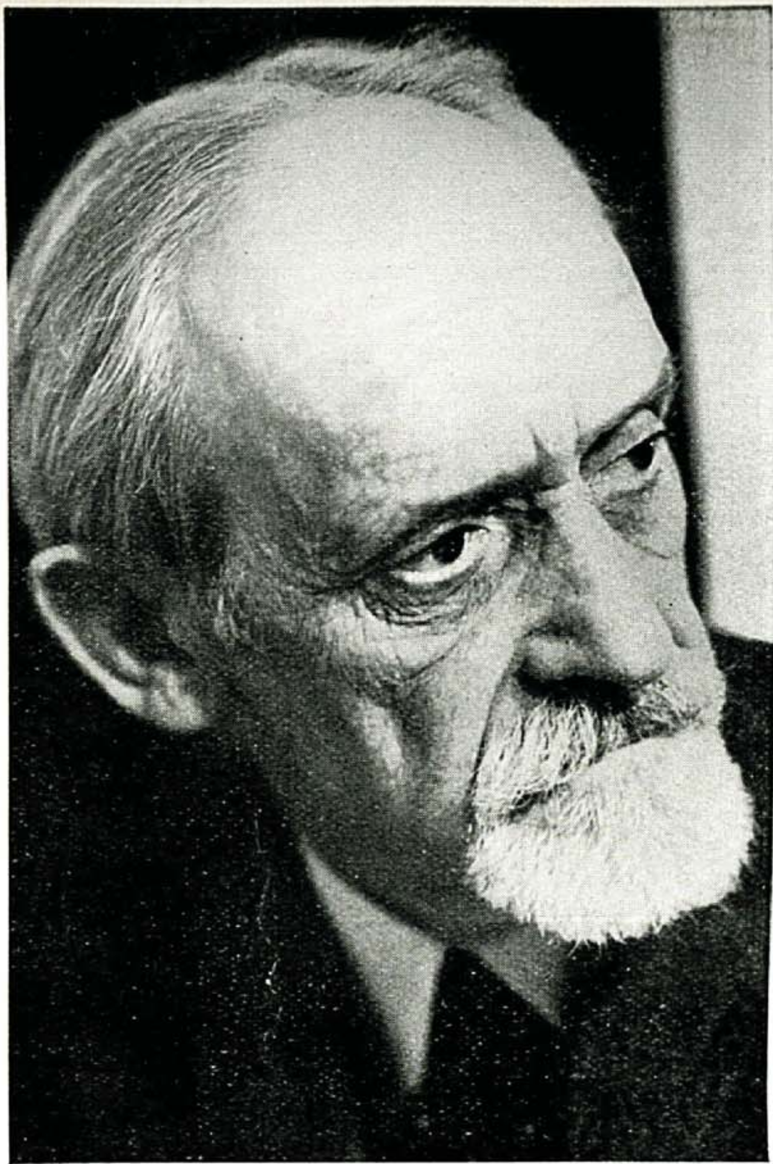




東京精神分析學研究所
本郷區動坂町三二七
振替・東京七八八一七番



木村廉吉氏（探訪欄參照）



イェーケルス氏（彙報欄參照）

Dr. Ludwig Jekels

『精神分析』第五巻 第三號 巻頭言

# ★生理と心理との區別はたゞ概念上の事實

心理と生理との關係の問題は、抑々精神分析學發祥の時からの問題であり契機であつたのだ。フロイドが當時取扱つた患者はドラ孃であつて、彼女は實に肉體的轉換性のヒステリーであつた。人々は精神的原因による肉體轉換の病氣を肉體的原因に溯つてその治療に無駄に骨折ると云ふことが實に屡々であつた。

我々は心身の關係を哲學的に研究することには抑々興味がない。恐らくさう云ふ方法による研究は永久に解決に達することはないであらう。何が精神で何が肉體であるかと云ふ概念の探求は、遂に概念そのものゝ成立の生理心理學的研究に溯るべく餘儀なくされるであらうから。我々は生理と心理との概念的內容を區別する必要はない。人間にはたゞ行動があるのみだからだ。さうしてその行動は種々な面から研究せらるべき可能性があるのだ。行動のないところに生活はなく、生活のないところに人間はない。肉體のみの人間は存在せざる如く、心理のみの人間は存在せぬ。併しながら科學は限界の假定をその成立の必然的要請とする。要請せられたる無意識心理現象を對象とするのが科學としての精神分析學である。

# 器質的疾患に於ける心理的要素

木村廉吉

次に述べるところは、アレキサンダーの「精神分析學の醫學的價値」Franz Alexander, The Medical Value of Psychoanalysis, 1932. の中 Psychogenic factors in organic difeases の重要部分をまとめたものである。フランツ・アレキサンダーはハンガリーの故フェレンチの門下で、しばらくベルリンに在つたが、一九三〇年招かれて渡米し、シカゴ大學に精神分析學の講義をしてゐる。識見廣く穩健で好著も多い。『精神分析學の醫學的價値』はフロイドに献ぜられた著書であつて

第一章　精神分析學と醫學
第二章　理論的並びに治療的體系としての精神分析學の現狀
第三章　精神病者の精神分析的處置に關する批判的考察
第四章　器質的疾患に於ける精神的要素
第五章　醫學教育に於ける精神分析學

の五章より成り、そのうち第四章はシカゴ大學で一九三〇―一九三一年に、第一章はニューヨーク醫科大學で一九三一年に講義された內容を補訂したものである。第四章は特に「生理と心理」に關係あるを以て選んだ。

アレキサンダーの他の著書としては

「綜合人格の精神分析」Psychoanalyse der Gesamtpersönlichkeit, 1927.
「犯罪者とその裁判官」Der Verbrecher und seine Richter, 192)
その他がある。前者は超自我に重きを置いた精神分析概論であり、後者は犯罪者の精神鑑定や刑法の問題を精神分析學の立場から論じたものである。

交感神經ならびに副交感神經系統による、大腦皮質と植物性器官との關聯は充分よく知られて居り、この關聯は、身體の何れの部分に起らうとも本來あらゆる末梢的生理過程は心理的要素によつて影響され得る事を暗に意味してゐる。

又一方に植物性器官の自律的機能は、催眠術の如き特別の狀態では暗示による影響が可能なりとも、通例自由意思による干涉を受けつけぬ。それで催眠術の場合の如き特別の隨意的影響は、比較發生的發達の經過中に失はれた古代的機能の再建設と考へて然るべきかとの疑問が起る。

植物性器官の機能の分化と自律化とは、有機體が解決しなければならぬ生物學的過程に對する、人間の適應作用の永い過程であつて、植物性器官の機能を調整するいはゆる自律神經系統の分化は二次的の過程と見做さるべきである。元來の生物學的構成は、外界に對する定位作用と內的過程の調整との兩方の任務を有する、一樣の神經的統制であつたのだ。

中樞神經系統から自律神經系統が全く獨立すると云ふ事は、人の身體中では實現されぬところである。自律神經節と中樞神經系統との間には複雜な相關々係があり、すべての植物性器官は神經纖維を、中樞の源と中樞神經系の外にある交感神經核との双方から受けてゐる。それで自律神經系統なる概念は、解剖的と云ふよりはむしろ機能的である。何故ならば自律神經系は形態的には密接に關聯して居り、內臟器官の神經分布は常に混じてゐるからである。

發達の早期には多分、植物性機能と環境への定位作用との兩者はなほ未だ解剖的に分化せずして、單一の中樞神經

系統によつて統制されたらうと假定される。そこで確かに完全な分離とは云ひ難い、自律神經系と中樞神經との形態上の分離は發達の結果である。

かくて心理的ならびに身體的考究は共に、自律的調整を有する器官が心理的要素に影響されるヒステリー機制は、すべての有機的機能が、隨意筋を統制すると同じ方法すなはち心理學的（大腦皮質的）影響によつて統制されるといふ、失はれた能力へ有機體が退行する古代過程と見做され得るとの假説を支持する事になる。

たとひ吾人が中樞及び自律神經分布の主要性の問題を無視しやうとも、吾人の生物學的遂行の大部分は動力分布によつて、願望情緒等の心理學的要求を表白し充足するにある事は事實間違ひない。この心理的要素の身體的表現は、日常の仕事を遂行する四肢の複雜な運動にあらうとも、悲しい考へが涙囊分泌に影響しやうとも、或は歡喜や恐怖の如き強い感動の下に心臓がより強く打ちはじめ、頬が紅潮したり蒼白になつたりしやうとも、又同時にすべての器官の血液供給の配布が恐らく變化されやうとも、その點に變りはない。

次に考へられる可能性は、皮質下の刺戟は大腦皮質からの影響すなはち間腦の植物中樞への心理的影響に基づいてゐるといふ事である。精神分析的經驗がこの假定を確かめる。自分の扱つた或る例に於ては、他の人への強い依頼心や人から愛せられ世話されたいといふ願望があつたが、それが獨立、成功、活動等の男性的の考へに支配された意識我によつて抑へられた。そして抑壓された。受動的願望は意識的人格から表白を阻まれて、胃症候にその發動力表現の途を見出した。

人が愛せられ世話を焼かれてゐると感ずる最初の狀態は保育の場合であり、愛せられる感じと食を與へられるといふ感じとは、終生感情的に聯合する樣になる。もし母親に愛せられた如く愛せられたいといふ願望が、滿足を妨げられたのみならず抑壓され、すなはち意識からさへも除外されると、それと聯合せる滋養を與へられたいといふ慾求をも動員する事になる。パヴロフの研究から胃の分泌機能が心理的刺戟に依つてゐる事を知つて、吾人は幼い時の樣に

人によりかゝり、人から愛せられたいとの不斷の無意識的願望が胃分泌の慢性刺戟をもたらし、その結果慢性の胃酸過多症を招致し得る事がわかる。不斷の心理的刺戟（やしなはれるといふ無意識的幻想）を受けつゞける胃は、空虚な時も消化の狀態にある樣に振舞ひ、かくて終始胃液の影響の下にあり續ける。しかしこの場合の慢性胃酸過多は神經的基礎の上にある。かやうにして精神分析學は詳細な心理刺戟すなはち無意識慾求が屢々或る器官の機能の不斷の障碍を招いてゐる事を發見するに及んで、「神經的基礎」なる云ひ現はし方に、更に具體的な内容を賦與する事が出來る。

丁度、幼兒の時の樣に愛せられ度いと云ふ受動的の願望が胃の作用に影響する如く、抑壓された恐怖や無意識不安は、血液循環の上に恐れの影響を及ぼす事によつて、心臟の症候を生ずる。今一つ他の定型的の結合は、憎惡や極端な獨立要望と慢性便秘との間の結合である。排泄機能の取締りは、早期の嗜糞的（コプロフィリック）傾向が清潔の躾けによつて破られる、子供への最初の敎育的干渉だからである。

かくて慢性の便秘は屢々その症者の周圍に對する憎惡的態度の表現となるのだ。二年前結婚した或る若い婦人が、結婚當初から慢性の便秘に惱み、毎日灌腸を行ひつゞける必要があつた。しかし身體的檢査を何度繰返しても何の變化も無かつた。

この若い婦人は愛と優しさとを期待して結婚に入つたが、その夫は藝術家であつてその職業にばかり沒頭して、若い婦人に必要な感情などは全然解さなかつた。しかし彼女は幸福な結婚をしてゐる樣に自らを欺いて、直接夫に不滿の意を示す樣な事は決してしなかつたが、分析醫は、例へば結婚最初の日以來夫は一度も、花とか或は他の何かの家庭への心づかひの小さな印を示すものさへ持つて歸つた事がなかつた等の事を聞いて、その夫が妻への心づかひを缺いてゐる事を知り得た。そして直接その夫の印象を得て患者が述べる夫の外貌と照し合せる爲に夫の來訪を請ふた。彼は自己中心的ではあるが、無邪氣で情事などに無經驗な若者だとの印象を與へた。彼は妻がその結婚に根本的に不滿だといふ事がよくわからなかつたが、しかしこの會見によつて深い印象を受け、惡かつたと云ふ自覺を持つて歸つ

た。翌日患者は二年來始めて灌腸する前に自發的に腸の運動があつたと告げた。又、同じ日にそれとは聯絡なしに、夫が結婚以來はじめて美しい花束を家へ持つて歸つた事を報告した。つまりこの婦人は夫の愛に缺けた態度に對する憤りを幼稚な方法で示したのだつた。更に分析すると、なほ他の動機すなはち、子供が欲しいと云ふ願望が重なつてゐる事がわかつた。便秘は又夫が子供を欲しない事に對する反應でもあつた。熟練せる分析者のよく知つてゐる、子供と排泄物との同一化がこの反應の根本であつた。かういふ事がわかつてその便秘は比較的短い分析でなほつた。そして分析が終つてから五年たつてもその間に便秘は再び起つて來ず、全く治り切つてしまつた。治療後數年にして子供が生れた事が多分、この治療上の成功を永久のものたらしめる助けとなつたのだらう。

しかしこの記述の目的は、通例の又ありさうなすべての心理・生理的の相關々係をすつかり說明する爲ではなくて、精神分析的硏究が如何にして「精神的原因による機能障碍」といふ漠然とした概念に特殊な、經驗を基とせる內容を與へ得るかといふあらましを示す爲である。子供の時の樣に可愛がられたいといふあこがれが胃症候を生じたり、抑壓された怨恨が便秘の原因となる事はもはや、喜劇的場面を見たり面白い逸話を聞いたが爲に笑ひ、すなはち橫隔膜や喉頭の筋肉の痙攣的收縮が起る事にくらべてそれほど不思議でもない。

器質的疾患の多くの場合に於てすら、充分な病因的解明を與へる樣な完全な病歷は、醫學硏究室で得られた通例の身體的論據の他に、患者の人格發達や心理的狀態に關する詳細な事實を包括しなければならぬ。

多くの器質的障碍の病因樣式は次の如き型を採る。

慢性の心的刺戟（抑壓された慾求）——機能障碍——器質的（形態的）變化。

（十二年三月）

# 精神分析と條件反射

大槻憲二

はしがき――筆者は生理學や條件反射學には殆ど知識を持たないので、玆に掲げた論文は、米國在住のドイツ出身分析者パウル・シルダーの論文『條件反射と精神分析』(Paul Schilder: Psychoanalyse und bedingte Reflexe, Imago, Heft 1, 1935)の大要を紹介したものに過ぎない。シルダーの態度は如何にも分析者らしく公平穩健であつて而も云ふべきところは堂々と云つてのけ、世のナルチスティッシュな自稱科學者のやうな、感情的偏見を露出させることを恥ぢないやうな人々とは自ら選を異にしてゐるやうである。その意味に於いて私はこの論文を紹介することに安心と喜びとを覺えるものであることを特に附記しておきたい。たゞ併し私は、シルダーが分析學を以て主觀的心理學であることを承認してゐるやうな態度は如何であらうかと思ふ。分析學はその方法に於いては時に主觀的である場合もあるが、その觀察の態度に於いては常に嚴格に客觀的であると私は信じてゐる。從つて人格の全一性と云ふやうな問題に就いてはシルダーのやうに簡單に片づけることは出來ないやうに思はれるが、これ等の諸問題の考究に就いては他日を期することにする。

## 一、分析學と反射學との相異點と相關點

(分析學と條件反射との關係を論ずるには、ルリア(Luria)、イシュロンドスキー(Ischlondsky)並びにフレンチ

(French) 等の諸家の研究を無視するわけには行かない。が、併し彼等諸家もパヴロフ及びその學徒の實驗記錄の尨大なる文献にいさゝか壓倒せられてゐる傾きがある（パウル・シルダーの云ふところに依れば）とのことである。彼等はパヴロフの生理學及び心理學（と果して云ひ得るならば）を確乎不動のものとして考察してゐる。從つて彼等の題目は必然的に解決を見てはゐない。精神分析學は元來、現實生活の諸問題と密接の關係にあるものであるから、有機體及び心理組織のモザイク的構成を假定するところのパヴロフの人工的な心理生理學とは、完全に一致すると云ふ事はあり得ないのである。ゲシタルト心理學や人格全一說が何等かの眞理を保有してゐるとするならば、その時はパヴロフ說は誤りであると云ふことにならざるを得ない。一つの斷定に到達するためには、二つの相異る心理學說を（その內的相剋を見ることなしに）一つの表現形式に押込むと云ふやうなことはなすべきでない。右に名を擧げた諸家の大部分は自分達の窮極的な立場を定めてはゐない。時に彼等は精神分析の考へ方を條件反射の術語で述べてゐたり、また時には條件反射を精神分析の術語で記述したりしてゐる。例へば、フレンチはパヴロフの研究を精神分析學の說明に利用してゐるばかりでなく、その證明にも用ゐてゐる。イシュロンドスキーはまた、心理的過程はたゞパヴロフの實驗の光に照すことに依つてのみ完全に理解され得るものとなると云ふ意見であるらしい。私はこゝでは、條件反射を心理學的立場から理解すると云ふ方法を試みたいと思ふ。もしそれが可能であるならば——心理學としての精神分析學は大いにその方の可能性を持つてゐる——、我々はパヴロフの實驗の結果を精神分析學から理解し得ることになるであらう。もし我々がパヴロフの生理學及び心理學を窮極的に確乎と把握してゐるならば、條件反射から精神分析を理解すると云ふも一つの方法も是認せられるであらう。

## 二、パヴロフ生理學の意義

我々が飢えた犬の口に喰物を投入するならば、その喰物の刺戟に依つて一定の典型的性質の唾液が犬の口腔內に分泌せられて來る。それに反し、鹽水を犬の口に注ぎ入れてやると、別の性質の唾液が分泌せられる。これは無條件反

射である。併し外的刺戟に對する唾液腺の反應は、右に擧げた普通の反應のみには限らないのである。我々の總てが知つてゐるやうに、他の受感的な表皮（眼だの耳だのを包括して）が刺戟されると、唾液腺が分泌し始めるものである。喰物を見たり嗅いだりしたゞけで、唾液の分泌を見るには十分である。そのやうな刺戟を條件反射學徒は、條件刺戟と名付けてゐる。併しこの條件刺戟は、無條件刺戟が續いて與へられた限り、反復に依つて效果を失つて來る。あらゆる視覺的刺戟、あらゆる好ましい音、氣に入つた皮膚の個所に對して機械的道具又は冷熱を加へることによる如何なる刺戟も、唾液腺を刺戟する。但しもしこの刺戟が同時に唾液腺の活動に效果を及ぼすやうにせられるならば……。かゝる種類の反射を人々は人工的條件反射と呼んで、これを普通の條件反射、即ち喰物攝取又はそれに聯關して起る自然的條件反射と區別してゐるのである。實驗的目的のために利用せられるのは殆ど專ら前者、即ち人工的條件反射の方である。

條件反射は勿論、唾液の分泌にのみ限つてゐるわけではない。それはまた意志の自由になる筋肉組織の示す防禦反應に於いても、これを見ることが出來る。この方のやり方は、ベヒテレフ及びその學徒、並びにベリトフに依つて大規模に實驗せられた。

かく說いて來ると人々は一概に、無條件反射は喰物攝取や防禦のやうな根本的本能と多少關係するものであると云ふ風に考へ勝ちである。條件反射もそのやうな根本々能に關係して起ることがあり得るのである。このやうな風に考へることは、併し、不完全である。條件反射はまた、その生命的重要さがそれほどに自明として認められてゐないやうな機能に就いても解くことが出來る。ケイソン及びハッヂンスに依れば、瞳孔に於いて光線反射を起させることが出來ると云ふことである。と云つても瞳孔の光線反射が生命的な重要さを帶びてゐないと云はうとしてゐるのではない。瞳孔が光線に依つて收縮することは、併しながら、これを生物的な根本現象として見ることは困難であらう。

實例として擧げられたあらゆる過程は、反射とも見られるが又意識の微弱な時、或は缺如してゐる時に於ける有機的反應としても、見られる。條件的反射は併し、そのやうな反應にのみ限らるべきではない。それは意思的行爲に就

いても容易に示され得るものであることは、クリューフェルスが猿の「牽引反應」を以て實驗したところに依つて明かである。檻の中に入れられてゐる猿は檻の外にある食物容器には喰物が一杯にあるのだと思つて、容器に附いてゐる綱を引張る。そのやうな引張らせる技法は他の動物、例へば引張ることにかけては第一流の鼠に就いても試みることが出來る。また人間に就いての實驗に於いても、半ば本能的な防禦反應の代りに意志的反應を用ゐることが出來る。レンツは被實驗者の掌に三度指頭を以て觸れ、さうしてその掌を返すやうに命じた。その時、被驗者は掌を伏せた。暫くの會話の後に實驗者はまた被驗者の掌に指を觸れてその時は別に掌を返せと命じはしなかつたのだが、彼は掌を返した。結果に於いては、條件反射の機制は普通に聯想と呼ばれる機制とその意味が似てゐる。で、この心理過程を換言すると次のやうにも云ひ得る。――典型的特質ある全體的狀勢は、客觀的狀勢がたゞ部分的にしか與へられてゐない場合にでもそれ自身を反復せんと努めるものであると。右は意志的行爲の場合であるが、意志に屬せざる神經作用の領域に於いても、全體的狀勢は反復する。さうしてかゝる發見を方法的に利用したのが、實にパヴロフの主要功績である。

## 三、主觀的方法と客觀的方法

パヴロフは連りに反射と云ふ語を口にするが、併し彼の所謂反射とは單純なる機械的過程とは遙に違ふのである。それは一つの錯雜した全體的反應である。そこには動物の「個性」（ペルゼーンリヒカイト）（と云ふ語をパヴロフ自身は用ゐてゐるが）重要な役割を果してゐる。總てかゝる反應はまた、人間の場合にも容易に發見することが出來る。動物及び人間の行動を反射活動として考へるか否かは、勿論趣味の問題である。反射と云ふ語はこのやうな關係に於いてはその特別の意味を失つて、人々が動物の反應の主觀的な方面には興味を持たず、たゞその客觀的な表現にのみ興味を持つてゐると云ふことを端的に示してゐる。さうなると人々はまた主觀的方面一般の存在を忘れる傾きがある。多くの問題に對する客觀的反應を研究することは主觀的反應を研究するよりも方法が單純であると云ふことも、我々は承認すること

が出來る。他の多くの問題に對しては、併しながら、主觀的方面の研究を等閑に附することは出來ない。

ヰイン精神病學會に於いて、マタウシェク（Mattauschek）は次のやうな場合を報告してゐる。――或る男がその情婦との喧嘩の最中に重い癲癇の發作に罹つた。かくして彼等は別れた。暫く日が經つて、彼は偶然に女に出會ひ、第二回目の癲癇發作に罹つた。數ヶ月後に、彼は或る料理店で他家の夫人を見たが、その時その夫人を間違つて自分の情婦であると思つた。するとその時、第三回目の癲癇發作が起きた。

シルダーの一患者（それは醫者であつた）は、彼が或る患者に與へた診斷書に就いて不快な經驗を持つた。その時以來、彼は役人と何か折衝しなければならない時には、不安の感情に襲はれるやうになつた。

或る少女は背後から來る自動車に突倒されたことがあつた。その時彼女は別にひどい怪我をしたわけではなかつたが、併し甚だしい不安に襲はれた。一二ヶ月後に、彼女は或る街路を横切らうとしてゐたが、その時前面から來る自動車を見て、それが背後から彼女を突倒すやうな恐れを持つた。

これ等總ての患者の場合に於いて、以前の狀勢を再現する傾向が判然と見られる。以前の狀勢の一部分、又はそれと似たやうな狀勢が起きると、以前の狀勢の全部が再現せられる。例へば、右に擧げた第一例の場合に於いては、厄介な肉體的結果が生じてゐる。右に擧げた諸患者の內の一人の場合に就いて見ると、その狀勢の具合が一層深く理解せられる。役人はこの患者にとつては父親であり長兄であるのだ。ベヒテレフとイシュロンドスキーとは變態の發生に就いて同樣な機制の存することを示してゐる。我々は何らかの點で違つてゐる二つの出來事に就いて見て十分と云ふわけではなく、あまねく一致する現象を調べて見なければならない。さうしてそれ等の現象は種々な科學的見地から檢討して見なければならない。パヴロフの科學的方法が多くの目的のためには正確な結論を導き出すと云ふ點は、疑ひの餘地ないところであるが、併し別の場合に於いては、心理學的考究がより深き洞察を下し得るのである。

右に擧げた諸々の場合は、パヴロフの所謂「擴散」（Irradiation）の現象を明白に示すものである。

「皮膚の一定部分への本來機械的な刺戟が唾液腺への刺戟作用となるならば、他の部分の皮膚への刺戟もやはり唾液

反應を呼醒ますやうになる。節度計の音に對して條件反射を起す人が別の音でも唾液腺の流出を見るであらう。皮膚に機械的刺戟を與へると同時に何かで突くことにしてそれを幾度も〳〵繰返してゐると、後にはこの突くことだけで唾液の分泌を見るやうになる。何故さうなるかと云ふに、それは兩方の腦半球に刺戟が擴散して行くからである。そこにはまた或る種の實驗がある。その實驗に於いて我々は唾液腺の活動を既在の刺戟と結びつけないで、刺戟から殘留してゐる痕跡と結びつけるのである。即ち、我々は刺戟を加へておいて、その刺戟の消え去るまで暫く待つてゐるのである。それから後に鹽なり喰物なりを口中に入れてやるのである。(中略)節度計を以てする刺戟を十分に長く繰返すと、遂には始終與へ慣はした節度數だけが有效であることになる。さうなると犬は分に於いて百の節度數の刺戟に反應するが、九十六ではもう駄目と云ふわけになる。一定强度の音に對して條件反射するならば、與へられたこの强度の音のみが有效である。高度の亢奮集中のこれ等の場合に於いて、與へられたる刺戟の反復以外にやはり、近似の刺戟の反復も(併し喰物は與へないで)重要である。」

パヴロフはこゝに於いて集中(Konzentration)と云ふ事を論じてゐるのだ。その根柢に横はる思想とは、刺戟がまづ始めに擴散し、やがて再び集中すると云ふことである。(『講義』一五七――一五八頁)

ベリトフは、腦の生理學に於いては、パヴロフの云ふ如き種類の擴散と云ふやうなことは認識出來ないと云つてゐるが、尤な點がある。擴散は極めて迅速に進行するが、併しやはり同樣迅かに消失する。條件的「擴散」は併し、甚だ長く持續せられるものとなつてゐる。生理學的方法に依つては、擴散が如何なる形をとるかは決定出來ない。で、パヴロフの擴散の概念は或る特殊の目的のために造られたものであるまいかと云ふ感じがする。さうして、「擴散」は、既に心理學的性質のものとしてよく知られてゐる事實を、生理學的に云ひ直したものに過ぎないのではないかと云ふ疑問が生ずる。診斷書を書いた醫者の場合に於いては、役人は脅威的勢力の代表である。擴散はあらゆる脅威的人物の上に波及して行く。少女を突倒した自動車はあらゆる自動車と結びつけられる。それを擴散と名付けようと云ふならば、それは勿論差支へない。併しながら私は、それに依つて刺戟が腦半球の上に生理的に擴がつて行くことを

意味することになるかどうかゞ疑はしいと思ふのである。全過程は我々をして寧ろかく考へしむるものであるやうに思はれる。即ち、一つの狀勢（シチユアチオン）は始めには一般的なものとして知覺せられ、その後その狀勢に接觸交渉を持つこと愈々密にしてやうやくその特殊性を知るやうになるのであると。その後になつてその狀勢に新に接觸し、特殊の狀勢は特殊の歸結に導く（パヴロフの集中）と云ふことを認識した時に於いてやうやく、その狀勢を我々は完全に知悉するやうになることは自明である。一般化と云ふことを心理學上に云々することは出來るが、それを表現するとなれば、先づ個々の刺戟が知覺せられて後に至つてそれ等が一般化せられるのであると。併しながら、思ふに、刺戟はまづその一般面から見られて、後に至つてその特殊面から見られるやうになるやうである。パヴロフは是正への傾向を表はすために分化禁制（Differentialhemmung）なる語を用ゐてゐる。それはつまり、我々がいろ〳〵のことを試み、失敗し、世の中と不斷に接觸することに依つて種々なことを知るやうになると云ふ事實を、即ち簡單に云へば「失敗は成功の母」と云ふことを、別の言葉で云つてゐるに過ぎないのである。つまり外界との關係と云ふことを强調してゐるのである。パヴロフはこれと關聯してゐる腦生理過程を發見せんと試みたのである。これは確に不可能な企てゞはない。併しパヴロフが生理學的に述べてゐるところを心理學的に記述することが、腦の中で行はれるところを間接的に表現するになるかどうかは疑問である。

一體に人間の思想に於いては、個々の體驗にして一般的なものと思はれてゐるものが無意識に於いて重大な役割を果すのである。神、父、力などは原始的な思想からは實際に一つのものである。最近の兒童研究によると、幼兒思想の重要な特徴は最初の經驗を一般的法則だと思ひ込むことである。無意識が意識化し始めるや否や、現實の種々な部分と接觸し、遂に「集中」（換言すれば、意識的思考法）を策すやうになる。

我々はまづ一般的關係を知覺し、個々問題の解決が含まれてゐる一般的領域を見るのである。そのやうな一般的認識を以て思想は始まり、このやうに一般に向けられた思想に「心圜」（Sphäre）の名を與へることが出來よう。思想過程に於いてはこの一般化の方向は個々體驗との不斷の接觸に依つてます〳〵特殊化せられる。廣汎な茫漠たる思考

は現實の具體的事實に關係してゐる論理的思考に依つて解消せられて行く。「心團」の概念は精神分析で云ふ無意識の概念と多くの點に於いて一致するが、併し思考の間に起る心理的體驗を強調するものである。無意識思考と云ふものはあらゆる知覺的傾向の缺如してゐると云ふ意味での存在であるとは信じないが、併しフロイドが無意識を論ずる時には、「心團」の中に起る心理的過程を正しく記述してゐると云ふことを私は信ずる。

パヴロフの報告してゐる或る人の實驗に依ると、一つの條件的刺戟の上に更に別の刺戟を加へると一つの强烈な禁制的效果が生ずるとせられてゐる。併しながら同時に、附加せられたる刺戟は條件刺戟の亢奮機能の二三を受繼ぐことになり、從つてこれが單獨に施されても第二次の條件的刺戟となるのである。かくの如き實驗に徵して見ると、パヴロフの云ふ如き禁制は第一次の信號を妨げるが、第一次信號に類似の諸々の信號を妨げることは出來ない。

「禁制的刺戟の作用してゐる間に、近接の個所及び遠隔の個所の亢奮狀態を調べて行くのは興味あることであつた。(中略)近接した個所にせよ、遠隔の個所にせよ、あらゆる他の皮膚個所を刺戟すると促進的效果が現れて來るが、そこには若干の特性が伴うてゐる。潜在時間は歷然と短縮せられる。(四乃至五秒から一乃至二秒に變ずる。)が、一般的效果は常態的效果に比較すると少い。この事實を最も簡單に說明すれば、潜在時間が極度に短縮せられることは刺戟せられた點の被刺戟性の增大してゐる證據である。併しながら禁制的刺戟と促進的刺戟とが作用の中心に於いて同時にかち合ふので、そこから結果し來る效果はその代數的總額を構成するのである。」

この企ては、我々が象徵使用的方法と呼び得るところの一過程への實驗上の類似を示してゐるが故に一層重要である。初めの刺戟はその意義を失ふが、而も隣接個所の刺戟(關係ある刺戟又は類似の刺戟)は初めの刺戟に匹敵するやうになる。そのやうな實例はパヴロフの著作中に幾つも發見せられる。

## 四、反射學の禁制論に就いて

パヴロフ學說中の最も重要なる概念は禁制の概念である。彼はこれを內的禁制と外的禁制とに區別してゐる。外的

禁制ある場合には障碍力に依つて條件反射が弱められるか、或は全然消滅してしまふ。動物の生活環境をいろ〳〵に變へて見ると、それに應じてそれ〴〵の反射的變化が生じて來る。それは宛も、イシュロンドスキーの云つた如く、環境の要求に依つて有機體の內の作用の動きが、工作せられたる反射が、背後に押遣られるやうに見える。併し這般の消息は心理學には前から分つてゐたことである。この場合、禁制と云ふ言葉の適不適も疑問である。寧ろかう云ふ方がよからう。――個々人は生活上一層重要と思はれる部分の狀勢に向つてゐるのである。さうして環境に於けるあらゆる變化は、我々が旣に慣れてゐる狀勢よりも一層生活的重要さを帶びてゐるのであると。

內的禁制は更に一層重要な役割を果してゐる。條件反射の內的禁制には五種の型がある。卽ち（一）解消、（二）遲延、（三）痕跡禁制、（四）條件禁制、（五）分化に依る禁制。

（一）刺戟を何度も〳〵與へておいて無條件的刺戟がその直後に與へられないと、條件反射は解消する。條件反射は、誰しも容易に指摘し得る如く、なほ存續してゐるのである。更に刺戟を續ければ、反射は常に起し得るのである。（五）分化に依る禁制は第一の單純解消に極めて密接に關係してゐる。一つの反射が生ずる場合には、始めにはやはり同樣な信號も一つの反應を呼び起す。併しながら例へば八百の振動數を持つ音が無條件反射に伴うて組織的に反復せられる場合には、一般的反射は特殊化せられ、八一二の振動音は八〇〇の振動音と區別（分化）せられる。

これ等の所謂禁制なるものが生ずることは直ちに了解せられる。何となれば人間は現實界に生活してゐるのであるから。一つの信號に對して無條件刺戟が伴はない場合には、有機體の反應は無意味である。我々は外界の過程に順應して行動したり、肉體的反應を示したりする。我々は現實の中におかれてあり、現實に於いては多少の期待が是認られてあるが故に、條件反射が構成せられるのである。これ等の期待が組織的に裏付られ續けるならば、我々の態度は變更せられねばならない。我々は現實を試驗的に取扱ふ。つまり我々は滿足の得られるやうな行動をとり、滿足の得られないやうな行動はとらない。これ等の機能は、分析學では自我のなすところとせられてゐる。論理學的にはこれは歸納と名付けられる。一つの刺戟が反復的に不滿足な效果を齎すならば、この刺戟はやはり後にも不滿足な效果

を示すだらうと云ふ氣がする。換言すれば、我々の行動と有機的反應とは外界に於ける蓋然性（正に爾々ならむを目安に於いてゐるのである。自我系統に於けるこの機制には、勿論、無意識反應と多くの點に於いて共通的であつてこれによつて見ても自我とエスとの間にあまり鋭い限界線を劃するのは警戒すべきことであらう。

二、條件戟刺が若干時間（一秒乃至三秒間）效果を表はした後に、その條件刺戟に更に無條件刺戟を加へると、條件刺戟は或る時間（その時間は條件刺戟と無條件刺戟との間の始めの時差に相當する）になつてやうやくその效果を露はすやうになる。この反應は時に早くなる傾向がある。さうしてこの反應は無條件刺戟よりも短時間後に起る。

三、所謂痕跡反射はこれと同じ性質のものである。條件刺戟が旣に消失した時には、無條件刺戟が附加せられる。パヴロフは或る禁制に就いて述べてゐるのだ。併しこゝにはまた先取的傾向が存してゐる。こゝに明かに見られるのは「禁制」てふ概念の根據の如何にも不滿足なものであると云ふことである。動物は全的狀勢に對して反應するのであつて、全的狀勢の一部分に對しては全的狀勢が再び現れるであらうと云ふ徵としてこれを受取るのである。期待と準備とは時間隔の中で重大な役割を勤めてゐる。さうしてその時間隔の中で條件的痕跡反射は構成せられる。卽ちその中は心理的な期待影像と言動的な態度とで滿たされる。何故に所謂先取的反應がそのやうに屢々入込んで來るかは、分り易いことである。電氣の刺戟を前にしては、それがまだ觸れさうにもない内から手を引込める準備をしてゐる。これは防禦機制である。喰物に對する條件反射の構成せられてゐる或る人に於いて、條件刺戟があつてまだ反應の起きない間に（實際に唾液分泌の生じない前に）嗜好と喰氣とが起きる。亢奮と禁制とを相互に孤立した、相葛藤する二つの力として見る考へ方は支持することは出來ない。特殊な構成――個人の生物學的要求と密接な關係ある構成――の全的形態として見る考へ方を以てこれに代へなければならない。このやうに考へて來ると、パヴロフの考へ方の主要點「腦の中には部分的に亢奮し、部分的には禁制せられてゐる諸點から成つてゐるところの一つの大きなモザイクがある」と云ふ點とは、そこに矛盾が生ずるわけになつて來る。

四、「動物に對して何ら明白な效果を及ぼさない、無關心な物件をとつて、それを、非常によく反射を示すやうに

なつてゐる條件と共に與へ、これ等兩物件を與へた後で無條件反射(喰物)を與へないやうにすると、この無關心的な物件は條件射に對して益々禁制的作用を示すやうになる。つまり、條件刺戟と無關心物件とを同時に供すると、その結果は常に零になる。條件刺戟だけを與へると、依然としてその效果があるに拘らず……。かゝる現象を條件的禁制と名付けるのである。」(講義、二〇八頁)

條件刺戟と無關心的物件とを與へることは、反射機能に何らの增減がない。寧ろ全然別の形態が生ずる。條件的禁制に關するパヴロフの試みは形態學說の根本的事實に對する實驗的證明である。外界は確に、種々な個々の刺戟の緩和とは異る何物かである。

## 五、禁制說と抑壓說との比較

このやうに種々の禁制があるが、これを精神分析的見地から見ると如何なる意義を帶びてゐるであらうか。フレンチは既にパヴロフの禁制とフロイドの抑壓との比較研究を試みてゐる。ところで、精神分析で云ふ抑壓には非常に複雜な意味がある。思考は「心圏」の中から發展して意識の全的光明の中に齎されると云ふ命題は既に與へておいたが、かゝる命題の中には、一定の選出せられたものが場所を占め、先行經驗のその一部だけが現實に於いて何かの滿足を得るに役立つために選出せられる。分化禁制と解消禁制とはこゝに記述した過程に近い關係を持つてゐると云ふことは既に述べておいた。併しながら精神分析學では、抑壓と云ふ語を普通にはこの意味に於いては用ゐない。精神分析で抑壓と云ふのは、完全に意識せられてあつた一つの經驗が自我によつて能動的に抗爭せられることを云ふのである。外的禁制の方が寧ろこの抑壓の概念に遙に近似してゐる。生物學的に重要な經驗のために他の經驗(それはもし生物學的に重要な經驗さへなければ意識面に存在してゐたのだし、また存在してゐるでもあらうところの)が輕視せられることになる。併しパヴロフの實驗によると、この意味に於いて抑壓に類似したものが一つある。例へば、苦痛刺戟が條件刺戟として適用せられ、攝喰反射の都合のために防禦反應が抑壓せられる場合である。内的禁制又は

外的禁制を抑壓と比較したこれまでの人々はみな誤つてゐた。何となれば、パヴロフの概念構成と精神分析學の概念構成とは、その起源が全く異つてゐたから。とは云へ、亢奮の場合にも禁制の場合にも常にそれが精神分析的見地からは何を意味するかを質して見ることは、當然でなければならない。

パヴロフの云ふ禁制は精神分析學で禁制と云ひ慣はしてゐるものとは一致しないのである。生理的實驗に於いては禁制は忽ち生じて忽ち消失する。パヴロフの禁制は、禁制的刺戟が直接現前してゐると否とを問はず、長い間存續してゐるのであるから、生理學的表現の外衣を纒うた心理學的概念ではあるまいかとの懸念を益々强からしめる。勿論、既存の言葉を種々な意味に用ゐることは各人の勝手である。が、かう云ふ用語上の歪曲は既に反射と云ふ語の用ひ方にも現れてゐるのであつて、それが更に禁制や擴散にまでも及んでゐるわけである。このやうに殊更に術語の用ゐ方を歪曲することに依つて、生理學と心理學との對立が誇張せられてゐると云ふ傾きもないではない。反射、擴散、禁制などの用語は生理學上の意味に於けるとパヴロフの意味に於けるとで、二三の共通點があると云ふことを疑はない。併しこれ等はそれ〴〵相異る生物學的水準に屬してゐて、その重要さは同樣ではない。同じことは、パヴロフ說に於いて重要な役割を演じてゐる今一つの概念に就いても生じてゐる。パヴロフの意見に從へば、亢奮は亢奮の坩堝の周圍に禁制を呼起すものであると。さうして彼はこれをシェリントン（Sherington）の繼起的歸納に結付けた。併しシェリントンの云ふのは、神經中樞の同一點に於いて働いてゐる相反的過程のことであつて、パヴロフの云ふやうな意味とは大分違つてゐるらしい。ベリトフはシェリントン說の妥當性に就いても既に疑問を持つてゐる。

條件的攝喰反射に對する信號としての苦痛刺戟は、その刺戟が始めの程に於いてまだ極めて微弱である時に於いてのみ效果があると云ふことは、重要である。後になつてその苦痛刺戟を段々に强くすることが出來る。それでもその信號としての性質は失はない。我々は現在のところ、かゝる現象を純粹に生理學的表現を以て說明することは出來ない。我々はこれ等の諸現象並びにその結果を、心理學的見地からは理解することが出來る。

## 六、科學の獨立性と分析學徒の態度

パヴロフは屢々强い刺戟、弱い刺戟を云々する。併し如何なる刺戟を强いと云ひ、如何なる刺戟を弱いと云ふか、それは唯結果論に過ぎないやうである。が、こゝに興味ある觀察がある。それは、根本に横たはる生理學的機制を決定することが出來ないから、心理學的事實で滿足しなければならないと云ふことである。

心理過程が腦皮質の過程に依屬してゐることを何人も疑ふことは出來ない。たゞ疑はしいのは種々な考へ方の點――殊に亢奮、禁制、擴散など――である。正しい心理學は必然的に正しい生理學と同じ結果に到達しなければならない。兩者を相互に撞着するやうに發展させると云ふことは許さるべきでない。もし兩者の間に矛盾が生じたとすれば、何處に誤謬が横たはるかを我々は檢べて見なければならない。生理學に於ける如く心理學に於いても、我々は種々の過程を觀察し、その不斷の結合と歸結とを尋ねる。我々が心理的經驗を記述する際に我々は言葉を用ふる。ところが、言葉なるものには、それの與へられてゐる一定の內容が定まつてゐる。言葉は唾液の水滴ほどには客觀的ではない。果して何れをとるべきか。我々は人格を一全體として見る見方、統一體、形成體としての考へ方を棄てるべきか、或は亢奮と禁制とのモザイク。パヴロフ實驗の結果は價値あり興味あるものだが、その生理學は似而非生理學であり、を固執するわけに行かない。（全體性なき寄せ集めもの）として見る見方を棄てるべきか。我々は兩方の考へ方通俗的なモザイク心理學で、術語だけ生理學の術語を用ゐてゐるのである。近代生理學者たちの說に依ると、人間の樣子や態度の反射に於いては本人の言動的態度の全體性と云ふものがより重大な意義を帶びてゐると云ふことである。大腦皮質の神經生理が何らかの別物であるとか、或はより單純なものであるとか考へることは正しくない。私は心理學及び全一性人格神經學には左擔するものであるが、腦皮質の活動を亢奮と禁制とのモザイクとして考へる心理生理學に反對するのである。

心理學は何となく不確實であると云ふやうな感じからして、心理學者並びに精神分析學者たちはたゞあまりに急い

で、動物を以てする試験に於いて實驗的證明を發見せんとした。彼等の觀察が正しいならば（さうして私は彼等の觀察の正しいことを希望してゐるが）何も他領域からの證明を必要としないではないか。彼等は新たな領域に於ける經驗を喜んで參考にするであらう。が、彼等としてはそのやうな證明を待たなければ彼等の觀察が危いのだと云ふやうな感情は持つべきではない。動物試驗の研究はその結果に於いて自明的に確實であつて、何等心理學的見地からの確證を必要とせぬ。併しながら動物實驗の手段に依つて高級の神經活動や動物的態度を洞察しようと思ふならば、その時人々の忘れてならないことは、かゝる實驗の結果が妥當性を要求し得るのは、それが心理學の研究結果と矛盾しない限りに於いてと云ふことである。心理學上の統一性は何等客觀的研究を妨げるものではなく、寧ろそのより深き理解を助成するものである。（完）

附言――イワン、ペトロヰッチ・パヴロフは一八四九年九月十四日、ロシアのリヤザン村の貧しい僧侶の家に生れた。神學校の過程を終へて生理學に興味を覺え、セントペテルスブルグの大學に入學した。

パヴフの條件反射と條件分析學との關係に就いては、本誌昨年五・六月號にドラボヰッチ（延島英一氏紹介）の稿が揭げられてゐる。彼は昨年二月七日にインフルエンザで倒れた。パヴロフは外國語を解せず、論文にみなロシア語で書かれた。彼の文獻（林氏稿）も本誌昨年五・六月號に表示しておいた。

# ベヒテレフ反射學の批判

延島英一

## 一　ベヒテレフとその業績

一般にベヒテレフの名は、ベヒテレフ氏大腦核、メンデル・ベヒテレフ氏反射、ベヒテレフ氏味覺中樞、若干の精神鑑定の獨創的方法、或種の臨床的神經性併發症などゝ關聯して知られてゐる。彼の大腦生理學、實驗及社會心理學に對する多くの、又大きな功績に就ても、朧氣ではあるが知られて居る。しかしベヒテレフは、「反射學」といはるゝ一個巨大な構造の體系を有してゐるのである。此體系は、パッペンハイム教授が獨譯した『人類反射學の一般的基礎、個性の客觀的研究序論』(Bechterev: Allgemeine Grundlagen der Reflexolgie des Menchen; Leitfaden für das objektive Studium der Persönlichkeit. Franz Deuticke, Wien, 1926) によつて、初めて其全貌が世に明かにされた。

此書は、ベヒテレフの三十年餘に亘る勞作の綜合である。しかし此書によつては、彼の方法の方面は餘りよく分らない。此書は主として研究の結果を集錄したもので、方法論については殆んど何も書いてないからである。唯だベヒテレフの方法が、パウロフやウッヅウォースの如き生理學的心理學者の方法と、本質的に異るものでないことが推測されるだけである。彼のレニングラード反射學研究所は、蓄電池、配電盤、繼電器、現時器、曲線記錄器、實驗室

其他生理學的心理學の研究に普通用ひられる標準的裝置を設備してゐる樣である。卽ちベヒテレフの主要方法が、被實驗者を實驗室に隔離し、それに種々なる刺激を與へ、其反應、殊に四肢端の運動神經的反應を、例の精密な機械的及電氣的裝置で記錄するにあることは疑ひを容れぬ。

ベヒテレフの好んで用ふる術語は「聯想反射」(Associative reflex)であるが、これは彼自身の言に徵しても、パウロフの「條件反射」の別名に過ぎぬ。彼の實驗所とパウロフの實驗所は、其規模、方法、一般的な結果に於て大差ないやうである。だが、此兩實驗所の主宰者其人の間には大差がある。パウロフは、ベヒテレフの『反射學』の如き書は決して書かなかつたし、又書かうともしなかつたであらう。

『反射學』は四百三十六頁の書で、樞密顧問官ツェルニイ及譯者パッペンハイム敎授の序文と原著者の序文三個の他に、ソヴエット政府機關新聞の贊同的序文がそれに附されてゐる。此政府機關新聞の序文は、ベヒテレフの書を以て「妥協心理學」の終焉を意味するものであると述べてゐる。

此書の內容は、「聯想反射」の形態や起源の研究だけに止つて居らぬ。人類生活及文化的活動の殆んど全部が、其中で聯想反射で論ぜられ、說明せられ、又それと關聯せしめられてゐる。從つて又すべての心理學體系が、主觀的心理學として批判されてゐる。ソヴエット新聞のいふ「妥協心理學」とは、此所謂主觀的心理學に他ならぬのである。

## 二　所謂主觀的心理學の批判

我々は先づベヒテレフの「主觀的心理學」批判を聞いて見よう。

ベヒテレフはいふ。客觀的心理學とは、人間個性の高等機能を、環境との關聯に於て研究するものである。此機能を「精神的(サイキック)」又は「神經(ニウロ)・精神的(サイキック)」機能となすのは誤りで、「嚴密な客觀的」用語としては、「相關的機能」と呼ぶのが正しい。從來の所謂客觀的心理學は、此意味に於て新しい「反射學」に代られねばならぬ。卽ち人間の高等機能の研究は、先づ「主觀性の桎梏」を脫することから始めねばならぬ。ダーウィン流の理論——精神的影響及それに固有する

法則の科學――の影響の下に生じた所謂實驗心理學は、「妥協の心理學、一つの中間狀態であつた」のである。反射學の發生は此時代の終焉を意味し、それは舊來の誤謬を嚴正に批判して、人類の客觀的研究を確立するものである。主觀的心理學は、自然科學たるに値しないものである。過去に行はれた基本的實驗のあるものが想起せられる。「人類反射學」にとつて基礎として役立つものは、腦道(brain-paths)の研究である。例へば、訓練の結果たる犬の後天的運動、卽ち聯想反射が、S狀廻轉(人類の大腦皮質の前頭捲曲に相當)內に存在するといふことの發見の如き。ベヒテレフ實驗所で行はれた實驗では、犬の皮質的呼吸中樞を除去すると、呼吸の後天的聯想反射が破壞されることが觀察されたのである。

ベヒテレフは、人間に對する嚴密な客觀的態度を養ふには、別の星から地球へ來て、人類を絕對的に客觀的な眼で觀察する存在を想像するがいゝと敎へてゐる。此存在は、人類とは複雜な活動を伴ふが、其反應の或ものは固有であり外的刺激と相關してゐるが、他のものは現在よりも遙かに多く過去の刺激に條件づけられてゐることを觀察するに違ひない。これが卽ちベヒテレフのいふ「單純反射」及「聯想反射」である。扨て此他の星からの來遊者が、人類の文明、其發達徑路を觀察するとする。人類の言語を知らぬ此觀察者は、果して自己の經驗に基く主觀的分析で人類の活動と衝動を理解しやうとするであらうか、それとも我々が微生物や下等動物の生活を研究する時の如く、人類と其環境を嚴密に客觀的に觀察する方法を取るであらうか? 恐らく後の方法を選むであらう。ベヒテレフはそこでいふ。だから「我々も亦」、感情、理知、意志力の發現の如き人類の高等機能の觀察には、此客觀的見地を取らねばならぬ、と。「反射學は、人間の個性に就いての嚴密に客觀的な生物・論理學的科學である。」とベヒテレフは云ふ。

人類の原始哲學は、神人同型觀的である。主觀的考想は、偶像崇拜と迷信を生む。プロタゴラス、ヘッケル、ヴント、エスピナス、フォレル、ロマニイス、タルド、ミュンスターベルヒ、ボアンカレ、ベルグソン、ジェームズ、リッブス、マクドゥガル等の理論は、此意味で、似而非科學的、直觀的、主觀的として捨てられる。言葉といふものは、「我々と相似てはゐるが、しかし正確に同一ではない」他人の經驗を表象する象徵に他ならぬ。他人の自我に對する

理解は、不正確と缺點あるを免れぬ。主觀的心理學は、客觀的與件に統制されぬ限り、信頼に値せぬものである。

ベヒテレフの見るところでは、人類の行動が、一般的外的要素によつて統制されることを示す嚴密な客觀的與件がある。例へば「盜みの數は、裸麥の値に連れて上下する。」故に犯罪を理解するには、犯罪者の個性のみならず、社會的及經濟的要素をも考慮せねばならぬ。同樣に自殺も、大抵は決して一つの原因の結果ではなく、種々なる時期に生じた多數の原因の結果であり、從つて其環境のどれが最も重要性を有するかを決定するのは困難である。

以上の如き觀察から、突然ベヒテレフは意識の問題に轉ずる。彼は此問題を次の樣に扱ふ。卽ち彼はヴント、ヘッケル、ナトルプ、リッカートを引用して、彼等の主觀的方法は問題を解決し得ぬとの斷案を下す。彼は下等動物の中に精神的資質を見出す生物・心理學者の結論も、又中樞神經系統の發達程度を以て意識の規準とする心理學者の見解も、いづれも排斥する。下等動物の本能的及有意的行爲に關する論議は、意識か無意識かの問題を解決せぬとする。主觀的心理學者は、「動物が如何なる發達程度に於て意識に達したかを彼等が述べ得ぬ限り」、進化の法則を辿つて居らぬとするのである。だがもし各生活細胞が意識を有してゐると認むれば、無機界にも亦或形態の意識を認めざるを得なくなる。しかし斯くては背理に陷り、「宇宙意識」の存在でも信ぜねばならぬことにならう。「主觀的心理學は、人類の個人生活に於ける意識の起源を明かにすることが出來ぬ。」

客觀的心理學と主觀的心理學の本質的相違は、硏究すべき現象の性質に關して、見解が原則的に異るといふ事實の中に存する。主觀的心理學は、言語を以つて思考表現の役を勤むる機關と看做してゐる。行爲を以て意志の表現、顏面表情及擧動を感情の表現、循環過程の所産と看做してゐるのがジェームズ、ランゲの理論である。反射學は此理論と反對に、言語、行爲、擧動、循環を、單純反射から敎育と經驗を經て發達し、禁制、分化、一般化に服する反射と看做すのである。思考、主觀的經驗一般は、「禁制的」反射と看做し得るのであつて、それはもし禁制を解かれるならば、遲かれ早かれ客觀世界の中に再現或は行動として現れるであらう。相關的活動は、分析の最後の點では結局エネルギイの表現に他ならぬが、其最も單純な表現形態は「原型質の興奮性」であり、神經と中樞機關に於て電流の如

き效果を伴ふ「神經の流れ」が、其更に複雜な表現であるとするのである。

以上を以てベヒテレフの主觀的心理學批評は打切るが、それに明瞭さや一貫性が缺けてゐても、それはベヒテレフ自身の責任であつて、紹介者の罪ではない。

## 三、精神分析學批判

次にベヒテレフの精神分析に對する批判を聞いて見やう。

ベヒテレフは、ユングを通じて精神分析に達したらしい。彼はユングの聯想に關する實驗から、彼の反射學に至る橋を見てゐる。彼はユングの考へてゐるコムプレクスを、情緒的追憶に影響されて過去の印象から生じたものと理解してゐる。彼の見るところでは、かゝるコムプレクスは、過去の同位的な諸聯想反射が互ひに組合つて長い一系列の痕跡をなしてゐるものであるが、それは好都合な外的衝動に接すると、反射として放射される。ユングの所謂「聯想誘導語」は、集中過程の刺激や、聯想反射の禁制狀態を出現せしめるところの「身振的・身體的」事情によつて惹起されるものである。斯くてベヒテレフは、ユングの研究が反射學――同じく反射のコムプレクス、或は過去に於て反射の痕跡のコムプレクスを假定する反射學――の結果と「完全に一致」することを認めてゐるのである。

ベヒテレフは次にフロイドに轉ずる。精神分析は主として告白による所謂瀉泄(カタルシス)――禁制せられ又は閉ぢ籠められてゐる本能感情の開放を目標とする所謂瀉泄――にあるとベヒテレフはいふ。そして彼は次の如く問ふてゐる。「此は禁制を蒙つてゐる限り當然病源たらざるを得ぬ反射の開放ではなからうか? 瀉泄は、病的狀態の解決を齎らす反射ではなからうか? 泣くことで吐口を與へられる懊惱は、禁制された反射の爆發ではなからうか?」

次いで彼は讀者に、精神分析とは何んであるかを敎へて次の如くいつてゐる。

「それは先づ第一に、病理的症候、時には病的狀態を反映する夢に對する集中、病氣と何んらかの關係を有する有ゆるものに對する集中によつて行はれる負擔の排除である。」

此故にこそ病的狀態の解決を生む解釋が生ずると彼はする。ベヒテレフは、精神外傷を以て神經症の生起能因とするフロイドの見方、ブロイエル＝フロイドの無意識の見方、又「變態反射」及ヒステリイの典型と見らるゝ自我の分裂を生ずると想像されてゐる神經緊張の變化に關するブロイエルの假說にも言及してゐる。だがベヒテレフは、自我の分裂は毫も異常なことではないといつてゐる。非病理的狀態にもそれの伴ふことが見られるから、といふのである。「例へば我々は何も見ないで凝視したり、何を聞いてゐるのか分らずに耳を傾けてゐることがある。」

ベヒテレフは、ブロイエルのヒステリイ現象觀を以て、反射學說を證明するものとなしてゐる。特別な場合には聯想反射は別の途に入込み、その或るものは個人的な反射グループと結びつくが、他の或るものは個人的な反射グループと結びつかないと、反射學は云ふ。こゝに云ふのは「動的顯現に就いてゞあつて解剖學的顯現についてゞはない」のは明かであるが、フロイドのリビドー理論、及抑壓の基本概念は全く無視されてゐる。彼は又性的外傷を以て神經症の主要々素となすフロイドの見方に反對し、其證據に性的ならざる戰爭神經症の實歷を擧げてゐるが、しかしこれに就ては、反對の事實を證明した研究のあることをベヒテレフが知らないのである。

彼は又アドラーの「社會的葛籐」說にも言及し、「其根本に於てフロイドよりも諒解し易い」といつてゐるが、しかし矢張り主觀的だといつて斥けてゐる。

彼はユングの「聯想誘導語」を以てする客觀的檢討を稱揚してゐるが、それは彼がそれを實驗所で神經症診察及犯罪發見に用ひて成功したのである。

## 四、分　析　と　反　射

ベヒテレフは精神分析批判を續けていふ。客觀的方法は、單なる主觀的分析よりも遙かに價値ある多くの結果を與へ得る。主觀的要素、例へば罪障感の曝露は、正確の保障がない。從つてフロイドの抑壓（禁制）、轉換（報償）などの理論は、「唯だ反射學によつてのみ適當な說明が與へられる。」反射學は又精神分析による治療に妥當な解釋を與へ

る。「治療は聯想反射の活動の結果である」からである。反射學の見地から見れば、フロイドの所謂「閉ぢ籠められた」本能感情は、「禁制された身振・身體的」反射に外ならないのだ。この反射が精神分析に依つて、卽ち病氣を起させた「發源的、生起的情況に對する集中」によつて復活せしめられるのである。

「夢は疑ひもなく反射學の發見の正當なるを證明する。」ベヒテレフは、フロイド自身夢の問題を扱つた折、心理機構は反射的に構成されてゐると假定した事實を指摘してゐる。勿論彼は、フロイドがこれを唯だ比喩的に假定したに過ぎぬことは認めてゐるが、しかし「フロイドが、反射學體系を俟たねば複雜な心理的表現を扱ひ得ぬことは明瞭である」といつてゐる。更に彼は言を進めて次の如くいつてゐる。

「フロイドによれば、夢を見ることは、神經の流れが知覺の程度に迄退行することより成る過程であり、此退行は非常に遠く進んで殆んど錯覺狀態に迄達するといふ。だがフロイドは、此退行を知覺點に達せしめるものが何であるかをいつてゐない。彼は唯だ覺醒狀態に於ては、知覺から反應へ赴く神經の流れの不斷の進路を心理裝置が遮斷し得るが、睡眠は退行に道を開けると假定するに止つてゐる。此れでは意味をなさない。」

だが此適當な解釋は、反射學によつて與へられる。指叉は足の裏に一聯の電氣刺激を與へ、それと同時に聽覺の刺激をも與へると、後には聽覺刺激だけでも、興奮した足をピクリと收縮させ得る樣になる。實驗された人間は、實際自分は電氣刺激の場合と同樣な苦痛を感じたと確言するであらう。そこで聽官に於ける新刺激は、皮質の知覺圏から皮膚筋肉面（後頭中樞捲曲）に向つて遠心路の中に弘がり、以て前と同樣の强度の皮膚刺激を起さしめ得ることは明かである。此聯想反射は、一定時間の後には消滅するのを常とする。此消滅は、聯想反射が或抵抗——或種の禁制となる一種の强度な神經緊張——に遭遇するからであると、反射學は說明する。

ベヒテレフは更に進んで、夢並びに思考は、反射が共遠心的傳播の過程に於いて禁制されたものだとする。夢が思考に比して伸縮自在なのは、夢に於ては個性活動から生ずる禁制が除かれてゐるからである。然るに心理學者たちは誤つて、人間は夢に於て錯覺狀態へ退行すると信じてゐる。新反射學說は、夢を說明して、外的反應のないこと（睡

眠狀態）が内的卽ち主觀的經驗の强度を增すといふのである。從つて睡眠中の經驗は、極度に伸縮自在なるを特徵とする。

ベヒテレフは、夢に於ける願望充足のフロイド說を斥ける。子供の場合なら、願望の夢もあるだらう。しかし成年人の心的生活は最も複雜を極めてゐるから、其夢を願望充足を特徵とすると想定することは出來ないと云ふ。願望充足說の深い意味を察せずして……。フロイドのいふ「檢閱」は、他の聯想反射と衝突してゐる或聯想反射のコムプレクスから生ずる禁制力と見なければならぬ。之を要するに問題は禁制過程である。夢は最後迄分析して見ると、反射の禁制と關聯する興奮の單なる内的表現、睡眠に前行する種々な影響と條件の所産に過ぎぬものであるといふ。

ベヒテレフは、フロイドのいふ夢と空想活動との相似を問題とする時には、それに過去の經驗、恐らくは幼兒時代からの經驗の痕跡の蘇生のあり得ること、又此經驗と個性の願望の間に或關係の存し得ることを認めてゐる。しかし彼は創造的活動に於ても亦、それを最後まで分析して見ると、過去の經驗が「再生聯想」反射の形態で再現するのが見られるといつてゐる。

無意識現象の存在は、ベヒテレフにとつては何んら重要性を有せぬ。彼は無意識的乃至意識下的經驗の可能性を認めてゐる樣でもあるが、しかし何んらそれに注意を拂つて居らぬ。彼は聯想反射を、意識的卽ち統御し得る聯想反射と、無意識的卽ち統御出來ぬものゝ二つに分けてゐる。彼のいふところでは、此二種の聯想作用には、積極的な集中作用によつて不斷の關係が維持されてゐるといふ。もし集中作用が除かれるならば、意識的卽ち統御可能な過程が、無意識的卽ち統御不可能な過程に變ずることが起り得るといふのである。

## 五、分析學からのベヒテレフ批判

以上を以てベヒテレフの「反射學」の紹介を終り、以下同書より得た印象を若干述べて見たい。

ベヒテレフの反射學には何か新しいものがあるだらうか？　どう見てもパヴロフを引延して說明したものゝ樣にし

か思へぬ。有ゆる人間行動の表現に、少くとも未だ未熟で不確實な「反射學」といふ術語を當嵌めて見たに過ぎぬやうにしか考へられぬ

ベヒテレフのフロイド派精神分析に對する態度は、確かに的を外れてゐる。彼の檢討してゐる精神分析は、ブロイエル＝フロイドの瀉泄時代、一八九五年―一九〇〇年の原初段階のものに過ぎず、しかも扱ひ方が不充分である上に、其後の二十五年間の長足の發達を全く無視してゐる。フロイドの「夢の解釋」を引用するに當つても、彼は彼一流の遣方でフロイド學說を攻擊し、何も論據を示さずしてそれを排斥してゐる。此事はフロイドの夢の退行理論を否定するに當つて特に甚だしい。更に又彼は初期の理論及自由聯想の方法を理解するに當つてさへ極めて皮相的である。だがベヒテレフを以つて、精神分析の反對者と見ることは當を失してゐる。事實彼は精神分析の主要發見の或もの、例へば無意識の如きを認容してゐるのだが、唯だ分析的解釋と意見の一致を見ず、それに彼の慣用手段たる反射學を押付けてゐるに過ぎない。彼のやつてゐることは、精神分析の直接攻擊ではなく、精神分析を誤つて引用してそれを言紛らしてゐるに過ぎぬ。

『反射學』の初めの方で、ベヒテレフは言葉は不完全な、信賴に値しない表現であり、主觀的で、個人的で、特異的で、科學的研究には不適當なものだと述べてゐる。個人の個性の研究をなすに當つて、其性質に於て極めて個人的な材料を如何して無視し得るかは、全く諒解に苦しむところである。これはベヒテレフの精神的缺陷の一例に過ぎぬ。材料としての言葉が、高い個人的特徵を有してゐると認めることは、其儘取りも直さず人類の個性研究に、それが非常な價値のあることを强調することになるのを彼は知らないのである。言葉の缺點として彼のいつてゐることは、要するに其意義が不變でないといふことである。彼は問題に直面し、言葉の意義の可變性を償ふ方法を見出すことをしないで、其全研究を無益だとして拋棄し、「客觀性」を强調してゐるのだが、其客觀性とは、結局波動記錄器で記錄し得る個人の運動神經的表現を研究するといふことに過ぎない。斯る本質的缺陷は、致命的な結果を其研究に生ぜざるを得ぬのである。

此缺陷から生ずる悲喜劇的結果は、ベヒテレフが其反射學のドグマを殆んど偏執的な狂熱で固執する擧句、遂に自身が心理學に於る最極端な主観派――材料の選擇に於て恣意的であるといふ意味に於て最も極端な主観派――となるといふことである。ベヒテレフの材料が、彼が考へてゐる程決して客観的でないことに注意せよ。或刺激に對する患者の苦痛感の報告(勿論言葉での)は、例へば恐迫観念の報告と同様に主観的である。

最後に『反射學の一般的基礎』の積極的方面に數言を費して此稿を終りたい。此書は根本的には失敗であるが、しかし著者の同情的且つ普遍的精神をよく示し、又反射學の完成を一生の事業としてゐるベヒテレフの其研究及學派に對する熱意、大科學者に相應しい藝術的氣質をよく表してゐるものである。

以上は米國の分析學者ドリアン・ファイゲンバウムの説を紹介したものである。紹介も批評もあまりに簡單に過ぎて物足りないが、大要を傳ふるに足れば幸である。(完)

# 芭蕉一茶比較考

## ——蚊帳と笛と——

倉橋久雄

芭蕉が笛の愛好者であつた事はあまり知られてゐないやうだ。書翰集（岩波文庫）の中、元祿五年一笑宛のにかうある。

然は御約束の水鷄笛送給忝珍重存候。此さとの人々聞馴ず女子ともゝ集、我を藝者の樣に申おかしく候。行脚さき國ところにより一向音をしらぬ人御座候間、吹てきかせ可申と悅申候。鹿笛も木曾よりもらひ申候。ほとゝぎす笛も御さ候はゞほしきものに候。水鷄笛つくる人はつくるべしと存候。乍二御面倒一是も御きゝ可レ被レ下候。出來候はゞ御賴可レ被レ下候。賴入申候。何にても相應望之もの細工人へ謝禮いたすべく候。殺生の道具ながら水雞笛しか笛も只ふくはおかしく候。（後略）

笛と云へば私は直ぐと笛吹牧童の傳說を連想する。大槻氏『笛吹牧童傳說に就いて』（本誌四巻五號）に「笛を吹くと云ふことも、相手を支配してゐると云ふことを意味してゐる。『笛吹けども人躍らず』といふことは自説を提唱して人が賛成して來ないと云ふ意味に用ふる。人を說伏すると云ふことは、思想上で人を躍らせると云ふことである」とシェイクスピア牛若辨慶の例をあげ「笛を吹く事が既に相手を自由に支配してゐると云ふことを象徵的に意味してゐると思はれる。恐らくこの象徵は世界的なものであらう」とある。

殊に芭蕉の笛は一人娯んで感傷的になるといふのではなく、旅などにあつて他人に聞かせ衆と共に樂しんだものである所にその支配慾が一層現はれてゐるやうである。その笛さへも、ひといろではなく幾つも所持し、それ〴〵の音色を好んだらしい。「ふり賣の雁哀れなりゑ

びす講」の句に「とかく雁に成てもいろ〳〵有、大ぜいに賞味せられよろこばす雁も有、ふり賣にせらるゝ雁もありと申事ばかり」と附記し吟笑宛に便りしてゐる。芭蕉はふり賣の雁に哀憐こそ覺えたれ、自身は大勢に賞味せられる雁に擬するだけの自負はあつたのであらう。これを次の曲翠宛のものと對比して見よう。

一風雅之道筋大かた世上三等に相見え候。點取に晝夜を盡し勝負をあらそひ、道を見ずして走り廻るもの有。彼等風雅のうろたへものに似申候へ共、點者の妻子を腹ふくらかし、店主の金箱を賑はし候へば、ひが事せんには増りたるべし。

又其身富貴にして目に立慰は世上を憚り、人事いはんにはしかじと日夜二巻三巻點取、勝たるものもほこらず。いざま一巻より又とりかゝり、線香五分之間に工夫をめぐらし、事終て卽點など興ずる事とも、偏少年之よみかるたにひとし。されとも料理を調へ酒を飽迄にして、貧なるものをたすけ、點者を肥しむる事、是又道の建立の一筋なるべきか。

又志をつとめ情をなぐさめ、あながちに他の是非をとらず。これより實之道にも入べき器なりなと、はるかに定家の骨をさぐり、西行の筋をたどり、樂天が腸をあらひ、杜子が方寸に入やから、わづかに都鄙かぞへて十ヲの指ふさず。君も則此十ヲの指たるべし。能く御つゝしみ御修行御尤奉ㇾ存候。

これで當時の俳壇狀勢もほゞ窺へやう。蕉門と云へどまた論外ではあり得なかつたであらうから、こゝに於て芭蕉の笛は益々變幻自在に、技巧的にも功利的にも洗練琢磨せられ、その妙味を發揮されざるを得なかつたであらう。全國に句碑二百三十餘を數へ江戸だけでも四十以上もあり、奥の細道の模倣者など數知れず、終に俳聖として大成し多くの崇拜者を出した事も、その一因として笛吹き修行があづかつて力あつた事であらう。「喪に居る者は悲をあるじとし、酒を飲ものは樂をあるじとす。愁に住する者は愁を主とし、徒然に住するものは徒然を主とす。淋しさなくばうからまし」と西上人の詠侍るは、さびしさを主なるべし」と「徒然の詞」にある如く、芭蕉の處世法は可成現實的なものであつたのであらう。野水宛のものに「折から毎日の客來にはこまり迷惑に存候」とあり、然もこの人達に依つて衣食住を保證されてゐる以上、さう無下にも扱へまいし、時には「米くるる友をこよひの月の客」とせねばならない事もあつたであらう。また反面には「人に家を買はせて我は年忘」と云ふ事もあり得たらう。

「烏の賦」に云はく「汝が罪をかぞふる時は、其德小に

て害又大なり。就中かの觜太は性佞强惡にして、鷲の翅をあなどり、鷹の爪の利ことを恐れず。肉は鴻雁の味もなく、聲は黄鳥の吟にも似ず。啼時は人不正の氣を抱て樂ならず。凶事をひいて愁をむかふ。里にありては栗柿の梢をあらし、田野に有ては田畑を費す。粮に辛苦の勞をしらずや。或は雀のかい子をつかみ、池の蛙をくらふ。人の尸をまち、牛馬の腸をむさぼりて、終にいかの爲に命をあやまり、鵜の眞似をして、あやまりを傳ふ。是みな汝むさぼる事大にして、其智を責ざる誤なり。汝がごとき心貪欲にして、かたちを墨に染たる、人に有て買僧といふ。釋氏も是をにくみ、俗士も甚うとむ。嗚呼汝よくつゝしめ。」これこそ芭蕉が烏と同一化し、これを以つて自戒の辭としたと云へるであらう。

然もなほ我と我吹く笛の音色に恍惚とし、人を躍らせ得る自負と喜悦に十分滿足した事もあうたかも知れない。「虛栗集」跋に

・「栗とよぶ一書、其味四ッあり。

李杜が心酒を嘗めて、寒山が法粥を啜る。これに仍て其句、見るにはるかにして、きくに遠し。

佗と風雅のその生(ツネ)にあらぬは、西行の山家を尋て、人の拾はぬ蝕栗也。

戀の情つくし得たり。むかしは西施が振袖の顔(カンバセ)、黄金(ハ)鑄二小紫一。上陽人の閨の中には、衣桁に蔦のかゝるまで也。

下の品には眉ごもり、親そひの娘、娶姑のたけき爭ひをあつかふ。寺の兒、歌舞の若衆の情をも捨ず。白氏が歌を假字にやつして、初心を救ふたよりならんとす。

其話震動虛實をわかたず。寶の鼎に句を練て、龍の泉に文字を冶(キタ)ふ。是必他のたからにあらず。汝が寶にして、後のぬす人を待。（芭蕉洞桃青鼓舞書）

これを以つても、いかに芭蕉が世情に通じ、人心をつかむことに優れてゐたかゞわかるであらう。これと云ふのも青年期の苦行が、そしてなほ憶測すれば彼の持つ根深い罪障感がこれをなさしめたのでもあらうか？

魯庵の桃青傳に、喜多村信節の說として「箱庭（信節號）の過眼錄に芭蕉が官金を拐帶して、時の奉行所にて處分を受けし一事を揚げたりといへども過眼錄は未だ窺はざれば實否を知らず云々」と。

支考の『露川責』（享保八年作）に「昔西行、宗祇など、兼好も長明も、今日の芭蕉も酒色の間に身を觀じて風雅の道心とはなり給ふ。」云々。

二十九歲の芭蕉曰「浮世五十年一犬もまだ伸びぬ花の枝、咲くまでのあひ遠なれば、まづ眼の前の晩鐘寺の今

日の花見こそ尊けれ。云々。なほ「貝おほひ」に「伊勢のお王は鐙か鞍かと云へる小歌なれば、誰も乗りたがるはことわりなるべし。云々。京女郎にほの字とは、誰もすき鍬のかねぐ＼望む事なれど云々。

かくの如き蕩兒らしき言ひ分も、胡中「略傳」によれば、「延寶二年寅（三十一歳）の歳薙髪なし給ひ風羅坊といふ。杉風志厚くして、深川に庵を結びて入れまゐらす」云々と。これは性禁斷をも意味するものであらうが、これが單なる放蕩の結果に歸するべきでなく、その底にエディポス的な罪障感が伏在せることをも語つてゐるものではあるまいか。「住みつかぬ旅の心や置火燵」、「秋ちかきこゝろのよるや四疊半」、「蔦を着て誰人います花の春」、「預けたる味噌取りに遣る向河岸（野坡）芭蕉附句して『ひたといひ出すお袋の事」等がこの心理の鍵ともなるべきか。

古來芭蕉は徳の人であると云はれてゐる。門弟達にとつて芭蕉は父代償であつたのだらう。彼自身もコムプレクス的にさうならざるを得なかつたからでもあらうが、その弟子たちの超自我たらんと努力してゐたのではないか。分析學の命題「徳の高さは罪の深さに正比例する」がこゝにも合致するものゝやうである。

芭蕉は青年期に、俳諧を季吟、宗因に、漢字を物徂徠の詩友田中洞江に、詩を伊藤坦庵に、字を北向雲竹に、醫術を木間道悦に、神道を吉田家に、佛法を南禪寺の或和尚に、禪を鹿島の僧佛頂に、畫を門人森川許六に學んだ。主家を亡命後、名をなすまで、七年を京に、九年を江戸に放浪したと云はれてゐる。芭蕉の人間完成もこの雌伏時代に於てなされたらしい。その笛は今に至るまでなほ高らかに鳴り渡つてゐる。今後も益々その妙音を響かすことであらう。

×

一茶は夏は蚊帳、冬は紙帳をつり放しで、その中で朝晩三度の食事もするし、俳句も作つてゐた。その句「田の人よ御免候へ晝寢蚊帳」、「今までは罪もあたらず晝寢蚊帳」、「蚊帳釣て買物に出たりけり」、「立見ればつぎだらけなりおれが蚊帳」、「初めから釣り放したる紙帳かな」、「留守中も釣り放したる紙帳かな」、「ちりの身とともにふはぐ＼紙帳かな」、「蚊帳つりて食に出るなり夕茶漬」、「獨り寢の大平樂の紙帳かな」、「手をすりて蚊屋の小すみを借りにけり」

蚊帳にしろ紙帳にしろ、分析的には胎内の象徴であらうから、一茶の母コムプレクスもこゝに至つてはすでに病的であると云ふべきだらう。芭蕉の笛愛著と照合せると、芭蕉の方がより昇華された形である事がわかるであ

らう。「亡母や海見る度に見る度に」、「うそ寒や親といふ字を知つてから」、「さらしなや山田の秋を古かゞし身は朽る迄月を守る哉」、「月さへよあの世の親が今ござる」、「蚤の迹かぞへながら添乳哉」、「思ふまじ見まじとすれど我家かな」　きりつぼ源氏も三つのとし、我も三つのとし母に捨てられたれど「孤の我は光らぬ螢かな」　芭蕉を識るに伊賀の故郷はさして重要ではないが、一茶と信濃は離つべからざるもので、殆ど絶對的である。母と郷土がかくも密着してゐる所に一茶の普遍性がある。その信濃の土も『俳諧寺記』には「雪の下の其下の下々の下國、信濃も信濃、奥信濃の片隅に」と言はれ、「しなのぢやそばの白さもぞつとする」、「雪ちるやおどけも言へぬ信濃空」　恐怖やら劣等感やら……。

この一茶はまた乞食の句を多くものした一茶でもある。「母親を霜よけにして寝た子哉」（橋上乞食）「一文に一つ鉦打つ寒さかな」（堂前乞食）「重箱の錢四五文や夕時雨」（善光寺堂前乞食）「しぐるゝや親椀たゝく唖乞食」、「乞食子や膝の上までけさの露」、「烏も巣を作るに橋の乞食哉」、「子あつてや橋の乞食もよぶ螢」等。「乞食の出産祝を見る記」の中で「誠に其たのしむ所王公といふとも此外やはあるべき。財たくはへねば盗人のうれひなし、家作らねば火災のおそれなし。幸にして心を養ふことはなかなか緣ある人にも過ぎたりといふべし……『赤子からうけならはすや夜の露。』」とあり、自ら「乞食長者一茶」、「信濃國乞食首領一茶」など號した。『七番日記』など見ると、乞食の生死を筆頭に、火災、強盜、心中、行倒れ、殺人、死刑、蜂起、自殺（縊死、水死）等の記事によつて埋められてゐるのに驚かされる。勿論當時の世相の反映でもあらうが、一茶がこの方面に特に注目した點たゞ事ではない。然し、流石の彼も乞食に落ぶれなかつた事を幸として「春立やこも被らず五十年」と述懐してゐる。

どうも一茶には成人に對して立向ふ自信がなかつたらしい。芭蕉の如く、西行に宗祇に同一化したやうな所は見當らぬ。わずかに前述の光源氏にそれがあるやうであるが、偶々母の死を同じくした事と、同一化より寧ろ戀愛放浪の選手でなかつた點に劣等感を持つてのものらしい。「下々も下々下々の下國の涼しさよ」、「下々に生れて夜も櫻哉」等。

金錢に對して几帳面で潔癖であつたのも何かコムプレクス的である。その句「三文がかすみ見にけり遠目鏡」「木がらしや廿四文の遊女小屋」、「朝貌も錢だけひらくうき世哉」、「蓬莱や只三文の御代の松」、「なでしこに三文が水あびせけり」等、同類句「七番日記」だけで

も三十餘句もある。晩年頼母子講に五つも加入し、七年間いづれも滞りなく掛金をし、それぞれ丁寧に帳付し、そのまゝ取りもせずに死んだ。（相馬御風氏による、「俳句研究」二ノ三）かうした見方から一茶の「父の終焉日記」も見直されてよいと思ふ。徒らにその孝子振りを讃美感激せずに……。

彼はまた計算マニイでもあつたか。『七番日記』でも、晴雨、在庵、外泊など刻明に記し、月々の終りには、晴廿六内夕六、陰三、雨一、他郷十七日、在庵十三日等累計し、なほ「安永六年より舊里を出でて漂泊三十六年なり、日數一万五千六十日、千辛萬苦して一日も心樂しむ無し、已を知らずして終に白頭翁となる」など結んでゐる。就中閨房の度數まで書いてゐるのは恐れ入る。一茶はかなりのマゾヒストでもあつたらしい。

だが一體、何が斯樣な一茶を形づくつたのであらうか。その「祖母三十三回忌」に

「おのれ三歳の時母のおやは身まかりぬ。老婆不便がりて、むつきの汚らはしさもいとはず、明暮背に負ひ懐に抱きて、人に腰を曲て乳を貰ひ、又首を下げて藥を乞ひつゝ育てけるに、竹の子のうき節茂き世の中もしらで、つか〳〵と伸ける。しかるに八歳といふ時、後の母來りぬ。其母、茨のいら〳〵しき行迹、山おろしのはげしき怒りをも老婆袖となり垣となりて助けましませばこそ、首に雪をいたゞく迄露の命消え殘りて、古郷の空の月をも見め誠にけふの法筵に逢ふことのうれしく、ありがたく、かくいふけふをさへ老婆の守りたまふにや」

一茶の跛行性は繼母に育てられたからと云ふのが通説であるが、寧ろ生母なり祖母なり實父なりが溺愛しすぎたゝめで、あまり幼少時に甘い汁を吸ひすぎたものは心理的に大人となる事は容易に出來がたい如く、一茶の有名な「ひがみ」もその一端は前記の人達の負ふべきものでもあるのだ。一茶が母を失つた時は、父が三十二歳の時で、祖母は五十を越してゐた。八歳で繼母が來てから十四歳まで、祖母は一茶を庇つてゐたと云ふが、これが反つて蚊帳を必要となさしめた因であつた。『親のない子はどこでも知れる爪をくはへて門に立つ」と子供等にはやされ仲間はづれになつたのも、あまりに強い近親姦的環境におびえつゝ、しかもその鎖をたつには弱い自我であつたため子供等にさへ同一化し得なかつたからであらう。だから一茶自身にして見れば、その生涯はまことに辭世の句の如く「盥から盥にうつるちんぷんかん」であつたかも知れぬ。

一茶をよく知る故老の言に、彼が兩親の墓參りをする時は「墓の前に寢たり這ひ廻つたり、居ない〳〵バアを

やつたり、泣いたり、笑つたり、まるで三つ子が駄々をこねるが如き眞似をして騒ぎまはつたと。」（萩原蘿月氏による。氏はこれを珍型墓参りと名付けてゐる。）村人が面白がつてぞろ〳〵ついて行くと「大恩ある佛たちに、自分の赤兒の時の眞似をして見せるのが何よりの親孝行だ」と理屈付してゐたさうである。彼が最もよく同一化したのは、雀、猫、虱、蚤、鹿、蝿、田螺、鶏、鶯、蛙、蚊孑孑、毛蟲等である。内にも雀と蛙と猫（八十句あまり）が多い。その同一化も芭蕉とは大分事變り、まづこんな按配「蚤どもが夜永だらうぞ淋しかろ」「初螢なぜ引返すおれだぞよ」、「寢返りをするぞそこのけきりぎりす」「孑孑が天上するぞ三ケの月」、「世がよくばも一ツ泊れ飯の蝿」等。

×

芭蕉と一茶。猿の句「明神の猿遊ぶや秋の山」、「子を負ふて川越す猿や一しぐれ」　鳥の句「雪の山何を烏の親にあたふ」、「子鴉のきよろ〳〵父と母かな」　天の川「我が星はどこの旅寢や天の川」、「木曾山に流れ入りけり天の川」、「うつくしや障子の穴の天の川」　蜘蛛「蜘の子はみなちり〴〵の身すぎ哉」　粽「粽結ふかた手にはさむ額髪」（芭蕉）「がさ〳〵に粽をかぢる美人かな」（一茶）柳「傘に押分け見たる柳かな」（芭蕉）「そよ〳〵と江戸氣に染まぬ柳かな」（一茶）炬燵「住つかぬ旅のこゝろや置ごたつ」（芭蕉）「大名は濡れて通るを炬燵哉」（一茶）この一茶が芭蕉観「芭蕉翁の臑をかぢつて夕涼み」、「芭蕉忌や鳩も雀も客の數」、「ばせを忌やことしもまめで旅虱」、「芭蕉忌と申すもたつた一人哉」等であつたことも止むを得まい。一茶の本領は「初夢に古郷を見て涙哉」、「いうぜんと山を見る蛙哉」、「花見んと致せば下に〳〵哉」、「雁よ雁いくつのとしから旅をした」、「むら雀さらにまま子はなかりけり」、「梅折れや盗みますぞと大聲に」、「垢爪や薺の前もはづかしき」、「梅の花妥を盗めとさす月か」等々幼兒的な單純な無技巧な所にあるのであらう。

一茶も幼時期にあれほど偏愛されなかつたら、天分も才能もうんとのびまた別の昇華の道もあつたであらうものを……。何としても芭蕉の方が遙かに大人であつた事は云へると思ふ。蚊帳と笛。いみじくもそれ〴〵の人となりや生き方を語つてゐて面白い。（終）

# 意識と無意識との量的關係に就いて

## ――附・社會經濟組織と心理機構――

奥本島田

本論に於いて意識と無意識との量的關係に就いて考究し、更に吾人の經濟生活に就いて論及して見たい。

### 一、無意識觀察の經濟的見地

精神分析學に於いて無意識心理を認識する方法の一つに經濟的見地がある。經濟的見地とは無意識心理の過程を量的なものと見做し、これに對して經濟學的の見方をもつてする方法である。經濟的見地による無意識心理現象の認識方法を取るに到つたのは精神分析法による實驗の結果によるもので、經濟的見地は、同一化、リビドーの內向及び外向、快不快原則（精神作用の量的調節）等を指して言つてゐるのである。これ等に就いて多少の說明を加へて見やう。

同一化――無意識には同一化作用がある。同一化とは一つの共通點を契機として一物が他物とその本質に於いて同一であると認識せらるゝことである。かゝる無意識の認識方法には三種がある。第一は自己を他人に同一なりとすること、これ自己投出であり、第二は他人を自己に取り入れてしまふことで、これ自己への他人攝取である。第三は自己に關係のない他のものが他のものとその本質に於いて同一なりと見做されることで、これ一つの對象と他の對象とを錯綜することである。かように同一化は異つたものゝ相互を等號をもつて結ぶことである。例へば「坊主憎けりゃ袈裟まで憎い」といふことは「坊主＝袈裟」である。

現實に於いては同一物は否、同一といふことは一以上はあり得ないといふのが科學的な事實であるので、科學の無上の侍女である數學に於いても物質の量が同數なる

場合に等號を以つて表はすことにしてゐる。

科學（物質）的に同一性を認識するには量的に等しいことが條件で、その量を數字によつて表はすことが出來るが、無意識の同一化は異れるものに對する心的態度が同一であるために生ずる結果であつて、これを數字にて表はすことは出來ないが、今はその必要もない。俗に言ふ「坊主憎けりや袈裟まで憎い」といふことは坊主と袈裟との同一化である。だから坊主を毆るかはりに袈裟をなぐれば氣が濟むわけである。この場合同一であることを示すものは心的に消費されたるエネルギーである。

次に類似の一例を物理學の重力關係で示せば、五瓦の石と鐵とが釣合を保つてゐる場合に鐵の代りに鉛を以つて釣合うたとすれば、鉛と鐵とはその量に於いて同一である。かやうに心的同一化も科學的（物質的）同一化もその表現形態は異つてゐるが、これを認むるに異らない方法によつて說明することが出來る。

リビドー――こゝでいふリビドーとは人間と動物とに存する性的慾望の事實を言ひ表す精神分析學上の術語である。性的慾望の事實は多種多樣な形式をもつて表現されるので、リビドーなるものゝ意味が非常に廣いものになつてゐる。――このことを物理學的例を以てすれば、ガラスを摩擦すればそこに帶電して輕い物體などをガラスは吸引する。この事實を言ひ表はすために物理學では電氣なる言葉を以てする。だが、この電氣なるものは物を吸引する性質のみを有するのではない。他に、熱作用、化學作用等多種多樣な機能を有するものである。リビドーなる想定はこれと同類的の言ひ表し方である。――でリビドーは單に男女間の性的關係をのみ意味するものではないのであつて、男女間の性的關係なるものは一の表れである。リビドーなるものゝ概念は、生命の創造と更新と結合（これ等は「エロス」といふ概念に抱括される）とに向つて働く有機體の力を意味するのである。

思索に耽つてゐる時、心配してゐる場合などには身體の動作がにぶつてゐること、夢の仕事が眠を保護する方法で――夢見てゐる時はその本人は現實的である――なされてゐることなどは日常吾人の經驗することである。かくの如く心を外的對象から離して自己に引上げてゐる心的狀態はリビドーの內向であり、これに反して現實的に外界に興味を向けてゐる心的狀態はリビドーの外向（纒綿）である。かくの如く無意識作用を量的移動性を以つて說明し認識することは經濟的見地に外ならない。

快不快原則（精神作用の量的調節）――精神分析學に於いては、あらゆる精神作用は緊張から生ずる不快なる狀態を避けんがために、その緊張は常に自働的に調節さ

れるものだといふことを認めてゐる。その結果、精神作用を説明する上に於いて經濟的見地を取り入れるやうになつたのである。即ち、快感は、一定の場合に於ける興奮量の減少に基き、不快感はその增加に基づくものであると、説明される如きである。

## 二、數學の心理的意義

以上で大體無意識心理を認識する一つの方法としての經濟的見地に就いて述べたが、この經濟的見地とその概念方法に於いて等しいものは數學であるやうだ。數學は現實的現象を數量的に認識し、これを數的に説明し取扱ふ方法である。吾人は外界（現實）を數量化することによつてリビドーを外界から引上げてしまつて數量的思考に纒綿する。數量化されたる問題は一定の思考經過をとることになり、其結果は再び外界の對象に飜譯されることによつてリビドーは外的對象に向ふことゝなる。要するに、數學が現實的不可能を可能な代償に轉換する點に於いては、無意識の同一化作用と異るところがない。たゞ前者に於いては、その代償が原體に還元せられて現實的妥當性を有すると云ふ點に相違がある。

精神分析の實驗によると、夢は現實的に充足不可能な願望の代償的充足である。前日の現實生活に於いて充足不可能なりし願望は夢に變化される——この場合のリビドーは內向的——。さうして一定の夢經過を辿らなければ醒められないのである。このやうに夢をして一定の過程をたどらしむる心理機制は、數學が一定の數式をして進展變化せしめることゝ少くともその心理機制に於いては同じであるらしいのである。

現實的に不滿であつた心的エネルギーは夢となつて現象し、その亢奮が解放せられること。實驗の結果無意識心理機制は經濟的見地をもつて認識し得らるゝこと。夢の心的機制は數學的であると認めらるゝこと。數學は現實現象を數に飜譯し置換へ代償して説明し取扱ふものであること。以上の諸事實から演繹すれば、數學發生の契機は少くともそのリビドー關係に於いては夢の如き無意識心理機制と同一であり、困難なる現實を自由に取扱はうとする願望の所業としては酷似せるものと言ふも誤りではなからう。

## 三、社會經濟生活の心理機構

次に吾人の社會經濟生活を意識と無意識との量的關係に就いて論じて見たい。

都市經濟生活よりはるか以前の狩獵時代に於ける人間生活の物質的資料は私有の必要もなく、人々は地上のも

のを自由に攝取して生活してゐたであらうことは想像するに難くはない。

其後に於ける都市生活の發達は人口の增加並びに環境に於ける生活資料の缺乏等の外的原因により狩獵時代の生活態度を困難ならしめ、したがつて狩獵時代の生活心理は抑壓されなければならなくなつたのである。都市生活に於いては生活の物質的財貨は數量化されて（金）に還元せられ資本主義經濟社會を現出してゐるのである。物質を數量化して取扱ふことは、無意識心理に於いて現實的に滿されない願望、卽ち無意識裡に抑壓されてゐる狩獵時代の物質的生活心理で、それは今日では社會經濟生活によつて現實的に充足されてゐるのである。資本主義經濟社會生活は社會的に是認されたるもので、これ狩獵時代生活心理の昇華である。精神分析學（深部心理學）から資本主義經濟社會生活を說明すれば、現實の困難なる中で無意識（エス）の願望を充足することを社會道德（超自我）が承認し、自我がこれを行ふことが可能であつた結果成つたものである。だが、其後各種の事情が關係して三つ（エス、超自我、自我）の調和が困難となつてゐることもないではない。で、吾人は超自我と自我との承認する生活によつてエスの願望するところを充足することが出來れば現實的快感が得らるゝのである。吾人の有機體としての社會經濟生活は常にかくの如き方法で快不快原則によつて自動的になされてゐるものではあるが、これは屢々覆されることもある。（この無意識心理に就いてはフロイドが其著『快不快原則を超えて』の中で詳論してゐる）。——昭和一二、三、一八



本誌前號正誤表

| 頁 | 行 | 誤 | 正 |
|---|---|---|---|
| 一五 | 二〇 | なかつので | なかつたので |
| 三七上 | 一五 | 出張 | 主張 |
| 同下 | 九 | 種額 | 種類 |
| 四一下 | 一 | 本誤 | 本誌 |
| 八九上 | 六 | 東京汽船 | 東京灣汽船 |
| 一〇三下 | 最下行 | S.U.A. | U.S.A. |
| 一〇六上 | 六 | や、遲れ | やゝ遲れ |
| 一〇九下 | 二〇 | 前者 | 前著 |
| 一一〇上 | 一三 | 四月號 | 四月頃 |

# 日常生活に現れた文化の不安

土屋秋實

《「不安」の克服》目次



## （C）日常生活に於ける神經症

人間は本來社會的動物であつて、社會的關係を離れては人間は生活し得ない。「人間」と言ふ言葉は人と人との生活關係を表現したものである。「萬人は一人のため、一人は萬人のため」と言ふ社會生活上の關係が人間の本來の姿である。從つて、人間の肉體も精神も亦社會の文化も政治も、すべてこれらは一定の時代における人間の個體保存本能的、經濟的、階級的生活關係と種族保存本能的、家族的、民族的生活關係との兩者によつて規定されてゐる。それ故に、人間精神の內的根元は肉體であり、その外的根元は社會生活である。人間精神の不健康な狀態卽ち神經症も內的には不健康な肉體にその根元があり外的には不健康な社會生活にその根元がある。從つて、健康な生き〳〵とした辯證法的生活をなすためには、精神分析的觀照によつて神經症を肉體と社會生活との根元に遡つて徹底的に治療する必要がある。その樣な健康な精神も肉體と社會生活とに浸徹し切らないならば眞の味はひは出來てない。徹底し切つた辯證法的健康の中には

宇宙的なリズムとメロディーとがある。

この論文のテーマは、人間の日常生活を經濟生活、家族生活、文化生活、政治生活の四者に區分し、その各々における神經症的傾向の根本的なものを指摘することである。

### (a) 經濟生活における神經症

現代を支配してゐる經濟組織は資本主義的商品經濟である。商品經濟は太古の原始協同社會が崩壞するにつれて發生したもので、それは奴隷勞働の搾取によつて成立した古代社會及び農奴勞働の搾取によつて成立した中世社會における單純商品經濟の段階を經過して賃勞働の搾取によつて成立する現代社會の資本主義的商品經濟にまで發展して來たのである。その商品經濟においては、人と人との經濟關係は商品と商品との交換と言ふ物的關係を通路として行はれる。原始協同社會においては、人と人の經濟關係は商品と言ふ物的媒介なしに直接の人間關係として行はれた。これが階級社會と協同社會とにおける經濟關係の差異をなす。さて商品經濟の本質をなすものは生產手段(勞働力、勞働對象、生產要具)の私有と生產の社會性との矛盾であるとマルクス＝エンゲルスは分析してゐる。そして、單純商品經濟においては生產手段の所有者は同時に生產者であつたが、資本主義的商品經濟においては生產手段としての資本を所有するブルジョアジーと商品として自らの勞働力を賣ることによつてのみ自らの生活を維持する生產者としてのプロレタリアートとの對立が次第に明瞭になつてゆく。

協同社會においては生產手段は社會の共有であつて、生產手段の私有と生產の社會性との矛盾は存在しなかつた。從つて、そこでは勞働は生活の手段であると同時に生活の目的であつた。この樣な生活態度は佛敎團體などに傳統として生かされてゐる。これに反し、階級社會においては生產手段の私有と生產の社會性との矛盾があり、更に勞働は生活の單なる手段であつて生活の目的とはなり得ない傾向がある。從つて、階級社會の經濟生活においては、勞働それ自身が經濟生活の目的となり得ることは極めて稀で、そこでは富の蓄積と地位の獲得とが經濟生活の唯一の目的となつてゐる。そして、この富の蓄積慾は人間の野蠻期乃至幼兒期における肛門性感と無意識心理的關係があり、地位の獲得慾はその尿道性感と意識下の關係があると考へられる。要するに、階級社會の經濟生活はナルチス的である。更に、富の蓄積慾及び地位の獲得慾は性的劣等感を補償する役割を果してゐる。それから富及び地位には父コムプレクスがある。從つて、富を蓄積し地位を獲得することには父殺しの罪障感が必

然的に伴ふ。そして、その罪障感の贖罪のために自殺願望が發生し、その自殺願望を昇華するために宗教が必要となる。この様な無意識心理學的方法によれば、マルクス＝エンゲルスが「資本が作り出すところの生産物たる商品の物神性及びそのより眩惑的な發現たる貨幣物神性」と書いてゐることも容易に理解し得るであらう。

要するに、階級社會における經濟生活は物神化されたナルチス的な資本、商品、貨幣を媒介として行はれるものであり、從つて、それは極めて宗教的である。

そして、經濟生活におけるこれらの矛盾を解決するためには、商品に具現されてゐる生産手段の私有と生産の社會性との矛盾が止揚されなければならないと社會學は說き、心理學はそのためにはナルチスムスを卒業して神經症を解脫することが必要であると主張するが、若し現實に妥當すれば何れの說も眞實であらう。

（b）家族生活における神經症

原始的協同社會においては、兩親と子供との關係及び妻と夫との關係は極めて純粹のものであつて、その間に物神的媒介は存在しなかつた。そして、その原始的協同社會は母權社會であつた。しかし、社會の生産力が次第に增大するに伴つて男性は女性に代つて社會の支配權を握り、こゝに父權的階級社會が發生し、商品經濟が發達し始めた。そして、兩親と子供との關係及び妻と夫との關係は、その間に資本、商品、貨幣等の物神化されたナルチス的な媒介物が入込み、その純粹性は次第に失はれて行つた。この樣にして父權的階級社會においては兩親への子供の隷屬及び夫への妻の隷屬は必然的となり、それは文化的（イデオロギー的）にも亦政治的（法律的）にも確立される樣になつた。從つて、男性に對して女性は母權社會乃至幼兒期における母親の象徵をなしてをり反對に女性に對して男性は野蠻人乃至幼兒（可愛い坊や）としてペニスの象徵をなしてゐる。そして、それは父權的抑壓によつて社會的に禁斷されてゐるために、女性は男性に對して表面上はマゾ的、露出症的であるが內面では却つてサド的、男性器嫉妬的であり、これに反し男性は女性に對して表面上はサド的、窃視症的であるが內面では却つてマゾ的、去勢恐怖＝願望的であり、兩者の相互關係には父權的抑壓による禁斷のために近親愛コムプレクスに基く罪障感が發生し、それによつて甘美な情死願望が漂つてゐる。更に階級社會の商品經濟組織の下においては、子供は兩親によつて必然的に商品として取扱はれざるを得ない。階級社會においては、その經濟生活におけると同樣にその家族生活においても亦性的生産手段（性器）の私有と生產の社會性との矛盾が商品として

の子供に具現される。そして、性的生產手段（性器）の私有とは性器の支配權が社會にあるのではなくして兩親のナルチスムスにあることを意味する。この樣に階級社會においては、子供は兩親のナルチスムスによつて商品として取扱はれざるを得ないためにその本來の潑剌たる創造性は抑壓されて薄弱にされてしまふ。

家族生活におけるこの樣な矛盾を解決するためには、男性と女性及び兩親と子供の各々の肉體的、精神的特殊性を尊重した人間としての自由、平等な權利、義務が社會的に確立されることが必要だと社會學は說き、心理學はそのためには人間のナルチスムスや神經症が治療されなければならないと主張するが、若し現實に妥當すれば何れの說も眞實たり得るであらう。

（c）文化生活における神經症

經濟生活と家族生活とが人間生活のすべてゞはない。その他に文化生活と政治生活とがある。しかし、これら四者は抽象的には相互に區別し得るが、具體的には相互に關聯し合つてゐて判然と區別することは出來ない。

人間の文化生活と言ふのは社會生活に必要な哲學、科學、藝術、道德等のイデオロギーを生產し、且つそれらを實際生活において適用し得る樣に自己を技術的に鍛錬するための生活である。從つて、文化生活は經濟生活や家族生活と密接に關聯し合つてゐて、前者を後者から引き離して考へることは出來ない。そして、經濟生活と家族生活とが根元になつてそこから文化生活が生れ、その生れた子は再び根元に歸命して自らを完成してゆくのが宇宙の法則であると考へられてゐる。それ故に、一個人或は一社會の文化生活を規定してゐるものはその一個人或は一社會の經濟生活と家族生活とであると考へ得られる。後者をより詳細に言へば、個體保存本能的、經濟的、階級的生活と種族保存本能的、家族的、民族的生活とである。

太古の原始協同社會における文化生活には父權的階級社會における樣な生產手段の私有と生產の社會性との矛盾もなく亦父權的抑壓もなかつたので、それは非常に健康で生き／＼としてゐた。從つて、それにはナルチスムス（口唇的、肛門的、尿道的）や異性親に對する感傷愛や或は同性親に對する愛憎アムビヴレンツ等の樣な神經症的な精神は比較的に少かつた。しかし、その後にそれらの神經症的な精神が支配的な傾向になる萌芽がそこにあつたことは事實である。

父權的階級社會の文化生活においては、一定の支配階級の個體保存本能的、經濟的心理卽ち自我リビドーにおけるナルチスムスと一定の民族の種族保存本能的、家族

的心理卽ち對象リビドーにおける異性親に對する感傷愛や同性親に對する愛憎アムビヴレンツとが支配的な傾向となつてゐる。從つて、哲學、科學、藝術、道德などのイデオロギーはすべてこれらの神經症的な心理によつて支配されてをり、更にこれらのイデオロギーは相互にナルチス的に排斥し合つてゐる。この樣な狀態においては各々のイデオロギーがもつ特殊性は生かされず、それらの辯證法的相互關聯性は保れない。

文化生活におけるこれらの神經症的傾向を解決するためには、生產手段の私有と生產の社會性との矛盾が止揚され、父權的抑壓が撤回されなければならないと社會學は說き、心理學はそのためには人間の神經症が治療されなければならないと主張するが、若し現實に妥當すれば如何なる說と言へども眞實ならざるものはあり得ないであらう。

(d) 政治生活における神經症

人間の生活には經濟生活、家族生活、文化生活の他に政治生活がある。政治生活は前記の樣な三つの生活を統一し、それらを指導する機能を果す。

いま假に個人の精神作用を理性(イデー)意志(エゴ)悟性(ロゴス)感性(パトス)の四者に區分すれば、イデオロギーにおいては、理性に相當するのは哲學であり、意志に相當するのは道德であり、悟性に相當するのは科學であり、感性に相當するのは藝術であるが、社會生活においては、理性に相當するのは文化生活であり、意志に相當するのは政治生活であり、悟性に相當するのは經濟生活であり、感性に相當するのは家族生活である。從つて、政治生活とは社會の意志を遂行するための道德的生活であるとも言へる。

原始協同社會においては、旣に述べた如く生產手段の私有と生產の社會性との矛盾及び父權的抑壓が發生してゐなかつたので、祖先達の口唇的、肛門的、尿道的ナルチスムスは社會的權力として確立されず、從つて、異性親に對する感傷愛や同性親に對する愛憎アムビヴレンツは神經症と現れることが比較的に少く、それは極めて現實的に解決されてゐた。そして、そこには未だ個體保存本能的、經濟的、階級的ナルチスムスに基く支配も被支配も發生せず、亦女性に對する男性の支配及び男性に對する女性の被支配も子供に對する兩親の支配及び兩親に對する子供の被支配も發生しなかつた。從つて、そこにおける政治生活は弱者に對する强者の支配と言ふ樣なものではなくして、當時の知識所有者である長老の經驗的意見に基いて行はれたところの、協同社會の經濟的、家族的、文化的事務の交替的共同管理にしか過ぎなかつた。

そこには明朗で平和な「一人は万人のために、万人は一人のための」競爭はあつたが、暗黒で殺伐な「万人は一人のため、一人は一人のため」の闘爭はなかつた。

しかし、その後階級社會においては生産手段の私有と生産の社會性との矛盾及び父權的抑壓が發生したゝめ、支配階級の個體保存本能的、經濟的ナルチスムスは社會的權力として確立され、更にそれは父權として强化された。そして、人々はその重壓の下に神經症となり、すべての生活行動はナルチスムスと異性親に對する感傷愛及び同性親に對する愛憎アムビヴレンツとに基いて行はれた。從つて、階級社會における政治生活はやはり社會の經濟的、家族的、文化的事務の管理には相違ないが、それは「一人は万人のため、万人は一人のため」を目的としたのではなくして、弱者に對する强者の支配がその目的なのであつた。

階級社會におけるこれらの諸矛盾を解決するためには生産手段の私有と生産の社會性との矛盾が止揚され、且つ父權的抑壓が撤回されて、男性と女性及び兩親と子供のそれ〴〵の特殊性を尊重した社會的自由、平等が確立されなければならないと社會學は說き、心理學はそのためには人々のナルチスムスと異性親に對する感傷愛及び同性親に對する愛憎アムビヴレンツとが徹底的に治療されなければならないと主張するが、若し現實に妥當しさへすれば如何なる說も眞實であらう。

× × ×

東洋原始協同社會のイデオロギーを代表する思想家は印度に釋迦がをり、支那に老子がゐる。老子は「天の道は、其れ猶ほ弓を張るがごときか。高き者をば之を抑へ、下き者をば之を擧ぐ。餘ある者をば之を損し、足らざる者をば之を補ふ。天の道は餘あるを損して、而して足らざるを補ふ。人の道は則ち然らず。足らざるを損して以て餘あるに奉ず、いづれか能く餘ありて以て天下に奉ずる。たゞ有道の者のみ、是を以て聖人は爲して而して恃まず、功成りて而して處らず。其れ賢を見はすことを欲せざるか」と言つて階級社會のナルチスムスを鋭く指摘してゐる。

若しこの釋迦や老子が說いた前佛の社會卽ち母權的原始協同社會を社會發展史上の卽自態とすれば、それはその後に自らの內的發展によつてその對自態としての父權的階級社會に推移し、その繼續が現代資本主義社會に到達したのであると考へられる。そして、それは將來において卽且對自態としての後佛の社會卽ち人類的協同社會に統一されるのではないかと考へられてゐる。この過去、現在、未來は永遠に辯證法的螺旋狀運動をなす物質の流

れである。その流れの中に立つて刹那を坐斷すれば、過去は既に過ぎ去りて無く、未來は未だ來らずして無く、たゞ現在の刹那が永劫の過去の因緣を受けて永劫の未來を孕んでゐるばかりである。だが現在の刹那も常に動いてその止るところを知らないが故に執すべき刹那も亦無い。げに「生死事大、無常迅速、光陰可惜、時不待人」である。從つて、過去を追ふ勿れ、未來を求むる勿れ、現在に執する勿れ、不執に執する勿れ。

（一二、二、二六）（未完）

# 夜更けて（マンスフィールド作、一九一七年）

岩倉具榮譯

（ヴァージニアは爐邊に坐つてゐる。彼女の外出用の品物類は椅子の上に投げ出され、長靴はストーブ圍ひの中でほのかに湯氣を立てゝゐる。）

**ヴァージニア**（手紙を下において）＝いやな手紙ね――ほんとにいやな手紙だわ。これでわたしをやつゝけたつもりなのか知ら。それともかういふのがあの人のやり方なのか知ら。（讀む）「靴下を大變ありがたう。この間五足送つて貰つたのがあるから、あなたからのを會社の或る友達にやりました。あなたもきつとお喜びの事と思ふ。」いゝえ、そんなことを誰が喜ぶだらう。わざとこんないやがらせ云つて來たのね。隨分、人を馬鹿にしてゐる。

あゝあ、わたしあの人に氣をお付けなさいなんて、あんな手紙出さなければよかたつんだわ。何とかしてあの手紙を取返す方法はないかしら。わたしもあれをやはり日曜の夕方に書いたんだわ――なんて變な運り合せなんだらう。わたしは手紙を日曜の夕方に決して書いてはならないんだわ――わたしはいつも自分でそんな風にしちまふんだ。どうして日曜の夕方はいつもこんな馬鹿らしい羽目になるのかしら、わたしには分らないわ。わたしは只誰かに手紙を書き度くて――誰かを愛し度くてたまらないんだわ。えゝ、さうよ。あの人達の事を思ふとわたしは悲しくなるのに何となく懷かしいんだわ。をかしいわ、本當にをかしい！

わたしはもう一遍敎會に出掛けて行かなければならない。火の前に坐つて考へ込んでばかりゐるんだから困つたも

のだわ。教會では讃美歌も聞ける。讃美歌は安心して聞き入つてゐられるわ。(彼女は低い聲で歌ふ)「さてまた我等のいとも親しくいとも善きもの〻ために」――(けれども彼女の眼は手紙のその次の文章にチラと輝く)「あなたが自分で編んでくれたとは御親切大變有難いことです」本當に! 本當に、親切過ぎるんだ! 男達つて憎らしく傲慢なんだ! あの人つたら實際わたしが編んでやつたと思つてるんだ。だつて、わたし、あの人あんまりよく知らなんだのに。わたしあの人に二三度話したきりだわ。何だつてわたしがあの人に靴下なんか編んでやるわけがあるの? あの人はわたしがあんな風にあの人に首つたけだと思つてるに違ひない。だつて碌々知りもしない男に靴下を編んでやつたりすれば確かに首つたけだわ。半端のを一足買つてやるんなら全然別の話だわ。い〻え、わたしもう二度とあの人に手紙なんか書かない。――さうきめたわ。それに、そんなことにして何の役に立つだらう。わたしはあの人を本當にしつかりつかまへ度いんだけれど、それなのにあの人はわたしのことなんかてんで氣にとめてゐないんだもの。男つてみなさうだわ。

ある所まで行くといつも男が私から逃げて行くらしいのは何故だらう? をかしいわ、本當に! 男達は始めはわたしを好くの、そして私が平凡ではなく、獨創的だと思ふんだわ。けれどもそれからわたしはあの人達が好きだといふことを示さうとすると――そんな素振りが見えたゞけでも――男達は吃驚するらしく逃腰になりかける。後になつてわたしはそれで悲しくなるんだらうと思ふ。うんと澤山與へるものが私にあることを多分、男達は何とかして知るんだわ。多分そのために男達はおぞけを振ふんだ。お〻、わたしは誰かに與へたい。こんなに限りない、無限の愛を持つてる感じだわ。――わたしは本當に存分に誰かのことを世話してやり度い――彼等を見守つてゐてやりたい――凡ゆる恐ろしいものから守つてやりたい。彼等が何事かをして貰ひたいならわたしこそそれをするために生れて來てゐるのだつていふことを感じさせ度い。誰かゞわたしを必要とし、わたしが誰かの役に立つのだといふことを自覺するならば、わたしは別人になるわ。さうよ、愛されてゐることを感じ、望まれてゐるのを感じ、誰かゞ凡てのことにつき全然――永久にわたしに賴つてゐるのを知ることが、私にとつては人生の祕訣なんだ。さうすれば私は強くて

大抵の女よりも、もつと、もつと富んでゐる。きつと多くの女は自分を——表現し度いといふこの强い旺んな渴望を持つてはゐないんだ。わたしはその渴望が、きつと、花を開くと思ふ。わたしは闇の中に全く包まれ閉ぢ込められて誰も頓着してくれないんだ。私が植物や病氣の動物や鳥に對して「この旺んな愛情を感じるのはその爲なんだと思ふ——それはこの富、この愛の重荷から逃れる一つの道なんだ。それから勿論、植物や動物はいろ〳〵面倒を見てやらなければならない無力なものだが——それは別問題なのだ。けれども若しも男が戀をしてゐるとしたら、彼も亦やはり人を賴らねばならない無力なものであるといふ感じがする。さうよ、きつと男たちも本當に人の力に賴らねばならないものだわ……。

何故だか知らないが、妙に今日は泣き度くなる晩だわ。確かにこの手紙のせいぢやない。こんな手紙なんか何でもないわ。併し何とか事情が變つてくるか、それともわたしが年取る迄こんな風に求め續けて行くのかしらと云ふことをずつと疑つてゐる。私は今だつて前ほど若くはない。皺が出來て、皮膚だつてもう今迄の樣ぢやない。わたしは決して本當に美しくはなかつた。普通の意味で美しくはなかつたが、愛らしい皮膚と愛らしい髮を持つてゐた——歩き振りもよかつた。私は今日鏡で自分を一寸のぞいて見た——腰をかゞめて足をひきづゝて……私はだらしなく老けて見えた。いゝえ、多分そんなには惡くない、私はとかく自分のことを大袈裟に考へる。けれども私この頃は物事に飽きやすくつて——確かにそれは年取つたしるしだ。風も——わたしはもう風に吹きつけられるのに堪へられない、そして足がぬれるのはたまらない。私は之迄そんなことは氣に止めなかつた——私は殆どそれ等を樂んでゐた——それ等はとにかく自然とぴつたり一つになる感じであつた。けれども今は反對になつて泣き度くなり、私を忘れさせる何かを求めてゐる。女が酒を飮むのはそのためなんだと思ふ。本當に變だわ。

火は消えようとしてゐる。こんな手紙なんか燒いちまへ。こんなもの私にとつては何だ。ブッ！ てんで氣にもとめない。私にとつてそれが何だらう。他に五人もの女が彼に靴下を贈つてゐるかも知れない！ それに彼は土臺私の想像した樣な人間であつたとは思はれない。

「自分で編んで下さつたとは本當に御親切で有難う」と。云ふ彼の聲が聞こえる。彼の聲には魅力がある。彼が私を引きつけたのは、聲のためだと思ふ――そして彼の手、それは大變强さうに見えた――それは男らしい手だつた。おゝ本當に、そんなものに感傷的になるな。燒いて了へ……いゝえ、私には今は燒けない――火は消えて了つた。寢るとしよう。本當に愛想づかしゝようと思つたのかしら。あゝあ、疲れた。寢る時には始終頭の上から着物を引つかぶつて――そして泣き出し度くなる。本當にをかしいわ！（完）

**讀後に**――よくも女心を描き出したものだ。轉嫁神經症的な、卽ちヒステリックな女心を描いてゐる。リピドー纏綿の熾烈な要求があつて而もその對象なく、而も益々老いて行つてその希望が反比例的に減少して行く悲劇。老齡の悲劇はまたもや彼女の作に表はれて來た。主人公の名をヴァーヂニア（處女）とは何たる皮肉。マンスフィールド的皮肉！「夜ふけて」の「ふけて」はまた年齡の「ふけ」たるを象徵的に意味するを見落してはならぬ。

# 文藝學と精神分析（ムッシュク）（2）

武田忠哉 譯

これらの、大部分醫學的な教養を持つ著者たちは、最初から、彼等の侵害をジャスティファイするために、いはゞ專門の文藝學の傍らを通過して文學者そのものを引用した。例へば、夢の研究が精神分析の主要な關心を要求した瞬間から、彼等は、それに對する共感の說明――およそ考へられる限り最も適切な――を文學者の口から集め得たのであつた。

つぎのジャン・パウルの言葉はこの場合に屬し、すでにシュテーケルによつても引用されたものである。

「小兒・獸・狂人、さらに、文學者・音樂家・女性・彼等における無意識的表象過程の研究のために、何故、夢が用ひられないか、私は特にそれを怪しまないではゐられない。」

ジャン・パウル、リヒテンベルク、ヘッベルの日記。これらの場合からは、同じやうな證明と豫感の豐富な收穫が運び入れられた。それらは、結局、その總和において、概念的に公式化された夢の分析の序曲をひゞかしてゐるのである。

青年ケラーはおよそ一八四六年から一八四八年まで夢のノートを記した。それは新しい解釋者にとつて一つの寶庫を形づくつたが、特に、つぎの一つの主張をより鞏固にするための他の支柱を意味するにいたつた。――かつてこの主張は、フロイドによつて彼の同僚の專門家に對して擁護されたものである――。

「夢は一つの生々した意味を包含する。したがつて、それは眞面目に關心されなければならない。」

以前にフロイドがイェンゼンの短篇小說「グラディーヴァー」に對して適用したのも、やはりこの同じ見解であつた。

古代・未開民族・精神分析の創始者、彼等のやうに文

學者イェンゼンもまたすべての近代科學に反對しながら、夢に對して一つの意味を容認した。さらに、フロイドは少しも躊躇することなしに、彼自身この文學者と連帶責任を負ふことを聲明した。同時に、彼は「一つの精神病學的テーマーを文學的に取扱ふことによつて、全く美を損はずに正確な結果を生じ」得ることを決定したのである。

現代に於ける精神分析の雜誌は、新しい小說を分析的觀點の下に檢閱し、たえず文學と他の諸藝術の領域を通じて最も多樣な侵入を試みてゐる。かうして、最初に創始者フロイドによつて生みいだされた、文學に對するいちじるしく豐富な諸關係は、今日までこの學說に保持されてゐるのである。

しかしながら、これらの初期の主張に對して、さらに一步を進めた一つの主張が附加されねばならない。すでにきわめて久しい以前から一般に知られてゐるやうに、精神分析は、いまや生成のコースにあるわれ〱の時代の文學――かならずしもドイツ文學に限らない――に對して一つの直接的影響を作用する。例へば、ドイツ表現主義の專門家は、この文學時期がフロイドなしに考へ得られないことを知つてゐる。この時期においてドイツ語の領域に出現した、最も重要な二人の物語作家が示される。その一人のチェック人フランツ・カフカーは一九二四年に歿したが、彼の優秀性は、夢の生活のおどろくべき文學的適用において見いだされることが出來る。おそらくそれは、精神分析なしには殆んど不可能であつたかも知れない。他の一人のアルフレート・デブリーン*は、彼自身神經科の醫者であるが、畏敬にみちた言葉によつてフロイドを保證したのであつた。

*彼の「ベルリーン・アレクサンダー廣場」(フランツ・ビーバーコップの物語)(一九三〇)は、銳化された神經醫的嗅覺と、ノイザハリヒに型式化された表現を隨所に閃めかしてゐる。

トーマス・マンとヘルマン・ヘッセは、彼等の、精神分析に對する驚歎と、彼等自身の作品がこの學說に卽してゐる事實を、公然と聲明した。

アルブレヒト・シェッファーのほとんど浪費的な才能はフロイドのいちじるしい尊敬を招いたが、彼のライフ・ワーク「ヘーリアント」*および他の作品からは、強い精神分析的特徵が示される。例へば、彼の、ライナー・マリーア・リルケに關する評論――インゼル書店から非賣品として刊行された――は、つぎのやうなデディケーションを持つてゐる。

「畏敬と感謝の念において、幼年時代の發見者、かゞやける人格、ジークムット・フロイド教授へ捧ぐ。」一般に文學者の、同じやうな讚歎は、今日、他の國々——特に、フランス——においても指示され得るであらう。フランスでは、フロイドの名がすべての文學グループの合言葉になつたのである。

かうして、彼の書物はわれ〳〵の時代の多くの文學者を明かに力強く感動させた。したがつて、それは少くも現代文學の發展過程における酵母として、文學史家の關心を呼ぶにいたつたのである。

*『ヘーリアント』(一九二一)長篇小說。北ドイツ平野出身の現代人。彼等の生活から選びいだされた畫面。內的にも外的にも偉大な型の國民的樣式をもつ名作。一つの、モヌメンタールな敎育小說。それの充實した思想と深い感情は、おどろくべく成熟した樣式において、ゲーテの規範に向つて努力を示してゐる。」(クルト・マルテンス)

トーマス・マンは、「憂鬱な認識——特に、藝術と藝術家氣質について——」を論じ、それは精神分析によつて彼自身へ導かれた、と云つてゐる。一方、デブリーンは、彼の、七〇歲の敎師(フロイド)に對するスピーチにおいて、つぎのやうな說明へ誘惑されるにいたつた。

「こゝで私は自分の念頭に懸つてゐる一つの意見を特に話したいと思ふ。それは、フロイドはすでに文學に對して影響を與へた、あるひは、將來與へるだらうといふ意見である。

かつてフロイドの深部心理學の結果として一つの深部文學が生じるであらうと云はれた。しかし、これは一つの全き不合理にすぎない。

ドストイェフスキーはやはりフロイド以前に生き、イプセンとストリンベリはフロイド以前に書いた。いな、眞にわれ〳〵が知つてゐるやうに、むしろフロイド自身が彼等から學び、彼等によつて實證したのである。

深部文學者と平面文學者ではなしに、優秀な文學者と劣惡な文學者、それが差異のポイントである。

優秀な文學者は彼等自身の直觀を持つてゐる。それがすべての外部からの借入を不要なものにする。これに反して、劣惡な文學者はそれ〴〵直觀によつて扶助されることが出來ない。」

しかしながら、眞の文學者の影響はけつして直接的な借入のコースにおいては生じない。その點を深く考へるならば、デブリーンの言葉が完全な眞理を含むものと決定されるためには多少の議論を要するのである。

結局、こゝには現代の全面的な恐怖あるひは希望が明かに反映されることを記憶しながら、われ〳〵は精神分

析學者の側へバックしたいと思ふ。

一般に精神分析學者が文學に對して注意を向ける最も深い原因は、勿論、一つの漠然とした愛の感情ではなしに、すでに分析的に規定された一つの觀察に基づいてゐる。それによれば、文學者は彼自身の精神的態度において、神經病者――精神分析による治療の固有な對象――とおどろくべき一致を示し、この類似性から、一つの相互的説明が導き出され、可能にされるのである。

したがつて、彼等は文學を夢と同じ根源から抽出する。何故なら、文學は意識の檢閲を、無意識的なものに有利なやうに制限して示すからである。

――そして、無意識的なものゝ研究、それは精神分析學者にとつてアルファーとオーメガーを意味する――。

彼等の文學評價は、作品からでも文學者の個性からでもなしに、一種の心理過程――(藝術家において、特に有利な條件の下に研究され得るところの)――に對する科學的洞察から行はれる。何故なら、文學者の陳述は、特殊の範圍において、特に確實に、常に無意識的なものを包括するからである。さらに、彼の全存在は、重大な結果を生じる、無意識的なものゝ抑壓と、それの間接的支配に基づくからである。

――但し、後者の場合、文學者の存在は、神經病者の存在とはまた別な方法においてそこに根を持つてゐるのである――。

精神分析學者等は、かつて彼等が神經病者と夢において決定した精神的形象を、いまやはじめて文學者の作品の中に再發見するにいたつた。最初、シュテーケルはこの一瞥によつて生じた熱心に駈られ、その結果、文學者を神經病者と全く同一視する誘惑に抵抗し得なかつた。しかしながら、かやうな觀點は、單に獨占物として彼に委ねられたにすぎない。むしろ、今日、精神分析學者を文學史家から分つ最大の距離は、一つの他の側面、すなはち、整數的・創造的人格に對する侮蔑、といふサイドに開かれてゐるのである。

眞に、精神分析學者が常にかやうな(整數的・創造的)人格から取上げるものは、沒人格的・精神的な態度形式であり、けつして天才に對するユニークな性格化ではない。完成された作品ではなしに、そこに遮蔽されてゐるこの作品の成立の過程と理由が彼を誘惑するのである。むしろ、一つの文學作品がより未完成であればあるだけ、それは精神分析學者に對して、より大きい刺戟を提供する。何故なら、一つの形象の構造は、切斷面、あるひは生長の畸形な部分において最も鮮明に認識され得るから

である。

したがつて、斷片、誇張され、あるひは、未完成に拋棄された處女作、飜案あるひは飜譯された外國作品、それらは、彼が最も強い關心をもつて考察する資料に他ならない。一方、彼が少しの缺點もない完成品に出逢ふときには、彼はあたかも存在しないもの丶やうにそれを無視する。何故なら、藝術的な質の認識はかならずしも深く彼を感動させないからである。

彼は、形成されたものを解體する。一般に、通常の美學によれば、象徴はそれ以上解體されえない一つの要素であるにかゝはらず、彼は、それがより深く分析され得ることを主張するだけではない。さらに彼は眞にそれを外皮と核に打ち碎いてしまふ。そして、たゞこれらの後者、無意識的なものゝ區分だけが彼を眩惑するのである。藝術とディレタンティズムの決定的な境界。藝術と神經病、ノーマルな精神と病的な精神、それらの間における決定的な境界。それらはいづれも精神分析學者によつて拒否される。個々の天才の文學作品ではなしに、一般的——少くも集團的——現象としての、文學することとそのものが彼自身の考察の中心に外ならない。

フロイドは彼の評論「文學者とファンタジー」(一九〇八)において、明かに彼の目的のために、「かならずしも批評家によつて最も高く評價される文學者ではなしに、より地味な長篇・短篇・ストーリーの作家——(その代りに、最も多數の、最も熱心な男女の讀者層を持つてゐる)——を選び出した」のであつた。すなはち、彼にとつては、文學の生産と享受における集團的現象の理解が問題にされねばならない。例へば、彼の學徒の一人は、青年の文學を論理的に正確に編纂したが、こゝでも文學の美的・形而上的祕密ではなしに、その心理的祕密を探しいだす目的によつてリードされたのであつた。

そこでは、例外は、假令それが天才的なものであつても、あらゆる點において相對化され、あるひはさらに、平凡なものに對する標準へ近づけられる。何故なら、精神分析學者にとつて、文學者は無意識的なものゝ內部に生活してゐるやうに映じ、しかも、この無意識的なものは集團的に規定されてゐる。彼(文學者)がこの暗い精神領域の神祕へ、より深く溯航すればするだけ、彼は、彼自身から、とにかく彼の存在の要素——(恐らく一つの、意識的に行動する個性の概念を與へるところの)——から遠ざかつてゆくのである。

精神分析はけつして氣紛れな精神的衝動を認めない。したがつて、また藝術のいかなる場合にも、一つの偶然な、たゞ個性的に條件づけられた資料の選擇とモティー

フの形成を肯定しない。かうして、文學過程においては、無意識的な精神活動の「メカニズム」が、一見自由なファンタジーの遊戯を支配することになる。このファンタジーの君臨が强力であればあるだけ、それは無意識的なものゝ强制作業をより明瞭に提示する。そして、天才的な作家は、他の表現形式――（この無意識的なものによつて、より精密に知れわたつてゐる神經病者・精神病者・神話・夢）――に對してきわめて周知の關係を示してゐるのである。

一方で文學作品の解釋に從事する精神分析著述家の同じ人々が、また他方において、神話研究の問題に沒頭することはけつして不思議ではない。

この神話の成立と發達においては、眞に、それを規定する文學者の映像が全く缺けてゐる。こゝでは、すべての人間が無名かつ集團的である。一般に無意識的過程の心理學は、文學の理解の場合と同じやうに、神話の把握に對しても決定的に重要なのである。

われ〳〵は、類型的な夢の形象――例へば、裸態およびエディポスの夢――によつて、民族のファンタジーの年代と內部構造にまで結論を導くことができる。何故なら本來、民族ファンタジーは同じやうにこれらの夢の形象のモティーフの根柢に橫つてゐるからである。

かやうな方法において、夢の解釋が神話學と、神話の解釋が文學の解釋とそれ〴〵混合してしまふ。さらに、例へば、龍の形體、あるひは「不和な兄弟」に對するかやうな說明は文學史家にとつて輕視されることができない。何故なら、それらはすでに資料的に、過去の文學のテーマーと接觸してゐるからである。勿論、これは必ずしも精神分析的解釋が試みられてから始めて生じた狀勢ではない。しかしながら、三つの分野（夢・神話・文學）が唯一の研究領域へ融合されたのは、かやうな試みにおける新しい側面に屬してゐる。この融合によつて、特に、神話研究の問題が直接的に文藝學へ吸引されるのである――すべてこれら三つの分野は――人間のファンタジーの活動と、それによつて生じる種々の創造物を說明する場合に、それ〴〵相互扶助を提供するものである――。

眞にこれらの結合によつて、またフロイドの文學心理學は從來の他の心理學よりもいちじるしく挑戰的に文藝學に對して切迫するにいたつた。もつとも、從來の心理學においても、文學の美學的問題の研究によつて多くの收穫を生じ得たのではあるが。

その結果として、ファンタジーの活動を促す一定の無意識的衝動力、この活動の成立に關與する一定の精神的

メカニズム、それらが導き出される。さらに、活動は一定の象徴的表現形式において反映し、かやうな形式は解明され得るものであり、またすでに解明されてゐるのである。

例へば、ランクはこのコースにおいて、現に通用する學者の見解とは反對に、ヒルデブラットの歌*の終局をつぎのやうに再構成するにいたつた。すなはち、この場合には子が父に對してキリング・バッチを浴せたに相異ない、何故なら、エディポス葛藤の目下の星座から——同時に、世界文學におけるそれと有緣な飜案を比較することによつて——、かやうな結論は殆んど自明なやうに思はれるからである。

*ドイツの英雄傳說。いはゆるVolksdichtungの現存してゐるものとして、最も古い記念碑的作品。八世紀頃のものといはれてゐる。ゴート族のディートリッヒ傳說の一部を歌ひ、頭韻句法を用ひてゐるために、詩形の點からも多くの問題性を含んでゐるものである。

# 親子（戯曲）

嵐山榮三

**所** T市の郊外

**時** 初秋の夜

**人** 中學校教師　木谷　邦雄　（三四歳）

その妻　良江　（二九歳）

その子　勳夫　（六　歳）

その義母　さだ　（五六歳）

その姉　木村　慶子　（三六歳）

その弟　吉本　次郎　（三一歳）

**舞臺** 中學校教師木谷の家。庭に面した茶の間。向つて左は玄關。右は寢室と二階に通ずる襖。中央に長火鉢。長火鉢の左は臺所へ通ずる襖、右に茶簞笥その上に木谷の亡父の寫眞等。部屋はよく片づいてゐる。

幕明くと、遠くに郊外電車の響が聞え、それが聞えなくなると隣家のラヂオが微かに聞える。

さだは長火鉢の前にゐて慶子と話してゐる。少し、離れて良江が坐つてゐる。勳夫は良江の側で玩具の汽車を動かして遊んでゐる。

慶子　そんなわけですからどうか御願ひします。

さだ　――。

慶子（良江に向つて）良江さん。こん度はいつもと違つて明日までにどうしても間に合はせないと困るんです。

良江　さうですね。わたくし……。

（勳夫、汽車を動かして慶子のそばへ行く）

勳夫　ポツポ〳〵〳〵。伯母ちやん、轢かれるよ。

（慶子、うるさそうに一寸、よける）

良江　坊や、伯母ちやんにうるさいことしちや駄目よ。

（慶子に）わたくしは……。

さだ（良江にめくばせして）まあ、兎に角、邦雄が歸つて來たら相談して置きませう。だけど邦雄はあゝ云

ふ風でなんと言ふか分らないけど……。

慶子　いゝえ、邦ちゃんには言はないで下さい。あの人に言つても無駄ですわ。妾達は本當の姉弟でありながら唯の一度だつてあの人は弟らしくしたことがないんですからね。あんな弟が一體、世の中にあるでせうか!?

勳夫（子供らしく怒つて）伯母ちゃん。弟つて家の父ちゃんのことかい？

良江　坊や。

さだ　それぢや、妾達ではどうすることも出來ないではありませんか。

慶子　――。

さだ　この家は邦雄の家ですよ。この家がどうにか立つて行くのは邦雄がゐるからですよ。

良江　母さん、姉さんの方の御都合も色々あるんでせうから……。

さだ　だつて良江。

良江　母さん。よろしいではありませんか。少し、宅は姉さん達に冷淡だと思ふところもありますわ。

さだ（良江と慶子に）さうかしら!?　妾は出來るだけのことを邦雄はしてゐると思ふがね。（慶子だけに）先月なんか、ラヂオが古くなつたからつて個人教授の月謝を持つて買ひに行かうとした處へ木村が來て泣きついたもんだからみんなやつて終つたぢやありませんか。

慶子　木村がこゝへ來たんですつて!?

さだ　えゝ、先月、來ましたよ。

良江　御存じないんですか？

慶子　知りませんよ。ちつとも……。（さだに）本當なんですか？

さだ　そんな事を嘘言ふわけはないではありませんか。

慶子（さだに對する怒りと木村に對する怒りで興奮する。稍々してヒステリックに）さうですか。よう御座います。どうも失禮しました。（ぞんざいにおじぎをして立つ）

良江　まあ。

勳夫　伯母ちゃん、歸るの？

（慶子、默つて玄關の方へ行く。良江、仕方なく。立つて慶子について行く。勳夫も行く。さだ、坐つたまゝでゐる良江、慶子のうしろから落ちさうになつてゐる慶子の頭のピンをさしてやる。）

慶子（口さきだけで）どうも有難たう。

良江（玄關の間で手早く財布から金を出して慶子に握らせる）ほんの少しですけど文子さんにお菓子でも……。

慶子　いゝえ。いゝんですよ。
（その時、玄關の戸があく。慶子、慌てゝ良江の手から金をとる）
どうも有難たう。
（勳夫、飛んで行く。）
良江　父ちやん、お歸りなさい。隨分、遲いね。
（慶子、出かねて玄關の間に立つ。）
邦雄　お歸りなさい。
邦雄　ウン、只今。今日は母ちやんを困らせなかつたかい？
勳夫　ウン。だけど一寸……。
邦雄（靴をぬぎながら）一寸？又、おやつの時、泣いたのだらう？
勳夫　今日は泣かなかつたの。
邦雄　ぢや、どうしたんだい？
良江　喧嘩をしてお隣りの三郞さんを泣かしたんですよ
邦雄　フン、坊やが泣かしたのかい？
勳夫　ウン、偉いだらう？
邦雄　偉くもないよ。（靴をぬいで）おや、お客さんかい？
良江　一寸前、姉さんがいらしたんです。
（邦雄、默つてゐる。）
慶子（玄關へ出て）邦ちやん、今晩は。
邦雄（ぶあいそに）今晩は。
（慶子、そゝくさと下駄をはいて。）
慶子　では良江さん。さやうなら。
良江　さうですか。では皆さんによろしく。
勳夫　伯母ちやん、又いらつしやい。
邦雄　坊や、子供のくせにおせじなんか言はなくつてもいゝんだよ。
勳夫　ぢや、伯母ちやん、來なくつてもいゝよ。
良江（たしなめて）坊や。
（慶子、可成り荒く戸をしめて行く。三人、茶の間へ這入つて來る。）
邦雄　母さん、只今。
さだ　お歸りなさい。遲かつたから先に食べましたよ。
邦雄　どうぞ。
（洋服を着物に着代へる。勳夫、邦雄のスプリングコートをさぐつて）
勳夫　父ちやん、なにか隱して仰居るでせう？
邦雄　莫迦、母ちやんの眞似なんかするんぢやない。
（勳夫、ポケットから甘栗の袋を出す）
勳夫（良江に）エヘヘ、母ちやん、これ！
良江　いやな坊やね。エヘヘだつて。本當に貴方そつく

邦雄　フウン、お前にこんな氣のきいた物が出來るのかい？

良江　いやね。見損つたわけではないけど……。

邦雄　見損つては困りますわ。

良江　感心なさつたのでせう。

邦雄　莫迦、感心なんかするもんかい。

良江　それぢやどうなさつたの？

邦雄　一寸、氣がきいてゐるけど餘りうまくないつて言はふと思つたんだよ。

良江　まあ、本當に貴方と言ふ方は仕方のない方ね。なんとかかんとか文句をつけるんですもの。まるで文句ばかり言ひに生れて來たやうね。

邦雄　さうさ。

良江　あら、さうだつて……。威張つてるわ。憎らしい。

邦雄　威張つてなんかゐないさ。

良江　威張つてなんかゐないけど……。（一寸後の言葉を考へる。）

邦雄　威張つてはゐないけどなんだい？

良江　知らないわ。（この時、良江、立つて）さう〳〵今夜は漫談があるんだわ。（ラヂオのスヰッチをつける。）

漫談家の聲　そこでそのなまけものは……。

りね。もう寢るんですから明日にしませうね。

（良江、勳夫から袋を取りあげてお膳立てをする。勳夫、口を尖らしてつまらなさうな顔をする。邦雄、飯を食べ出す。）

勳夫　戴きます。

良江　坊や、なにを言つてゐるの？

勳夫　父ちやんの代りに言つたの。

さだ　なに、坊やは甘栗が食べたいのだらう？

勳夫　ウン

さだ　良江、二つ三つならいゝだらう。

良江　仕方のない子ね。（二つ出してやる。）

勳夫　おばあちやんが二つ三つと言つたから三つ頂戴よ

（勳夫、手を出す。）

良江（笑ひながらもう、二つやる。勳夫、みんなポケットへしまつて又、手を出す。良江その手を輕く打つて）　この慾張り坊や。

（勳夫、さだの膝に腰をかけて栗を食べる。）

邦雄　良江。

良江　えゝ？

邦雄　今夜のこれは（お總菜を指して）お前が作つたのかい？

良江　えゝ。さうよ。どうして？

勳夫　父ちやん、なまけものつてなあに？

邦雄　なまけものか？　なまけものつて言ふのは丁度、木村の……。

良江　あなた、子供にそんな他人（ひと）の悪口を言つて聞かせるもんぢやありませんよ。

邦雄　別に悪口を言ふんぢやないよ。事實を事實として……。

良江　事實でもそんなことはいけませんわ。

勳夫　父ちやん、それから？

良江　坊やは默つて仰居い。（良江、立つてラヂオを消す。）

邦雄（さだに）　姉さん、又ですか？

さだ　あゝ。

邦雄　姉さん夫婦もいつまでもあゝでは困るなあ。

さだ　あの人達にはいくらしてやつてもきりがないんだからね。良江が餘り親切にするから此處へ來ればなんとかなると思つて來るんだよ。今日は幾位、やつた？

良江　ほんの一寸ですの。

邦雄　良江、お前は俺の氣持ちが分らないで困るね。俺が姉さん夫婦にそつけなくするのは姉さん夫婦をあんな風にぶら〳〵させて置くのは可哀さうだと思ふからだよ。お前がそんな風にしてはいつまで經つても姉さん達は救はれないぢやないか。働かない者に姉弟だかつて世話をする必要はないよ。

良江　でも……。

邦雄　でもぢやないよ。

（間）

さだ（この話には掛り合いになりたくないと云ふやうな風で）今日はお寺へ行つて疲れたから先に寢るよ。坊やはどうするの？

勳夫　坊や、まだ起きてゐるの。

さだ　まだ、甘栗に未練があるらしいね。

勳夫　ウウン、さうぢやないの。父ちやんと角力をとるの。

さだ　さうかい。（良江に）いゝ加減に寢かしてやつてお呉れ。坊や、温かくしてねるんだよ。

勳夫　ウン。

さだ　この二三日、急に冷えるやうになつたからね。

良江　お休みなさい。（さだ、二階へ上つて行く。邦雄、食事を濟ます。）

邦雄　良江、どこまでだつたかな。

良江　なにがです？

邦雄　說敎さ。

良江　知りませんわ。貴方のやうに文句許り言ふ人の相

手にいつまでもなつてゐられません。坊や、父ちやんとお遊びなさい。
（良江、お膳を片づけて、臺所に立つ。）
邦雄　（坊や、さあ來い。
勳夫　ウン
邦雄　さあ、力一杯やるんだよ。
（邦雄、初め負けてやる。二回目から何回やつても負けてやらない。勳夫、怒つて邦雄の頰をビシャンと打つ。）
邦雄　オヤ、こいつ、親父をなぐつたな。
勳夫　だつて父ちやん、負けないんだもの。
邦雄　負けないつたつて、お前が弱いからぢやないか。
勳夫――。（惡かつたと云ふやうな顔をする）
（この時、良江、臺所から戻つて來る。）
邦雄　良江、お前のしつけが惡いからこの坊主、親父をなぐつたぜ。
良江　（あら、坊や、そんなことしたの。いけませんよ。おあやまりなさい。
勳夫（かしこまつてヒョコンとおじぎをする。）
邦雄　ハハ、よし〳〵。勘辨してやるよ。
良江　こん度からそんなことしたらおきゆうですよ。
勳夫　ウン。
隣家のラヂオ　これで今夜の放送を終ります。皆さん、お氣嫌よう、お休みなさい。
（良江、邦雄に夕刊を渡す。邦雄、夕刊を見ながら庭の虫の鳴音にきゝ入る。風が出たらしく夏の名殘りの風鈴が鳴る。電車の響がはつきり聞える。）
良江　靜かね。
邦雄　ウン。
良江　秋は矢つ張りいゝわね。
（勳夫、良江の膝で寢かゝる。）
邦雄　今日は舊の何日だい？
良江　さあ。
邦雄　十五夜はいつだつたけな。
良江（立って曆を見る）　二十五日よ。
邦雄　フン。二十五日の天氣がよかつたら何處かへぶらぶら行かうか。
良江　えゝ、行きませう。（この時、玄關の外で「今晩は」と云ふ聲がする。）今頃、誰でせう？
邦雄　この間みないに門の戸を明け放しにして置いたのぢやないかい？
良江　だつて、お巡さんにしては丁寧だわ。貴方出てよ。
（邦雄、立って玄關に行く。）坊や。さあ、ねんねしませうね。まあこの頃、急に重くなつたこと。（勳夫を抱いて寢室へ行く。邦雄と次郎登場。二人、無言で

坐ろ。次郎は失業者タイプで粗末な洋服を着てゐる。）

次郎　今晩は。

邦雄　やあ、今晩は。

（間）

次郎　皆さん、お變りありませんか？

邦雄　ウム、御蔭で……。

（良江、登場）

良江　あゝ、次郎さんでしたの。暫くでしたわね。

次郎　御無沙汰致しました。

（良江、坐蒲團を次郎にすゝめてから長火鉢の前へ行つてお茶の用意をする。）

邦雄　隨分、暫く來なかつたけれどなにをこの頃してゐるんだい？

次郎　相變らず……。

邦雄　相變らず？

（直江、お茶を次郎と邦雄に出す。）

良江　お母さんは御丈夫ですか？

邦雄　――。

（間）

邦雄　丈夫なんだらうね。

次郎　――。

（良江、次郎の斜め背後に邦雄に向ひ合つて坐り縫物を始める。）

邦雄　何故、默つてゐるんだい？

次郎　病氣なんです。

良江　まあ、それはいけませんね。どこがお惡いんです。

邦雄（疑って）本當なのかい？

次郎（反抗的な眼をして）――。

邦雄　――。

次郎　兄さん。少し、お金を貸して下さい。

邦雄　何にするんだい？

次郎（盃々反抗的な眼をして）長くないと思ふんです。

良江　まあ。

邦雄　誰が？

次郎　――。

良江（邦雄を眼でたしなめながら）今、病院にでも……。

次郎　病院なんつて……。ろくろく、醫者にも見て貰へないんです。

邦雄　成る程。

良江　貴方！

邦雄（良江に）お前は人からかうかうだと言はれると直ぐ信じて終ふんだね。莫迦な女だな。

次郎　僕の云ふことを嘘だと兄さんは思ふんですね。

邦雄　無條件では信じられないよ。

次郎　後悔してゐます。
邦雄　後悔は先に立たずか。
良江　貴方、次郎さんが悪かつたと思つて仰居るのにそんなことを言つては辛いと思ひますわ。
次郎　兄さんは母が病氣で死にさうだと言ふのに、本當の生みの親が死にさうだと言ふのになんとも思はないのですか？
邦雄　――。
次郎　少しも思つてゐて與れないんですか？
邦雄　思はないことはないさ。併し、俺等の親父が死んだ時とは一寸、違ふね。
次郎　どうしてゞす？
（間）
邦雄　今までの親子道德は親は親たらずとも子は子たらざるべからずと敎へてゐたけど、俺はそんな親の方に都合のよすぎる道德には、疑ひを持つね。親は親らしくして、初めて子は親としてうやまふべきぢやないかと思ふよ。子に對して親の義務を果してゐないのに親は親としての權利は生じないのぢやないかな!?
次郎　ぢや、兄さんは親から十の物を貰つたら十の物、一つしか貰はなかつたら一つしか返さなくつても

良江　そんな事を言つて貴方は……。
邦雄　人の言ふことが本當だか嘘だかを判斷するのは、その人の今までの行ひを考へなければ駄目だよ。
次郎　僕は今まで兄さんに嘘をついたかも知れません。併し、なんにだつて例外はありますよ。
邦雄　これが例外だと云ふことがどうして言へるんだい
次郎　親が死ぬか生きるかと云ふ時、子として嘘が言へますか!?
邦雄　兄さんにとつてはなんでもない、只、生んだと言ふだけの人ですが僕にとつては大事な母です。
邦雄　フン。その大事な母を獨りぼつちにして今まで自分勝手なことばかり、何故してゐたんだい？
次郎　――。
邦雄　エ、!?　何故、おつかさんのそばにゐて一生懸命働かなかつたんだい？　お前が大阪へ行く時、俺はよく言つたらう!?　俺には義理の母さんがあるし、木村の姉さん夫婦はあんな風だしするからおつかさんの面倒を見ることが出來ない。だからお前がよく見るべきだつて……。それなのにおつかさん獨り殘して行つて終つたんぢやないか。そしてなんにもならずに東京へ歸つて來てからも相變らずぶら〳〵してゐたんぢやないか。

いゝと言ふのですね。隨分、打算的ですね。

邦雄　世の中の事つて煎じつめればみんな打算的だよ。打算的と云つて語弊があるなら、經濟的だよ。投資のないところに利潤は上らんよ。

次郎　それぢや、兄さんは敎育なんかも打算的な氣持ちでしてゐるんですか？　澤山月給を貰へば一生懸命やつて、月給が少なかつたらいゝ加減にやるんですか？

邦雄　誤解してはいけないよ。打算的と言つても物質的なこと許りではないよ。精神的打算だつてあるさ。俺は生徒達を敎へて生徒達に少しでも幸福な生活を送れるやうな力を與へてやると言ふことが何よりの俺の給料なんだ。月給なんか第二だよ。「幸福」はやはり打算的ぢやないか。（話を元へ戻して）昔の武士達が自分の主君の爲めに死を辭さなかつたわけを深く考へて見給へ。幾代も自分達の血族が幸福に生活が出來るだけの祿を貰つてゐた殿樣の恩——と言つて悪ければ、殿樣によつて象徵的に代表せられてゐる藩の生活の大きな恩——に對し報いるために打算的に死んだんだ。これが今の會社の重役と社員と言ふやうな單なる雇傭關係で、社員達のやうに何時なんどき首を切られて自分達の幸福を奪はれるか分らない狀態だつたら主人に命をさしあげなくつてはいけないなんて言ふ道德は決して生れやしないよ。それと同じに親をよくしろ、そして親に悪い感じを抱いちやいけないと言ふのは親から子が受けてゐる恩が大きいからだよ。併し、親からうけたものがなにもない時、それでも親孝行しなければいけないなんて言ふのは親には都合がいゝかも知れんが、子には都合が悪すぎるよ。俺は生れると同時にこの家へ來て終つて生みのお母さんとは沒交渉だつた。俺は次郎のお母さんからなに一つとしていゝ事を敎はらない。本當に俺を生んだと言ふに過ぎないと俺はいつも思つてゐるんだ。

次郎　兄さんは生れてよかつたとは思はないんですか？

邦雄　よかつたと思つてゐるよ。

次郎　それでは生みの親に感謝してもいゝでせう！

邦雄　今は生きてゐてもいゝと思つてゐるさ。併し、一時は何故、俺は生れたんだらうと思つた。その時、俺は他人からは色々と間接、直接に援助をうけた。併し、親からは何の援助も受けなかつた。自分の力と世間の人の力でどうにか普通に生活出來るやうになつたんだ。

次郎　惱みを解決する力の元は誰が呉れたんです？
邦雄　亡くなつた親父さ。
次郎　お父さん一人で兄さんが生れたのですか？
邦雄　生んだのはおつかさんだよ。よしてくれ、お前と議論してゐるのは馬鹿々々しくなつた。
次郎　生んだのはお母さんですつて!?　兄さん！　それでは……（激昂たじつと堪へる。）
邦雄　親父が俺に二人のお母さんを持たせて平氣でゐたのは惡かつた。併し、親父は惡いと思ひながらそれを解決する力がなかつたのだ。あゝ言ふ風に殆ど無一文からたゝきあげた人には家庭を整へるだけの力がないのだ。併し、親父は普通の商賣人によくあるやうな厚顔なものではなかつた。隨分、それに就ては苦しんでゐた。そして、きまりをつけたい〳〵と言つて居る内に死んで終つたんだ。だから親父には俺はなんとも思つてゐない。親父の氣持ちを考へるとせめる氣はしないんだ。
次郎　お父さんの話をしてゐるんではありません。お母さんの話をしてゐるんです。
邦雄　生理的にはなる程、お父さんとお母さんが造つたのかも知れない。併し、動物ならいざ知らず、人間の親子關係とは愛情あつての親子關係だ。肉體だけの親子なら恩も糞もない。
次郎　分りました。兄さんの氣持ちはよく分りました。結局、兄さんは血のない人なんですね。
邦雄　血があり過ぎるからこんなことを言ふんだよ。兎に角、俺は血縁だからと言つて用捨はしない積りだ。
次郎　僕は兄さんと議論をしに來たのではありません。お金を借りに來たんです。借して下さい。
邦雄　貸さないこともないさ。併し、本當のことを言へよ。
次郎　お母さんが死にさうなんです。
邦雄　本當なら何時です貸すよ。
次郎（激昂して）本當なら嘘ならつてこんなことを嘘が言へますか!?
邦雄　いつかお母さんが怪我をしたからつて醫者代を持つて行つた事があつたね。
次郎（少し、考へて）そんなことがありましたね。
邦雄　あの時、二三日して木村の義兄さんが來たので訊いて見たら、おつかさんに昨日逢つたけどそんな風の樣子はなかつたと言つたぜ。
次郎　あの時はあの時ですよ。今度は絶對に本當です。
邦雄　一體、幾ら位欲しいんだい。

次郎　五十圓です。
邦雄　五十圓!?
次郎　そんなに驚かなくつてもいゝでせう。生みの親を一人、助けるんですよ。
邦雄　本當であればね。
次郎　未だ、そんなことを言つてゐるんですか？
（邦雄、仕方なく立つて奥へ金をさがしに行く。）
次郎（良江に）　勳坊は元氣ですか？　大きくなつたでせうね。
良江　えゝ。お蔭で……。
邦雄（奥で邦雄の聲がする）　良江。
（良江、立つて行く。邦雄と良江の話聲。やがて二人、登場）
邦雄　今ね。そんなにないよ。二十圓ならあるんだけど……。これで我慢して呉れよ。
次郎（邦雄をじつと見て）　――。
邦雄　ね。いゝだらう!?
良江　相憎く昨日、家賃を拂つたもんですから……。
次郎（邦雄をにらんで）　母親が死ぬか生きるかつて言ふのにそんなにけち張らなくつてもいゝでせう。
邦雄（怒つて）　ないものはないよ。
次郎　それだけぢや、ないも同じです。
邦雄　それなら持つて行くな。
良江　貴方！
次郎　持つて行きませんよ。そんな冷血漢からはびた一文、貰ひません。（次郎立ち上る。）
邦雄　その言葉を忘れるな。（邦雄、立上る。）
良江　貴方！（良江、立上る）
（この時、二階からさだの良江を呼ぶ聲。）
良江　はい。あゝ、母さんが持つてゐるかも知れない。（二人に）　待つてゐて下さいね。
次郎　フン、兄さんをちつとも可愛がつて呉れなかつた義理のおつかさんを兄さんは大事にして生みの親が死にさうな時なんとも思はないなんつてこんな不孝な子があるか？
邦雄　大事にした？　俺は、あの母さんに相當なことをしてゐるだけだ。俺は不公平なことはしてゐないからこつちへ來て生活するやうになつた。俺は長男だつた！　今の母さんに子供がないし、俺は長男だつた。お前と姉さんはおつかさんと一緒にゐる。それはみんな運命だつたのさ。俺は義理の母さんから成る程、可愛いがられなかつた。併し、いぢめもしなかつた。俺は今の母さんを母として考へてゐやあしないんだ。三十年來の友達が同居してゐるんだと思つてゐるんだ。だから俺達夫婦が母さんと一緒に

ゐるのは他から見るやうな母子水入らずの生活では決してないんだ。

次郎　歸ります。

邦雄　これ、持つて行けよ。

次郎　入りません。

邦雄　――。

（次郎、憤然として退場。邦雄、何か言はふとして次郎のあとを追ふ。併し玄關まで行つて戻つて來る。火鉢の前へあぐらをかく。良江、二階から降りて來る。）

良江　次郎さんは？

邦雄　歸つたよ。

良江　あら、いつ？（外へ出て見る。）

邦雄（獨り言）　本當に病氣なのかな。今日か明日、死ぬんだと次郎は言つたが……。それが本當なら俺は親不孝かしら？　金は本當になかつた。それでもやらなくつてはいけないのか!?（火鉢に頰杖をついて目をつぶる。良江、稍々して戻つて來る。）

良江　貴方、どつちへ次郎さん、行つたか分りませんよ。

邦雄　――。

良江（お金が落ちてゐるのを見つけて）　あら、次郎さんこれを持つて行かなかつたんですね。

邦雄　――。

（良江、邦雄が餘り默つてゐるので暫く邦雄を見る。そして奧へ行つてどてらを持つて來る。）

邦雄　本當に病氣かな!?

良江（登場、邦雄の何か言つてゐるのを聞いて）　え〻？　何を言つて仰居るんです？

（どてらを邦雄にかけてやる。間。良江、邦雄の氣持ちを察して）貴方、もう十二時半ですよ。御休みになつたら？……。

（幕）

---

【讀後に】　リビドーの經濟關係、舊道德の形式主義への懷疑、生母への反抗、傳統道德代表者としての超自我の苛責など、この作者は分析學徒ではないが主人公の心理をよく描寫してゐる。心理劇としては見るべきものがあると思ふ。

作者の個人生活をよく知つてこの作を讀むと「詩と眞實」との關係がとても面白いのだが、その生活に就いてはこゝに御報告出來ないのは遺憾である。作者の生活と主人公の生活とが全然反對になつてゐるところがあるかと思ふと、作者は來た子供に同一化してゐる。作者はかつての拳鬪選手である。子供に父を殴らせてゐるところ、作者のエディポス・コムプレスの表れだ。（K）

# 心理研究ノート（續）

長谷川誠也

の視覺に對して或比例をもつてゐる。忌はしい夢は、晝間の罪の過大化である。われ〳〵は自分の惡い性情を不正な姿と具體化して見るのだ。アルプス山脈中では、旅人が時折自分自身の影が巨人と擴大されるのを見、自分の手の動き悉くが恐ろしく感ぜられることがある。」

なほ、大靈（オヴァ・ソール）論中にも、われ〳〵は夢の内に、假裝の自身を見る、その變妙な姿は、ほんたうに存在する性質の擴大であつて、特にわれ〳〵の注意を促がすものである、といふ意味を述べてゐる。

エマスンは夢に含まれてゐる教訓の意義に重きをおいたのだ。これにユング說を加味するならば、一種の夢判斷が構成されるだらう。

## （二十三）カーライルの夢

## （二十一）笠女郎の歌

萬葉集にある「笠女郎贈大伴宿禰家持歌之十四首」といふ中に、

劍太刀、身に取り添ふと、夢に見つ。なにのしるしぞも、君は逢はむため。

といふのがある。夢に現れる象徵を解說する場合の例としては申分ないものだ。わが國においては、昔から言ひ傳へてゐる、女が夢に刀劍をさすと見るのは吉事であると。笠女郎は好い例を遺したものだ。

## （二十二）エマスンの夢の說

エマスンの精神法則と題するエッセイの中に、夢に關する觀察がある。

「夢は覺醒時の知識の繼續である。夜の視覺は、晝

カーライルの名著「フランス革命」第一卷の原稿が、哲學者ミルの家において、過失のため、僅かに四五枚を殘したゞけで、他は悉く燒かれてしまつた、といふ話は廣く傳へられてゐるが、それを知つた日のカーライルの夢については、語り傳へる人が少いやうだ。

幽靈のやうに眞青で、口もきけないほどになつて、茶時に災難を報告に來たミルは、おそくまで居たらしい。その夜のカーライルの苦惱は一方ならず、夢に、父と妹とを見たといふのだ。二人とも生きてはゐるが、ねむさうに沈んで醜い樣子、死のやうに鈍く腫れてゐる、さうして見知らぬ荒れ地で死ぬといふ恐ろしい、いやな夢であつたと。

この時、彼の父も、妹のマーガレットも共に世にはゐなかつた。心血を注いで書き上げた彼の原稿が、奪散する父と、愛する妹、しかも共に瀕死の相貌である二つの姿と割れて夢中に現れたのは、極めて自然な心理過程である。彼は、この夢を記した後に、かう書いてゐる。覺めた時の苦痛は頗る甚しかつたが、予は寸時も沈着を失はなかつたから、不可見のものに感謝すべきではなからうか。汝の神と共に步め、へりくだりて。予は口にのぼせ得る讃美歌または祈禱を欲した。愛する者が予と共にあらんことを欲した。しかし、誰れもゐなかつた。沈默は予の言葉たるべきであつたと。

謙遜して神と共に步め、といふところに彼の心理過程の核心があるのだ。さうして父の姿はこの信念の象徵である。彼の言ふところによれば、彼の父は不言實行の人、活動の人、誠實な努力によつて貧苦のうちから浮び上つた人である。いかなる國王とも換へ難い者はわが父であるとは彼の言だ。この勇敢な、眞實の人の姿が、カーライルの大苦難の際に、夢に現れたのは、この文豪の意志そのものゝ復活と見なければなるまい。

## （二十四）　カーライル夫人の夢業

夢のうちで、數學の難問題を解いた、といふ例は、さほど珍らしいものでもないやうだ。カーライル夫人にも同樣のことがあつた。それは夫人の少女時代の話である。

ユークリッドの問題が、どうしても解けない、夜おそくまで考へてもわからないので、惱んだまゝ寢床に入つた。ところが、夢のうちに解答を見事になし遂げた。翌朝、目覺めた時には、この夢を記憶してゐなかつたが、机上のスレートには、答案が立派に書いてあつたと。少女は夜中に起き出して解答を書いたのだが、夢の仕事で

あつたから、覺醒時の意識は、これを知らなかつたのだ。夫人は勝氣の、我慢强い女性であつた。少女時代には、學校で、自分よりも大きな男の兒の顔をなぐりつけて、鼻血を出させたことすらあつたさうだ。氣むづかしやのカーライルと結婚してから後の彼女の生活は、忍從の標本であつたと。カーライルは、夫人の死後、その日記を見て、夫人の一生に幸福な日の少なかつたことを知り、後悔のあまり、「回想錄」中に夫人のことを、こまごまと傳へたのだと言ふ。カーライルのやうな變りものを、妻として世話したジェーン女史もまた變りものであつたらう。

（二十五）　ソロモンの夢

バイブルの列王紀略上第三章に、ソロモンの夢といふのが傳へてある。和譯バイブルの文章は讀みにくいから、次ぎに大意だけを揚げよう。

ソロモンはギベオンといふ高地に往つて、神のために祭壇を設けた。こゝで神は夜の夢にソロモンに顯れた。神は言つた、何を汝に與ふべきか、汝、何か求める所があるかと。ソロモンは答へた。神エホバよ、あなたは我父ダビデに代りて私を王となして下さいましたが、私は小さい子で、前後もわきまへません。あなたの選みたまうた民の數は非常に多く、私はその中に居りますけれども、その數を數へることもできません。そこでお願ひいたします、私に聽き別ける心を與へ、あなたの民を審判し、私をして善惡を辨別し得るやうになしていたゞきたいのですと。この返答は神の心にかなつたので、神はソロモンに言つた。汝はおのれのために長壽も、富有も、敵の生命をも求めないで、たゞ訟を聽き別ける才智を求めたから、かれは汝に賢明聰慧な心を與へる。これによつて、汝の先には汝のやうな者なく、汝の後にも汝のやうな者は出ないであらう。なほ汝が求めなかつた富と貴とをも與へるから、汝の一生涯中、諸王中に汝のやうな者はなからう。また汝若し汝の父ダビデの歩いた通りに、わが道を歩みわが法憲と命令とを守るならば、汝の日を長くしてやらうと。

バイブル中には、神人會見の話が多く傳へられてゐるが、ソロモンに關するこの話は、夢の中のことゝしてあるだけに特に注意すべきものであらう。ソロモンが本當にかやうな夢を見たのか、それとも作り話であるのか。それは今さら穿鑿したところで、わかりもすまいし、よしわかつたところで、骨折損のくたびれまうけとならう。われ／＼は、かやうな話の傳へられてゐることは、ソロモンの優越慾がいかに强烈であつたかを證明するも

のだと思へば宜しいのだ。この慾に基づく生活計劃を構成してゐたソロモンは、かやうな夢を本當に見たらうとも想像される。なほ附け加へて置く。この話に續いて、二女の赤ン坊爭奪に關する有名なソロモン裁判が記述してある。

## (二十六) 結草の故事

「結草」といふ熟字には「報恩」の意義がある。その由來は、左傳の宣公十五年にある記事である。次ぎに要點だけを掲げる。

秦と晉とが戰つた時、輔氏といふ地で、晉の魏顆といふ武人が、秦の力人杜回といふものを捕虜にした。さて話は既往に溯る。魏顆の父魏武子に妾があつた。しかし子供はなかつた。武子は重病に罹り、再起はおぼつかなく思つたので、子の顆に遺言した。あの妾を必ずかたづけてやれと。その後、病が愈々重くなつた時に、改めて遺言した。妾は必ず殉するやうにと。父の歿後、顆はこの妾を他に嫁せしめた。その理由はかうだ。病が重くなれば心が亂れる。だから、病がさほど重くなく、心が正しく働いてゐる時の言に從ふべきであると。

さて戰鬪の時、どこからともなく老人が出て來、草を結んで杜回を遮つた。このために杜回は倒れ、遂に顆のために捕へられてしまつた。その夜、顆は夢にこの老人を見た。老人の言ふには、私は、あなたが嫁がしてくださつた婦の父であります。あなたは御先代のお心が正しく働いてゐる時のお言葉を御採用になりましたから、その御禮に今日の事をいたしたのでございますと。

物語はこれだけである。そのおもしろい所は魏顆の心理である。彼は知性を中心とする心理によつて、父の病間の心から發生した遺言を採つたが、なほ心の一隅には疑惑が殘つてゐたに相違なかつたらう。病の重くなつた時の遺言が、あるひは父の本心ではなかつたらうかと。自分の實行したことは、倫理上少しも非難さるべき點はないが、父には不滿足の感をおこさせはしないかと。彼は日夜この疑惑に惱ませられてゐたと見てよからう。たまたま戰鬪の時に、妙な老人の援助によつて強敵を獲た。われわれはこの老人が婦の現實の父であつたか、あるひは亡靈であつたか、また、結草は果して報恩のためであつたか、それとも偶然の仕事であつたか、そんなことを考究する必要はない。要點は顆の夢にある。夢に現れた老人は、顆自身の父の分身であると見なければなるまい。逝ける父は、妾の父と姿を變じて顆の夢に現れたのだ。顆について言へば、彼は自分の爲したことを正當と證明し、疑惑を除いてくれる何物かゞ欲しかつたの

だ。その何物かゞ、姿であつた婦の父、即ち自身の父の變裝した老人となつて夢の中に具體化したのであらう。から考へてくると、結草の故事は、倫理上の疑問を、夢想によりて解決した一例である。

# 少年期の自己分析斷片

齋藤多喜男

**少年期のある思出**——お江戸名物の空ッ風が吹く火事の季節になると毎年一度は父から「お前はお隣の火事の時すつかり狽てゝ了つて皆が一生懸命逃げ支度をして居るのに障子なんか外してたのを覺えて居るか」と冷やかされるのであつた。それは夕食の卓を圍んでの單なる笑ひ話に過ぎない少年時代の思出であるのに、その都度私はどうしてこの話を父が特に面白さうに語るのか、又何故それが自分に一種言ひ難き不快な感情を起させるのかと淡い疑問を抱いたのであつたが、今迄はその場限りで濟まして來た。入院中の私を父は時々見舞つて呉れるけれど、今年はその話が出なかつた。先日看護婦と色々な話をして居る內興に乘つて自分からその話をし始めた。

「僕が小學校二年生の頃だつた。生垣を境に三米と離れて居ないお隣の風呂場の火が傍に積んであつた薪に燃え移り、火は忽ちお隣の家を包んで了つた。まだ夕飯前で明るかつたが、その時の物凄い焔が今尚僕の頭に殘つて居る。大人達は到底助からぬと覺悟して、大事な物だけを纒めて逃げる仕度をして居た。僕も子供乍ら何か手傳はねばならないと、一瞬考へた。不思議と氣持の落付いて居た僕には、自分の家が燒けるとは思へなかつた。然し火の粉は猛烈に降つて來る。燃え易い障子をその儘にして置いては危いと考へ椽側の障子を直ぐ外し始めた。結局は發見が早かつたのと、消防署が目と鼻の所にあり、風もなかつたので、僕の家は破目板を少し焦した丈けで類燒を免れた。僕は內心得意だつたが、騷ぎが納まつてから「あんな取込の最中と云ふのにこの子は障子な

んか外したりして」と大人達に笑はれると、どうにも說明出來ないのであつた。今でさへ若し障子に火が着いたらどうなつて居たか判らぬと漠然と思つて居る位で、當時の自分としては天晴れの名案で、當然賞めて貰へるものと自負して居つたのだから、父の言葉には心中大いに不滿であり、大人達を堂々說得し得ないのが情なく思はれた……。」

話續ける內、再び湧いて來た不滿不快の情が未熟な私の分析心に觸れた。最初の、然し偶然の自己分析ではあつたが、私は慄然とする位の衝動を受けた。

**私の放火願望**――火事に際して何故障子に聯想が及んだか、今の私には直ぐ判つた。私の父は肛門性格者で、潔癖と短氣が殊に著しかつた。疊の上へ直かに寢轉んだり柱に凭れたりすると忽ち叱られ、廊下はスリッパなしで步かせなかつた。而もその廊下を毎朝拭くのが私の登校前の役目で、それは隨分膝の痛い厭な仕事であるし、學校が遲れさうになつても濟ましてからでなけれで出掛けられなかつた。椽側に何か落して小さな痕でもつけると丸で家を半分叩き壞した樣に怒る父が、子供心にどんなに恐ろしく又憎らしく思はれた事か。そんな時、子供と家とどつちが大切なのか知らと父の心中を推測して死にたくなつた事もあつたが、多くの場合父に對する憎惡が加はる許りで、その憎惡は父の愛する家へと轉位せられた。家に對する嫉妬や父への復讐心から放火願望が生じ、既に具體的方法を考へる迄になつて居た。石油やガソリンを知らぬ子供に、一番燃え易いと考へられるのは障子であつた。私にとつて障子は放火願望の誘惑であつた。所が隣からの出火で火の猛烈さ恐ろしさ又放火の結果の餘りの重大さに驚き、且つは恐怖心や罪障感から放火願望は救助願望に變じて、危險と思つて居た障子を外したものと思はれる。此處迄分析して來た時、私は又ゾッとした。私の放火願望の動機は全く父に對する憎惡、復讐であつて、益々強くなる可きものである。若しあの時實際に火事が起らなかつたら、後日放火を實行して居たかも知れない。あの火事があつた爲に救はれた樣な氣がするのは私の放火願望の存在を裏書するものではなからうか。それが單なる附會でない事を立證するに適しい統計がある。（金子準二著『犯罪者の心理學』）チュービンゲンのクラウスは『犯罪の心理』（一八八四年）に放火の動機として、

（一）復讐。（二）嫌厭。（三）恐怖。（四）不滿。（五）戀鄉。（六）驕慢。（七）利慾。（八）嗜火慾。（九）火災の混雜に依る快感。（十）犯罪の豫謀並に隱蔽。

を擧げて居る。メンケメーラーがその著『放火者の心理』(一九一二年)中に取扱つた放火犯二四九人の動機は——

復　　讐…………………九一(三六・五%)
衝動的行爲………………七四(二九・七%)
動機不揭載………………七一(二八・五%)
嗜　火　慾………………一三(五・二%)

で、兩者共に復讐がその首位を占めて居る。是を年齢別にすると、

十一歳未滿………………一〇(四・二%)
十二歳より十四歳迄………三二(一三・三%)
十五歳より十七歳迄………四七(一九・六%)
十八歳より二十一歳………三一(一二・九%)

以下は年齢の増加と反對に漸減して居るので略すが、フィンケンブルグは獨逸の一九〇九年中の放火處刑者四四六人中の一三七人(三〇・五%)ウルフェンは同じく一九一一年の四三五人中一五九人(三六・五%)が十二歳以上十八歳未滿の少年であつたと發表して居る。當時の私は百分率に於ける第二位の年齢で、第一位の最も危險なる年齢になる前にあつた。放火犯人が年少者に多い理由に就いて犯罪學者は、(一)、年少者は智力に乏しく結果の重大性を判斷し得ない事、(二)、體力のない爲他の暴力行爲に出られない事、(三)、犯行に當つて自身に危險性の少ない事、などを擧げて居る。或る心理學者は定律的に動搖する火焔は腦に輕い血液循環の異常を起す結果、微醉又は舞踏した後の如き快感を與へるものであり、細胞は無意識に熱に牽引されるが、年少者は特に此の傾熱性が強く、それが嗜火慾を誘引するのであると云つて居る。ハンス・グロースは傾光性は蟲類の或るものが發情期に發光するのと同じく性慾に關係があり、性的緊張感に依つて感情が動搖し易く、その刺戟に依る不平不滿から遂に放火を犯すに到るのであると説いて居る。放火の動機は多く自己中心的不快感情の放散であるが、その原因たる沈欝、不滿、不安、嫌厭、怨恨は總べて性慾に關係がある。精神分析學に於ても火と性慾(殊に尿道性感)との關係は既に闡明せられて居る所である。瑞典のキンベルグに依れば、一九〇一年から一九〇六年迄の放火處刑者一四一人中四〇人(二八・四%)が精神病者であり、テッペンの一九一七年の調査に依れば五七人中一一人(五〇・三%)は犯行前からの精神病者、二九人(五〇・九%)は精神變質者で、その內一二人(二一%)は行刑後發病し犯行當時から釋放迄精神狀態の尋常であつたものは一七人(三〇%)であつたと發表して居るが、利慾のみを動機とする放火と雖もその犯行の瞬間は盡く精神狀態が異常であると云はれる。放火狂(ピロ

ガロール）が獨立した一種の精神病とされて居たのは過去の事で、放火症は凡ゆる精神病者精神變質者に起る一つの症状である事が立證され、又精神健康者と精神病者との本質的差別は精神分析學に依つて取除かれた。本文には恐らく不必要と思はれる統計等を掲げたが之に依つて「自分は精神病者ではないし、未だ少年であつたから放火等する筈がない」と云ふ私のナルチスムスは根柢から破壊されたのである。

**對象のコムプレクス**——私に取つて母は感傷愛の對象でなくして、父と同じく憎惡の對象であつた。靴の儘走り廻り、繩跳びでも球投げでも自由に出來る學校の雨天體操場と比べて、同じ建物であり乍ら我が家の窮屈さ、それを強ひる父母、背くと叱る父母、當然反抗心は勃發する。夕方歸る父に留守中の事を言ひ付けて二重に叱らせる母、過ちを父に庇つて呉れない母への憎惡の方が寧ろ大きかつた。父への憎惡は、憎い母を愛せと強ひられる事に對する反抗であつて、母への憎惡が根柢をなして居る。故に私のエディポス・コムプレクスの分析は暫く預つて置きたい。

對象のコムプレクスの一つとして虚榮コムプレクスがある。私の家は近所で一番大きかつたが、その家の子供だと云ふ事を人に誇りたい氣持を持つて居た。他から歸る時等、先の方を人が歩いて居ると、丁度門の前邊りで追ひ越して家に入る樣な事があつた。板塀や門に樂書等されると自ら進んで消したし、度々惡戯されると板塀の穴から覗いて居て下手人を探した。家が私に役立つたのは唯この虚榮心の滿足のみであつたが、それには門と塀と屋根丈けがあればいゝので、その爲には家の中の生活の不自由さは餘りに大きな逆負擔であつた。私のこのコムプレクスは母の虚榮心と或る點では一致して、着物等は何時もキチンとさせられて居たが、それを窮屈とは感じなかつた。私の家は衣食住に於てバランスが取れて居ないのではなかつたらうか、衣、住と違つて食には大いに不足を抱いて居た。他家に招ばれた時のお膳と比べて毎日のお惣菜の劣るのは當然であるが、私は自分の家より小さな家に住む人々があの位のものを食べて居るのに、母は少し吝過ぎると思つた。老人の居る爲子供の嗜好は屢々無視されたし、旺盛な食慾をお上品さで制限されたり、叱言の飛ばつちりでおやつを止められたりした事からも母への反抗は増して行つた。然し此の原因は後に述べる。放火願望の對象である家、部屋等が女性、殊に母の象徵である事が、當時私の無意識に理解されて居たかどうか判らないが、母への憎惡が増すに從つて自分

の部屋を亂暴に扱ひ出したのは事實で、中學時代私の部屋の扉は手裏劍の稽古臺となつて穴だらけであつた。放火は母殺しと云へやう。佛陀の時代、印度の阿闍世王は隣國に連戰連勝しつゝある時、提婆に教唆されて父を幽閉し「我母は是賊なり。賊なる父王と伴れなればなり」とて母をも殺さんとした事から、古澤博士は阿闍世コムプレクスなるものを說いて居られる。(本誌第三卷第二號所載、同氏稿)然し之も矢張り母を愛する故に殺さんとした精神病者に與へられた名稱で、私にはエディポス・コムプレクスがその儘では適用出來ないと同じ程度に、不適であると思はれる。

對象のコムプレクスとしては未だカイン、コムプレクス、破壞コムプレクス、自我のそれとしては去勢、ダイアナ、誕生等のコムプレクスがあるが、私には大した關係がないから觸れぬ事にする。

父を殺しても尙生命の本源は殘るが、母を殺す事は人生の根本問題である生命の本源に向つての反逆である。最も原始的なサディスムスは口愛サディスムスである。嚙み碎く事、それは何ものにもまして原始的な暴虐であり、怖るべき罪過である。私が母の愛に不感であり、かくも激しき憎惡を抱くに至つた原因はこの口唇期に與へられた外傷である事が想像される。自己と對象の區別を認識し得なかつたこの時期に構成されたコムプレクスを說明するのに對象のコムプレクスは稍々難色がある。

**最幼兒期記憶**——私は生後十ヶ月、未だ母の懷にある時、遠緣に當る今の齋藤家の養子となつたが、父の職務上少年時代の大部分を地方で過したから、親兄弟や實家の親戚とは殆んど接觸する機會がなくて十八歲になる迄全くこの事實を知らずに居た。冷い父母の態度に之が果して本當の親かしら等と時には考へた事もあつたが、それは所謂「家族ロマーン」であつた。であるから實の父が突然危篤に陷つたとの電報が來て愈々父から「お前は實は……」と改まつてその事を打明けられた時、社會的に見て少しく優越の地位を占めて居る父母が本當の親であつて欲しい樣な氣がしたのは養子空想の幻滅とでも云はふか、突然現はれて突然死んだ實の父の死を直ぐには本心から悲しめなかつた。私の三歲の頃は山形縣の新庄町に住んで居た。當時の思出は幾つかあるが、それ等は皆後になつても父や母がよく話す所から見て現實の記憶であるとは斷定し難い。唯一つ父母が一度も口にしないでしかも私には最も印象的な記憶がある。これが恐らく私に取つて最初の記憶であるらしい。勿論その記憶には前後の連絡は全然ないが。家の庭に相當大きな池があり

そこには澤山鯉が飼つてあつて、それを私はよく一人で見て居たが、或る時向ふ岸の石の上に何處からか白い猫が現れて首を水面にさし伸べ鯉を覗つて居るのである。私はその前に猫が鯉を取つた事を知らないし、果して鯉を取りに來たのか水を呑みに來たのかも判然とは知らなかつたし、唯何となく鯉の危險を感じ、早く誰かゞ來て猫を追ひ拂つて呉れないかとイラ〳〵した氣持になつたのであつた。卽ちこれは私が獨りぼつちの淋しさから毎日鯉を眺め彼等を唯一の友として居たので、見知らぬ猫への恐怖から鯉の危險に對する救助願望と同時に鯉と同一化して居た自分自身への被救助願望を起したが、誰も來て呉れないので一人イラ〳〵して居たのだと解せられる。この被救助願望は私の若き燕コムプレクスの源となつた樣である。

又池の上に伸びた猫の首は私には乳房によく似て居る樣に思はれた。實の母の懷から引き離された私が乳を求めて泣き叫んだ時、切めてもの慰めにと母は乳の出ぬ乳房を當てがつた事だらうが、乳の出ない乳房を與へる事は却つて殘酷な行爲であつた。對象を認識し得なかつた乳兒期の私は恐らく二人の異ふ母の乳房とは知らなかつたらうから、同じ母が突然乳を拒絶したと思つたに違ひない。これは非常な心的外傷である。私は現在でも猫、殊に白い猫を非常に憎らしく思ふがそれは乳を拒否した乳房への憎惡の轉位されて今に殘つて居るものではないかと思はれる。殊更に異性親を斥ける思春期に至つてこの傾向は益々增大し、中學入學の御褒美に買つて貰つた空氣銃で盛に方々の猫を打つた事を思ひ出す。部屋で手裏劍の練習なんかしたのもその頃であつた。

ハヴロック・エリスの「幼年期の記憶は屢々我々が普通信じてゐるよりも遙かに遠く遡つて居る」との主張に暗示されて此の記憶から私は自己の胎內空想を發見し得た。池は胎內であり、私は鯉と同一化して居た。猫の魔手を逃れて池の中で安全に暮したいと云ふのは乳の出ない乳房を避けて以前の乳の出る母の懷（胎內）に歸りたい願望であつた。

幼兒が最初乳房に吸ひ付くのはエロスと攻擊慾とのアムビヴレンツであるが、それが必然的に滿足を得ずして引揚げられねばなら時に本能の危機が起る。殊に乳を取込むと云ふ攻擊本能が滿足されなかつた場合、それが母から來るものゝ如く投出的に考へ、母を「危險な」ものと空想するに至る。母の愛に對する私の不感的態度並びに母に對する憎惡は實に此の離乳の際の外傷に基くものである事は明らかであるやうだ。反面又引揚げられた愛情の投出に依り又拒否せられたものに對する執着等から

非常に我が儘になつたのも事實である。猫を見て泣き出しもせず唯イラ〳〵氣を揉んでゐるのは此の「危險な」母への恐怖から幼い私が既に神經衰弱的症狀を呈して居た事を示すもので自分乍ら隨分いぢらしい氣もするが、一方育兒の經驗のない若い母がこの小さい神經症者に如何に當惑し、失望し、無意識に憎惡を抱いたかは想像出來る。

**態度のコムプレクス**——本誌第三卷第一號に於ける霜田靜志氏の紹介によると、佛のシャール・ボードゥアンは對象を獲得せんとする個人的追求である對象のコムプレクス、自我の主張としての攻擊的表出である自我のコムプレクスの他に、多くの事物、生活それ自身に對する態度のコムプレクスなるものを說き、これに屬するものとして左の二つを擧げて居る。

一、離乳コムプレクス。之は母乳を引き離された時乳を求めると云ふ對象獲得の欲望が阻止せられた後に殘る、執着の態度に依り生ずるコムプレクスである。

二、逃避コムプレクス。之は離乳コムプレクスから派生するもので、乳を取り上げられた後に殘る渴望が何時までも赤ん坊で居たい心を起させ、その結果悔恨、退行、內向の傾向を生じ、現實を逃避して隱れ家を求めんとする態度が現れて來るのである。

コムプレクスは又相互に交錯して新しい特殊なコムプレクスを生ずるものであるが、私の場合第三の「態度のコムプレクス」が凡ゆる方面に顯著に現れて居る樣に思はれる。

離乳コムプレクスは私の嗜好に影響して貝類、豆腐、麵類等乳房の如く柔い食物は絕對に食べ得なかつたが、鰑、チューインガム、肉の類を非常に好んだ。これはゴム製の乳首でミルクを與へられた爲であるらしい。爪を嚙む癖も激しかつたが、中學三年頃Onanieを覺え段々その誘惑に負ける樣になり常に心に惱んで居つたが、或日同級生が「爪を嚙む奴は皆Onanieをやつてるんだ」と云つてゐるのを傍で聞いて自分の惡癖を知られては大變と思つた瞬間からピタリと止つてしまつた。ミルクで育つた爲か私は、普通の牛乳を少しも美味いとは思はないが、コンデンスミルクを飮むとその獨特の香りが丁度赤ん坊の甘い乳臭の樣に思はれて、何とも云へぬ感傷的な氣持になるのである。今も每日山羊乳を飮んで居るが、砂糖の代りにミルクを飮んだりして居る。母乳で育つたものは肥つた婦人を好み、ミルクで育つたものは瘠せた女を好むと云はれるが、私もその通りである。私の母は幸ひ瘠型であるが、若し肥滿型であつたら母への憎惡感

情はもつと激しく刺戟された事と思ふ。離乳コムプレクスに基く執着の態度は凡ゆるものに轉位され、玩具等一度欲しがると何日でも買つて貰へる迄ねだる事を止めなかつた。その癖直ぐ飽きて了ふのであつたが、それはその際玩具は眞の目的ではなく、母乳卽ち母のリビドーを自己に纒綿させたい慾望の代償であつて、決して本當の滿足を得られない願望であつた。先に述べた樣に引揚げられた攻擊慾を投出して母を「危險な」ものと空想する事から被害妄想を生じ、常に不滿と反抗心を抱いて居た私は何事についても母に對して感謝する事が出來なかつた。食物も態と嫌ひなもの許りにして好きなものを食べさせないのだと思つたし、何か買つて貰つても安い惡いものだと思つて大切に扱はなかつた。然し私の生涯に最も大きな影響を與へたのは、母が私にリビドーの一種とも云ふ可き言葉を與へなかつたと思つた事であつた。何か母に頼つても、機嫌の惡い時は諾否の返事の代りに默り込んで了ふ。女の子等が喧嘩をした相手と口をきかないのはよくある事であるが、生殺與奪の權を持つ母に默られて了ふ程悲しく又淋しい事はなかつた。肝心の返事はしないで、今迄の事を繰返し〳〵叱言を言ふ。散々叱つた揚句、要求は刎ねられるのが普通であつた。母からは我が儘と見えても私自身には必要不可欠な要求なのだから、斯う云ふ事が度重なると快樂原則と現實原則との葛藤に堪へられず、遂に現實を逃避する樣になつた。私の實家は關西であつたが、養子となつて最初連れられて行つたのが東北の小さな町であり、父は東京辯、母は鳥取訛りを殘した恐ろしい早口であつた、今でも新らしい女中等「奥樣の仰しやる事は日本語か英語か分りません」とこぼす位で、丁度言葉を覺える頃の私がこの間に置かれて面喰つたとしても無理はないであらう。恐らくこの爲であらうか、私は小さい時から仲々口が重かつたさうである。物心ついて以來未だ自由に口を利いた經驗を持たぬ樣に自分でも思ふ。小學校も段々上級になるに從つて敎室での質問應答で自分の吃る事が判り、友達から笑はれたりして全く發音に自信がなくなり、加速度的に重くなつて行つた。言葉を覺えるのが遲かつたのも逃避コムプレクスに依るものであり、又偶然吃つた事から自分は吃音だと云ふ恐怖觀念に囚はれて了つたのも、同じコムプレクスに起因して居るのであるが、母に對する被害妄想から自分の吃音は母が言葉を敎へて吳れなかつた故であるとして、その責任を母に轉嫁し、私を吃音者にした母は私を特に擁護すべきであるのに却つて冷淡でわざと人が吃つて苦しむ樣に色々用事をさせたりするのであると思つた。

然し何と考へた所で、實際に最も困るのは自分自身であつた。父母に願つて學校の夏休みに何日か矯正所に通はせてもらつたが。無意識心理に觸れない口先許りの發音練習では、その都度高い月謝と無駄な努力を費し一層の失望と落膽に陷るばかりであつた。父母から「これ迄にしてやつても治らないのはお前の心掛けが惡いのだからもう今後は知らぬ」等と言はれると、絶望と罪障感から本當に死にたくなつて了つた。

何かの本で「人間と動物との相異は言葉の有無である」と云ふ樣な事を讀んだ時、人間としての資格がなくて唯一個の動物に過ぎない自分を暗黑の內に發見して氣も狂はんばかりになつた。電車の中で聾啞學校の生徒達が手眞似で喜々として語り合ふのを見て、寧ろ啞になれたなら等と考へた。口答試問の時の自分の醜態を想像しては、父の望む高等學校入學等到底見込はなく勉强は厭になり、極度の劣等感から學校の成績等顧る餘地なく、唯日々吃音の苦みを逃れる努力丈けで精一杯であつた。遂に「私は吃りですから敎室で一切指名等しないで下さい」と敎師に申出るに至つて、內向リビドーの築いたナルチスムスの城砦は礎を脅かされる樣になつた。斯く迄の苦しみも父母には解つて貰へず、父の前等で吃ると叱られるので成る可く物を言はぬ樣にして居たし、小さい子供にでも出來る用事も吃りには非常な重荷なので、つひ言ひ付けに背いたり嘘を言つたりして了ふ。そんな罪障感から出來る丈け避けて居た。嚴格な父を私の無意識は何時の間にか取込んで、峻嚴な超自我を形成して居たし、冷たい家庭は現實よりの逃避を許しては吳れなかつた。この樣に內外から責められ乍らも對象範圍內の狹い私は堪へ難き憎惡を他に轉位させる事も、何物かに昇華させる事もなし得ず、唯父母のみに向けて獨り惱んで居た。或る時等一寸した事から母と爭ひ私はピストルを持ち出して母を殺し、自分も死なうとした事があつたが、今にして思へば母に對して何故かく迄深い憎惡を抱いて居たか不思議であり、夢から醒めた樣な氣もするが、事實極く最近精神分析が少しづゝ分つて來る迄その儘持ち續けて居たのであつた。

**私の家庭**——赤ん坊の時から育てられ、啞を羨やむ位重い吃音に惱まされ乍らも曲りなりに大學を終へ、就職したが間もなく罹病し爾來足掛け四年間病院に入れてもらつて居り、加之些かの自己分析に依つて從來の病的憎惡感情を殆んど解消した今日、恩義の深い父母のコムプレクスを明るみにさらけ出す事には、超自我の禁制が働いて殊に病床での筆は滯り勝ちである。

然し成長の過程にある子供の自我は極めて薄弱なものであるから、兩親並びにその身邊の指導者は充分の愛情、理解、献身を以て支持すべきものであり、譬へ「兒童の教育を出生の第一日より始め」「幼兒期に分析を施して神經症になるのを防ぐ」等云ふ事は實際不可能であつたとしても、本能生活又は感情生活に於ける障害に因る性格構成上の誤謬を些かでも訂正する事なく反對に増强せしめ、私をして社會生活への適應を不能ならしめた事に對しては、父母の側にも分析學を知らざるが故の過失が在る事を認めぬ譯には行かない。が、これはそんな事への無用な抗議でなく、自己をよりよく分析する爲に冷靜な科學のメスを父母のコムプレクスの上に揮ふものである。

祖父は貧しい士族、その三男一女の長子として生れたのが父である。祖父は表面お人好しであるが仲々頑固で强慾、そして全く無能な人であつた。故に父の少年時代の生活は随分苦しかつたらしく、父が小學校だけ終ると苦學し、夜間の實業學校を卒業して就職する頃は既に一家を支へ、弟妹の教育迄負擔させられて了つた。その上祖母は全く無學、エスと自我の區別さへ疑はれる位獸的な人で、憎悪の總べてを一家の働き手である父に向け、父の世話になつて居る末娘を溺愛した。長子に對する疎隔感や母性感情の内に潜む憎悪を祖母は非常に露骨に示した。

父が地方に赴任する時、祖父母は東京の便利な生活に執着して、父母と一緒に田舎に行く事を決してしなかつた。これは父母の側にも亦、不愉快な祖父母から離れて二人丈けの生活をしたい氣持があつたゝめとも思はれるが、之が祖父母の無意識に自然に感ぜられ、兩者の間の溝を益々深くしたらしい。慾の深い祖父母は父が段々出世するに從ひ昔の貧乏を忘れて贅澤な生活を好み、弟妹をもつと厚く待遇せよと要求する。自分には殆んど親らしい事もして呉れなかつた祖父母の、この様な態度に對して父が快く思はないのは當然である。

貧乏の苦しみを充分に味はされた父が、金錢を尊んだのも不思議はない。而も、少し財産が出來ると周圍のものが何かと縋り付いて來る。大切なものを奪ひに來るものを警戒する心理から、祖父母は素より親戚、社會に迄も被害妄想を抱き排他的な吝嗇となり、獨力自成の人に有り勝な強いナルチスムスは、祖父母から父が相續した唯一のものとも云ふべき基督教の信仰に依つて强化され、遂には或る種の精神病者に於けるが如き獨離症的な傾向をさへ生じ、親戚、友人等との交際を好まなかつた爲、周圍からは可成り非常識に見られる事が多くなつ

た。

然し他の人はそれで大して困りもしないであらうけれども、父母以外に頼る所のない子供の私には色々と迷惑な問題が生ずるのである。アーネスト・ジョーンズの所謂「時代逆轉の空想」なるものに助長されて「子供と祖父母との同一視」が起る。卽ち子供の時分に親に對して抱いた敵意を子供に轉位する。この傾向は貧しい家庭に於て殊に著しく、その親達は子供が自分より良い生活をする時があらうとは決して思はず、子供は大人になつたら自分の子供に同じような事をしてやらうと考へる。そこで本當は祖父母が悪いのに子供を虐め叱り飛ばして子供を哀れな犠牲にしてしまふ事がある。私の父はその肛門性格による過敏な良心とこの「子供と祖父母との同一視」とから必要以上に嚴格であつた。私を養子に迎へる事に最初口を出したのが祖父母であり、血筋も祖父母の方に近かつたから、この錯綜的同一視は一層容易に行はれたものと思はれる。

父に取つて子供の養育は彼の從事して居た土木事業と同じであつて、最少の費用で最短期間に竣工するのが理想であつた。又それは一つの投資でもあつたから、私の將來に餘り大きな期待は持てぬと悟つてからは、拂込を餘り喜べぬのは人情であらうし、段々財産が殖えるに從つて、相續人たる私に贅澤を覺えさせまいとして最小限度の小遣しか與へなかつたのは、自分の實子である財産の番人たるべき私を、せめて增さなくとも減らす事の少い人間にしたかつたのであらう。

私を祖父と同じく無能と視た事と、順調に社會生活に成功した父の自信とは、自己の力を子供の上に振ふ事を無意識に喜び、子供自身の力による發展を好まない。かうした指導束縛は子供の自然的發達に就いて充分な注意を拂ひ、必要な範圍內で行はれたとしても尙憎悪感情を起させるものであるが、前述の如き自己本位の大人の立場を「子供を强くして浮世の荒波に慣れさせる爲」等と理屈附けしたりマゾヒスティシュな信仰の强制に依る自由の剝奪は、さうでなくても離乳、逃避コムプレクスに依つて神經症的になつて居る私を益々その深みに追ひ込んでしまつたのである。

母は勝氣で、然し惡く云へば强情である。事業、蓄財、宗敎等にリビドーを分けて居た父には子供のない家庭が別に淋しくはなかつたらうし、却つて邪魔な消費者の居ない方がよかつたかも知れぬが、母としてはPenisneidの代償、母性感情の對象として、且つ又意識的には周圍に對する虛榮から子供をもらつて育てる事を主張したらしい。

結婚後數年を經ても子供の出來ぬ責任から、他人のでも立派に育てゝ見せますとの意地を持つたであらう母は、先に述べた父の嚴格さに手加減をするどころか益々酷くそれを實行した。昔氣質の武士の家庭から基督敎に入つた母は丸で融通のきかない冷い感情を持ち續け、事私に關する限り父に絶對服從であつた。私は子供の時から無理に日曜學校に通はされ、毎日學校から歸ると外に遊びにも出られないし、家に友達を連れて來るのも禁ぜられた。しかし母は私が家の中に居れば安心して居るので遊び相手、話相手なんかには滅多になつて吳れなかつた。母は總べての娛樂、スポーツ迄罪惡の樣に思つて居たし、昔の小學校を出たゞけなので參考書の必要を知らず、それは怠け者が使ふものだと考へて容易に買つて吳れなかつた。況んや外で何か飲んだり食べたりする事は、絶對に許さない。許さないから小遣は吳れない。

母は何らの趣味を持たず、人との交際も好まず、唯家の中をキチンと片附けて奥樣然と振舞つて居るから、客があつても少しも面白くない。親類の者が遊びに來ても却つて迷惑さうな顏をして御馳走もしないので皆段々足が遠くなり、來ても隱居所で時を過して歸り際に一寸挨拶すると云つた具合であつた。私は成るべく母を避けて隱居所で遊んで居たが、そこでは常に祖父が「倅夫婦は贅澤をして居りますが私共は貧乏で……」とか何とか盛に父母の惡口を云つては人の同情を買ふ樣な態度に出て居て、一寸したものでも貰ふと丸で乞食の樣にペコ／＼頭を下げて居た。その癖突然入つて行くと臼で茶を引いて居たり、蒔繪の重箱を擴げて上等な羊羹や餅菓子を食べて居て、とても惜しさうに薄い一切を吳れたりしたものである。私は大きくなるに從つて祖父母の惡い所が分つて來たが、どちらかと云へば祖父母の味方をし、共に母から虐待されて居るのだと思つた。母が親類の者を餘り厚くもてなさないので、私は親類へ遊びに行つて御馳走になる事がとても辛かつた。稀に友達が來た時も同樣である。吝嗇の爲もあつたが、自分達は偉いから人が來るので、何も接待する必要はないと云つた氣持が多分にあつた樣に思はれる。

さうした態度を私にも採らせやうと云ふのであるから、與へられる小遣錢が少いのは當然である。而かも相當の家の子であると云ふので交際費は一層必要な場合が多かつたが、無情な母の爲に「吝ン坊」の汚名に甘んじなければならなかつた。その上私は吃音の爲に、大きな劣等感を持つて居たから「『吃り／＼』と揶揄かふ奴等とだつて、汁粉の一杯づゝもおごつてやれば仲好しになれるのに」等と考へると、口惜しさ、腹立たしさから無性

母が憎くなるのであつた。母は父から預つた金を皆自分の臍繰りにして、祖父母や自分には僅かしか與へないのだと思つたが、これは我々の憎惡から逃避して母をその矢表に立てゝ居た父の肛門性格を、母が馬鹿正直に實行して居つたのであつた。母は父の子供時代の話に感激し、貧乏の效用を過大に評して、現在の生活程度を考慮に入れず、唯小遣錢を制限する事に依つて、貧乏と同じ效果を擧げ得ゝと信じて居つたのであつた。「現實生活の如何なる場合に於ても、子供の攻擊に對して父親を護るより、父親の怒りに對して子供を庇ふ方が遙に大切である」と言はれて居るが、これとは全く反對な態度を採つて來た私の母は所期の目的とは凡そ懸け離れた結果を生じ、その上父に對する私の憎惡迄一人で引受けて了ふ事になつたのであつた。

私に於て幼兒性感、露出慾、窃視慾、サド・マゾヒスムス等の發現は相當顯著であつたが、今は觸れぬ事にする。

以上、相前後し、重複し、迂回した長たらしい文章に依つて私は漸く私の「逃避コムプレクス」卽ち「母に對する憎惡」を語り得たと思ふがその內容たるや愚な田舍老人の返らぬ繰言の域を出ない。玆に私は潔く「自己分析」の題を撤回して、本誌前號に於ける諸先生の玉稿に依つて「不良少年少女の心理」を硏究された讀者諸賢の分析俎上に自己を資料として捧げることゝする。(完)

**附言**――なほ本誌第五卷第一號所載拙稿中の正誤表を左記しておく。

一一〇頁下一六行「彌太夫」を「孫太夫」に。

一一三頁上二〇行「禪吟」を「蟬吟」に。

## 通信

大阪在住研究會員　廣井　重一

講習會の皆樣から連名にて御鄭重な御禮狀を頂き誠に有難ら存じました。些細な贈り物に對して喜んで下さつただけでも滿足いたします。

『新しい立身道』本日を以て讀了いたしました。誠に啓發せらるゝところ頗る多く感謝堪えません。附錄の意義も重大なるものあるな感じました。小生近來讀書に遠去かつてゐましたが、この書だけは食るやうに拜讀いたしました。

フロイド先生肖像も確に拜受いたしました。立派な額面で御座います。まづ御禮旁々御挨拶までに。

四月十四日

時評

# 「死なう團」事件と所謂國民性

延島英一

## 一、所謂國民性と死の禮讃

日本の位置が國際的に重要性を增すと共に、外國に於て日本研究熱が旺盛となつて來たことは周知の通りであるが、外國の日本研究者の眼に日本人の國民的性質として第一に映ずることは、日本人は死を頗る禮讃する國民であるといふことであるらしい。日本人といふものは恐ろしく死を尊び、神聖視する國民であるといふのが、彼等の日本人に對する概念であるらしい。彼等は此日本的性格を理解せねば、日本の政治上の動向は全然分らぬといつてゐるのである。

かゝる見方の一例として、私は二月二日のジャパン・アドヴァタイザの「日本の輿論」と題する社說を擧げて見たい。此英字新聞は米國人の經營するものであるが、上海のノースチャイナ・デーリ・ニュースと並んで、極東に於ける最も權威ある新聞と世界的に認められてゐるものである。同紙の右の論說は、宇垣氏の組閣失敗、軍部の主張貫徹に關聯するものであるが、日本の輿論の性質に就いて次の如く言つてゐる。

「日本人の判斷の規準は、民主的傳統と訓練を持つ國民のそれとは相違す

---

**ABHUB アブフウブ**

他の學問がアブフウブ（屑）として棄てたものゝ中から、分析は眞理の黄金を探し出す。

### 時計の夢

不老泉院主

前號本欄に『時計の子』と題して、子供の時計に對するアニミスムス（萬象有靈觀）を研究しておいたが、三月四日都新聞文藝欄には丸山薰氏が『時計の夢』と題して、幼兒期の思ひ出を語つてゐた。同じくアニミスムスの思想が描寫せられてあつて私には面白かつた。初めの方にかうあつた。

「子供の頃、時計といふものが不思議に思へた。意思をもつてゐる魔物のやう

る。日本人は主張に判斷を下す場合、其爲に死を辭せぬ者のある主張を死を賭する者のない主張より重視するのである。日本の全歷史を通じて、斷乎たる少數者が死を敢てして其主張を貫いた例は枚擧に遑がない。例へば德川時代の農民一揆の歷史を見よ。一揆の首領は、皆抗議を表明するに自らの血を以つてし、其力で輿論と政府を動かして遂に主張を貫徹したのである。此自殺のテーマは、公的たると私的たるとを問はず、日本人の全生活に漲つてゐる。卽ち死を辭せぬ者は至誠であり、至誠の人は正義だといふ見方である。日本の輿論と其動きを理解するには、此事を先づ必らず知つて置かねばならぬ。」

　此英字紙の日本人觀に、不服を唱へる日本人は餘り多くないと思ふ。日本人の間に最も弘布してゐる西洋輕蔑の感情は、西洋人は日本人よりも命を惜むといふ概念が根據となつてゐる。同じ理由で日本人は支那人を兎角蔑視する。日本人自身、日本國民の優秀性は、死を恐れぬ（喜んで死ぬ）といふことにあると大多數信じてゐるのである。卽ち日本人自身、日本人の國民性は死の禮讃にありと信じ、それを誇つてゐるのである。

## 二、「死なう團」事件と輿論

　上に擧げた英字紙の社說が未だ私の念頭を去らない中に、卽ち其十五日後の二月十七日に、所謂「死なう團」事件と呼ばれる狂信事件が東京に起つた。此「死なう團」といふのは、「死といふ事を誓願とし、諦觀とする」宗敎團である。「直參ノ滿足、アラウレシヤ、實行ノ貫徹、アラウレシヤ、殉敎ノ成就、アラウレシヤ、アラウレシヤ、アラウレシヤ、死ナウ!! 死ナ

---

にも思へたし、大勢の倭人達か寄つてたかつて何事か策謀を凝らしてゐる玩具の國のやうにも考へられた。時計が時刻を示す機械だといふことは敎はつて識つてはゐても、その機械といふのが大體不思議だつたらしい。何故か、時計を見るとそんな聯想が漠然と伴ひ、時計を觀念すると人の顏や倭人の幻影がちら〳〵浮かんでくるのは奇妙だつた。」云々

### 死神時計

時計はそのやうに生きものとして觀念せられるのであるが、その生きものゝ原型は子供にとつては自分自身に非ざれば母であるやうだ。で、懷中時計の如き小さな器械に對しては（前號の子供の話の場合の如く）自己を投出してこれを子供として見るが、大きな時計に對しては母親、殊にフロイドの所謂第三の母（「宮選みの動機」參照）として、氣味惡く、併しなつかしき死神さして觀念せられるらしい。その好適例は、同じく丸山氏の文中の續きに出てゐる。曰く、——

「一つ、柩ほどの大きさのあるボンボ

ウ!! 死ナウ!!」といふことを信條とする宗教運動である。（東京朝日新聞二月十七日夕刊による。）

上に擧げた英字紙の日本人觀に不服のない人々にとつては、此宗教團體、此宗教運動は、日本の國民性の純粹の發露、日本の民族的性格の正統的表現と無條件に受容れられさうなものだが、事實は輿論はこれに對して意外な反撥を示したのである。私の知る限りでは、此事件を一種の狂信的行動と見る以上に評價した新聞は一つもない。此を戲畫化しなかつた報道機關は一つだになかつた。卽ちアドヴァタイザーの所見は完全に裏切られ、日本人必ずしも自殺を以て至誠、正義の行爲とのみ見ないことを明白に示したのである。

しかし日本人が一般に死といふことに異常な昂奮、感動、共感を示す事實がある以上、我々は何故「死なう團」が國民の間に當然の昂奮、感動、共感を惹起しなかつたかの原因を探索せねばならぬ。其原因は「死なう團」の教義の低調、目標の愚劣、意識の狹隘なことが、「崇高な死」と餘りに釣合を失してゐたことにある。從つて其知的水準が「死なう團」以上にある人にあつては、其行爲は唯だ狂信の所産、異常精神の一發作としか感ぜられなかつたのである。此事は、日本人の間に於ても、死が「抑壓されてゐる」願望であることを明瞭に示すものでなくて何んであらう。

### 三、死の願望の精神分析

精神分析は、精神作用に多元的動機を認める。長い進化の過程を經、又現に其過程の中にある人間の精神作用には、種々樣々な本能的願望が働いてゐるが、其中現在の自我と調和せぬものは、意識面に於て抑壓を蒙ると、それ

---

ン時計といふ奴が、ひと頃、家族の一員のやうに加はつたことがあつた。父が諸々方々の官舍を移り住まはなければならなかつたので、たぶんそれらの家の一つに備へ付けられてゐたのだらう。それは日本間から洋間へ曲る角の、廊下の突當りに立つてゐた。その方へ近付いてゆくと、おのづからその硝子の扉の中へ吸ひ込まれさうであつた。もしさうなつたら、それこそ二度と戻つてこない時間のトンネルの中へ捲き込まれてしまふぞといふ怖ろしい氣持がして、お月樣の顏のやうな振り子がゆらりと窓明りの方へ傾くのも不氣味だつた。」云々。

「時間のトンネル」とは面白い表現ではないか。丸山氏には膓管出產空想があるらしく思はれる。筆者にもその空想は相當に强いらしいのだが……。出產空想のあるところ、死の空想も同一の形態をとる。

### フロイドに代つて

文藝春秋社發行『文藝通信』三月號に「フロイドへの質問」と題して石川達三

は敎へるのである。自我は抑壓によつて統一を保たれる。そして精神分析の最大發見の一つには、死の本能及願望が精神作用の中に演ずる重大な役割が數へられる。フロイドは此死の願望を以て、安定への本能と看做してゐるが、其發源は恐らく一切の生物の原始狀態たる無機的狀態にあるのではないかと想像してゐるのである。（『快不快原則を超えて』）

死の本能は、生が初ると共に生じたものである。從つて生の本能と表裏をなして居り、生の發展と共に益々强まらざるを得ぬ運命のものである。其故に又死の願望は、精神作用の意識面に於て最も强い抑壓を受けざるを得ないのである。然りとすれば、此願望に出口を與へるものが、人間に最大の昂奮と感動を與へるのは毫も不思議とするに足りない。それは何も日本人に限つたことではない。有ゆる民族に共通に見られる現象である。唯だ日本に於ては、此願望の出口として與へられるものが歷史的條件によつて特定されてゐるのである。此歷史的條件の中では、宗教及地理的環境の他に、日本國民が其政治生活に於て、長く武人（死を職業的最高榮譽とする）の指導を受けて來たことを重大な要素と考へねばならぬであらう。

生と共に發生し、生の本能と表裏を成して發達し、しかも生命と最も調和せぬものとして、最も力强く常に抑壓されてゐる此死の本能及願望は、しからば何によつて最も端的に其出口を與へられるか？ 死は個人の生存と不調和なのだから、其願望の爆發の契機は、個人以上のものとの結合によつて捕へられねばならぬことは理の當然であらう。卽ち個人的存在の意識よりも高次な意識と結びつかねば、それは抑壓を押退けることは出來ない。此理由により國家的、政治的、社會的な意識及行動、學問、藝術、宗教、戀愛等は、

---

氏がその初戀を告白してゐる。氏はフロイドに質問してゐるのだが、私が代つてお答へして見よう。氏は冒頭にまづかう云つてゐる。

「小學校へ行く前、六歲か七歲の時分に、近處にゐた少女に特別な關心を持つた事はあるが、まさかそれまでも戀愛の中に數へることは出來ない。どんぐりは樫の木ではないのだ。」

この一句なか〳〵面白い。自分で自分を反駁してゐて氣がついてゐないのだから面白い。石川氏自身が幼兒期戀愛と思春期戀愛との關係からどんぐりと樫の木との關係を聯想してゐるだけで十分ではないか。こちらが逆に質問して見てもよい。「どんぐりはまさか樫の木と共に植物の中に包含せられないとは云へまい」と。どんぐりと樫の木とは全然同じものだと云ふならば、それは鹿馬か、狂人だらう。併しどんぐりと樫の木との間に、必然的關係を認め得ないやうならば低能だらう。石川氏は續けてかう語つてゐる。

「それよりも興味のあるのは、まだ六七歲のころ、母の實家へ法事に呼ばれて

極めて死の願望と結び付き易いのである。

しかし此高次なるべき意識が、「死なう團」の場合の様に低劣であると、それは人々の精神內に於て抑壓を押退け、死の願望の爆發を助け得る程强力になり得ないから、何人にもそれは一目瞭然、狂信的徴候、異常精神の發作と映ずるのである。だが此結び付く意識が實際高い場合には、死の願望と高次意識の結合は、異常な昂奮、感動、衝動等を人心に與へることが決して稀でないのである。

## 四、精神分析的教育の必要

「死なう團」事件が新聞の三面を賑はしてゐた時、私は此事件を以て日本國民に對する警世の資とする具眼の士の出ることを私かに期待してゐた。何んとなれば近來國民生活の各方面に亘つて「死なう、死なう」の聲が極めて喧すしく、共爲に國民生活の健全な發達が少からず阻碍される狀態にあつたからである。

此四五年來の新聞に眼を通すと、政治家にして「死なう、死なう」と叫んだ者は決して少くない。廣田弘毅氏は、「一死報國」の決意を以て組閣した。所謂革新派靑年將校は、「人柱」となる決心を以て行動した。無產政黨の指導者大山郁夫氏は、「我等の行手は墓場である」と絶叫して、人心に絶大な感動を與へた。濱口雄幸氏は、東京驛頭に於て一暴漢に狙擊された折、「男子の本懷」と呟いたのである。其他「××の前にこそ死なめ」とか、「政黨政治死守」とか、「切腹」とか、兎に角「死なう、死なう」の聲は、有ゆる傾向の政治的指導者によつて擧げられてゐるのである。所謂「死なう團」事

行つた記憶である。實家は、田舍の豪家で、廣い座敷と廣い庭があつた。土間は表通りから裏通りまで通り拔けの出來るものであつた。この家の女中がひどく私を可愛がつてくれた樣に思ふ。そして家へ歸つてからも の女中の事が忘れられないのだ。(不老泉院曰く、母と女中とが錯綜されてゐる。)殊に夢に出て來るそれが殆ど每日々の夢に出て來るのであるから幼少の私はひどく惱まされたものらしい。(不老泉曰、惱みが喜びであることは、ドイツ語 leiden がそれを證す。)その夢の場面が每夜きまつてゐる。場所は、母の實家の例の大きな土間である。他に人氣はなくて、この女中が居る。(不老泉曰、家の中の土間が母と女とに錯綜せられ、同一化せられてゐる。)居ると云ふのが、首が切られて居て、手足がばら〳〵になつてゐて、胴は着物を着てゐない。而もどの部分もが生きてゐる。さして苦痛な樣子もないし血も流れてゐない。彼女の首は私をふり向いて悲しさうに笑ふのだ。それが私には、いたましくてたまらなかつたものである。」

件の發生は、此一般的氣流と切離しては考へられない。だから若し具眼の士があれば、當然「死なう團」事件を斯る一般的氣流と關聯させ、其一つの表現、一つの戯畫として、警世の資に供しないではゐられなかつた筈であると思ふ。

然るに事實は、政界に於る「死なう、死なう」には昂奮し、感動し、衝動を受け、それを禮讃してゐる新聞や所謂輿論指導者は、例外なく「死なう團」に對しては、好奇心以上の興味を示さなかつた。前者と後者の基礎的關聯に注意さへもしなかつた。これは日本の輿論指導者及製造者が、精神病理に關して甚しく無關心であることを示すものでなくて何んであらう。

精神分析は、意識の高いことゝ精神的健康とを混同しない。意識は極めて高くとも、精神的に不健康な例は多々あるのである。死の本能に對して抑壓を失することは、其抑壓を失する契機の如何と關係なく、立派な精神病理的現象といはねばならぬ。

死の本能に對する抑壓を失し、死の願望に精神作用の支配を委ねることは、個人生活のみならず、社會生活にとつても極めて危險である。死の本能は高い意識と結び付く場合、それは病理的現象と見られずに、一種崇高なものと映じ、非常な快感を人心に起させるからである。

又それが高い意識と結んで、一般人の精神に昂奮、感動、共感、衝動等を傳播すると、其病理的現象は蔓延し、傳染し、社會的精神狀態に一種の歪みを與へ、集團生活の健全な進歩と發達を阻碍する危險が多分に生ずる。外國人のみならず日本人の多くも、現在日本の一般狀態が焦燥氣分に驅り立てられてゐることを認めてゐる。これに關しては、多くの説明が與へられてゐる

---

最後のところは、分析公式で解釋すれば去勢恐怖であるが、やはりこの公式解釋を下して差支へなからうと思ふ。自由聯想をとらなければ確實なことは分らないが、象徴が公式で出てゐるから差支へないと思ふ。これが象徴である（手足そのものゝ切斷でない）ことは血が流れてゐず、切られた各部分か獨立的に動いてゐること、且つ彼女が全裸になつてゐることで分る。母親のペニス缺如に對する同情と憐愍ととがかくの如き夢を構成させたものと思はれる。さうしてこの同情と憐愍とは直ちに「救助願望」となつて表はれてゐる。曰く――

「こんな悲慘な姿になつてゐる彼女を誰一人助けてやらうともしないのを見ると、私は涙ぐんでそばへ寄り、ねえや！と云つてその首を抱いてやる。彼女は坊ちやんさ答へてはら／＼と涙をこぼすのである。ひやゝかな土間に轉がされた彼女の手足と首も胴もが、いたましくうごめくのであつた。その夢が毎夜々々續いて、私は胸をどき／＼と波打たせて眼をさまし、而も今一度その場面を見たくて

が、そして其説明の或ものは眞理を含んでゐるが、しかし精神的傳染病に對して適當な處置が取られて居らぬことも亦、其理由の一つに數へられねばならぬと思ふ。

然るに實際は適當な處置を取るどころか、國を擧げて傳染症に感染し、其發作に陶醉してゐるのが現狀なのである。「死なう、死なう」の聲が至るところで擧つてゐる時、それに適確な診斷を下し、それが病理的現象であることを指摘する代りに、却つてそれに昂奮し、感動し、共鳴して、病勢の一層の亢進と蔓延を促進させてゐる形がある。所謂焦燥氣分とは、抑壓し適當に處置すべきものに對して、適當な手段を誤つたことに少からず原因があるのである。此爲に日本の國民生活は、どれだけ順調な發達を阻碍されてゐるか量り知れぬものがあるのである。

「死なう團」を變態心理的現象と感じた人々は、更に其眼を廣く轉じて、此變態が、今日本の諸般の生活を深く犯してゐることを認識せねばならぬ。此病症に一度罹ると、死の禮讃以外のものは一切耳にも入らず、眼にも映じなくなり、價値が感ぜられなくなるのである。更に死と直接結びつかぬものに對して一切興味が減退する結果、國民の政治的、經濟的、社會的、文化的、精神的生活と發達が荒廢に歸せしめられる恐れが少くない。

此點に於て、精神分析的教育の必要は益々高調されねばならぬと思ふのである。（四月五日）

---

急いで眼を閉ぢるのであつた。」と。

母のペニス缺如に對する救助願望となつて表れてゐる母親定着、而もそれが女中コムプレクスと第三の女としての死神（土間）と錯綜してゐるところに石川氏の情死願望が、豫見せられてゐる。この「いたましい」、「悩ましい」夢が如何に本人に快樂であつたかは、彼が急いで眼を閉ぢて再びその場面の人とならうとの願望を露骨に示してゐるところに注意すれば自ら首肯せられるであらう。

## 投資と回收

十圓や二十圓の投資で百萬の富を一擧にして獲得することが全然不可能事であることは誰にでもよく分つてゐるが、リビドー投資に恐ろしくケチでありながら相手から非常に大きな好意を期待してゐるやうな蟲のいゝ人がある。義務を果すことをせず權利ばかり主張してゐる自己中心的な人がある。尤も、本人はケチな位だから、自分の僅かなリビドー支出に對して莫大な觀念支出を一人でしてゐるかも知れない。そこにナルチスムスの自

己盲目性がある。自己分析もこの自己盲目性（スコトミザチオン）の崩壞にまで達するのは容易なことではない。最小限の投資で最大限の回收を許してくれる（と妄想せられてある）のはたゞ神樣や佛樣だけだ。一錢のお賽錢でゞも、家内安全、商賣繁昌、富貴榮達、子孫繁榮の大回收を與へてくれるさうだから――。人間は神樣や佛樣とは生れが違つてゐると云ふことを忘れないやうにしたい。

## 特許局登錄 名稱のぞ記

田中虎男

私は商工省特許局へ名稱登錄第二類を調査する用件があつて、藥品賣藥等の名稱を二日がゝりで閲覽しましたが、相當變つた名稱が登錄されて居るのです。特許を受ける事は獨占欲から來る事でせうが、特許請願者自身の無意識心理も伺はれて面白いと思ひよして、閲覽簿から重なものを氣付いた丈拾つて列記し、御參考に供する次第です。

一、月に關するもの―月の母。月の雫。月の友。

一、母に關するもの―母さん。生命の母。月の母。熱の母。性母。病める母（スヒテリー藥）

一、宗教的なもの―弘法天師行脚（奈良）滿願（大阪）。神の玉（廣島）。ナムアミダ（岡山）。眞言（大阪）。やぐみ（大阪）。人の道。

一、性的なもの―處女（久留米）。戀の痛手（大阪）。カルメン。恩愛。愛染堂。アイジン。ウイツク。偕老同穴。性極。ゆめとの。性母。

一、思想的なもの―マルクス。レニン。勞農。インテリ。ヨロン。左翼（大正十四年九月、中山太陽堂）右翼（同）。

一、願望よりなるもの―金の湯。金鶯。金水。寶船印。パス。オーカタピン。モチロン。ヨカロー。エスオーエス。

一、其の他―意外。アベコベ。轉宅、護摩の灰。禁酒。禁煙。鬼殺。のばそ。一睨み。親玉。キングオブキンクス。コマツタ。

一番多いものは天、月、金。天は何百とある。宗教的なものは關西方面に多く、思想的なものは大都會に多く、中山太陽堂主の如き產業資本家が、當時すでに斯の如き文字商標登錄するが如きは興味ある事と思ひます。

## 思出の解決

大槻岐美

今から廿三年程昔のこと、私が尋常五年生の秋の運動會の時であつた。その頃としては、新しい試みであつたのであらう。當時「ダンス」と云つてゐたが、あるリズムに乘つて規則的な運動を繰返す遊戲をすることになつてゐた。ところが當日、愈々「ダンス」にとりかゝつた時、實に思ひもかけぬ大混亂に陷り、拾收す可からざる狀態に立至つて了つた。今まで、習の時にはオルガンを用ゐてゐたのに突然、何の前ぶれもなくクラリネツトやうのかん高い調子の樂器が出現して皆々を驚かしたからであつた。とは云へ、生徒たちは來客の手前もつ　落着いて出來な

い譯もなからうと隨分焦りはしたが、何ともいたし方なく結局は、めちや〱な「ダンス」を演じて恥さらしをして除けた。

翌日學校で受持ちの先生が敎壇の上から云ひかけた。「さて、昨日のダンスには……」すると生徒は一齊にガヤ〱と騷ぎ立て、先生の言葉を消して了つた。然し、そのガヤ〱が何を意味するか生徒等もわからなかつたことなのだ。すると先生は一段と聲勵まして叫んだ「みんな〱靜かに！ 先生が惡かつたんだよ。あんな笛なんか急に吹かせて。みんなは惡くない!!」

その瞬間騷然たる敎室は一時にひつそりとして了つた。

× × ×

此の小さい事件を今に至るまで私が覺えてゐると云ふのは、考へて見るとをかしな話であるが、今思ふにこれは未解決のため忘れ得なかつたものであらう。それは第一、樂器の違つたゝめにあのやうな大混亂を生じたと云ふ一つの不思議に思へた事實と、先生の言葉に依つて生じた級全體の沈默の意味についての不思議とである。然し、第一のは本誌本號十四頁「一定の條件刺戟の中に別の刺戟が入ると禁制が生ずる」と云ふ條を參照して見ると、立派にこの說明はつく。全くあの失態は私達生徒の責任ではなく、强いて云へば先生に條件反射學的敎養が無かつたことにその責めは歸せらる可きであつた。つまり無智の結果であつて、先生が生徒を責めなかつたのは理解ある態度であつた。けれ共、當時私達生徒は、これもみな自分等のせいであつたと、超自我の苛責には惱まされてゐた。（これから第二の？に入るのである）ところへ超自我のシムボルであるところの先生からその上まだ責め立てられるらしいと早呑込み（投出）をやつたので、これはかなはんと苦しさに耐え兼ねて、今まで內に向いてゐたサディズムが、果然先生に向けて防禦的に働き出してガヤ〱となつたのである。ところが、先生は責めるどころか却つて失敗を慰め、先生の手落ちであることゝして認める態度であつたので、サディズムは三轉して又自己にもどり、非常な勢ひで罪障感と合流してガヤ〱、な止めさせ、その現れとしては先生への感傷愛となつたやうである。

本號の特輯題目と關係があるので、思ひ出すまゝに書いて見た。

## 新刊紹介

▼『禪のある人生』石丸梧平著——佛教と精神分析學とは幾多の類似點を持つてゐるが、佛教諸宗中でも殊に禪宗とはその類似點が多いやうに思はれる。禪の說くところはなかなか心理學的である。殊に無意識心理への洞察を示してゐる點が多い。著者は禪學者ではないが、自家の人生創造哲學の立場から禪宗を極めて自由に、創造的に把握してゐる。「旣成宗教家、佛教徒たちからは氣に入られないかも知れないが」敢えてそれには介意せぬと斷言してゐる。分析學徒もこの書を讀んで見ると、科學を實踐に應用するに就いて參考になる點教へられる點が少くない。(目次大要——神とは何ぞや、佛とは何ぞや。智慧と禪定・解脫の道。坐禪と公案。禪と人生創造哲學。隨所解脫の道)——春陽堂發行、定價一圓三十錢。

▼『人は何故に失敗するか』久野豐彥譯——「無意識が生活を決定する」と精神分析學の立場から言ふ事が出來るが、それを痛切に感じさせるのは實に本書である。原著者、W・A・ホワイト博士は米國の精神分析學者として一流の權威。數々の分析實例を擧げて、廣く具體的に失敗者のコムプレクスを抉り、如何にして人生の優者たり得るかを平易に通俗的に說いてゐる。本誌の讀者諸氏には特によく理解され得るであらう。(目次大要＝失敗は豫防出來るか。失敗者の兩親。社會に出て初めての仕事。性愛はビジネス界に爆彈を投じた。夫を失敗させる妻。戀人なるが故の失敗者。空想家と虛勢家。憂鬱病。家庭で作られた失敗。性に合はぬ仕事、など)偕成社發行、定價一圓二十錢。

▼『パヴロフの思想と業績』——福岡市中島町の科學文化協會發行『科學評論』三月特輯號。內容は「パヴロフの思想と學的業績」柘植秀臣。「パヴロフとソ聯の心理學」山崎末彥。「パヴロフの思想」大行慶雄。「條件反射學の社會學的意義」高宮太郎。「パヴロフ小傳」石田守一、「パヴロフの横顏」小泉幹、など。一部二十錢。

▼『日本讀書新聞』——我が國の文化が既に世界的水準にまで進歩してゐるのに、文化新聞といふものが未だ一つも存在せず、多年文化人の間にこの種新聞の出現が要望されてゐたが、去る三月一日遂にこの時代的要求を充す新聞が東京神田小川町通り株式會社日本讀書新聞社から創刊された。每月一日、十一日、二十一日發行の旬刊紙で、新聞半截型、每號十六頁、各分野の權威者を總動員して文化諸斷面に生彩潑剌たる報道と解說の陣を張り、殊に讀書人のために實益と興味を兼ねた讀書文化の記事を滿載してゐる。今日の文化生活者には最も相應しい文化の新聞、讀書の新聞、教養の新聞である。(紙代は一部三錢、送料五厘、半ケ年送料共五十五錢、一ケ年送料共一圓)

## 探訪

## （十）木村（廉吉）神經科

東中野驛東口を出て南下し寫眞屋の角を曲ると靜かな屋敷町風の小路に入る。遠くから直ぐに「木村神經科」の電球入りの大きな看板が見える。赤屋根のモダンな建物で、新築であるから如何にもすが／＼しい。玄關に入つて聲をかける婆やさんが出て來て、やがて主人公木村廉吉博士が出て來られ、玄關脇の應接室兼分析室に招ぜられる。分析室は西洋間であつて、窓邊のカーテンには春ののどかな陽ざしが靜かに匂ふてゐた。

×

主人公は人々も知る如く、東北帝大丸井清泰門下の俊才であるが、久しく脊髓カリエスを病んで臥床してゐられたところ、この度快癒したので、學校の勤務を辭して上京し、一二ケ月前からこゝに分析醫として開業してゐられるのである。久しく肉體を病まれてゐたせいか、何處となく身體は弱さうであるが、併し風采は堂々してゐるし人品はよし、同性愛でも異性愛でも患者のユーベルトラーグングは相當なものであらうと云ふ感じがする。が、分析者としては人柄が如何にも淡々とし過ぎてゐて、患者のコムプレクスを飽くまで執拗に追及し剔抉する根氣に缺けてはゐないかと云ふやうな感じがないではないが、その穩健正常な人格には人々を信頼せしめるに十分であらうと思はせるものがある。西洋の分析學徒の間ではアレキサンダーに特別の興味を持つてゐられるが、如何にも氏にふさはしいやうに思はれる。

氏は元、河上博士の活動華やかなりし頃、京都帝大經濟學部に在籍し、現に經濟學士の稱號を併有してゐられるが、後、生家の業に緣の深い醫學に轉ぜられたのであると云ふことである。氏の故鄉は岐阜縣である。去年十一月、『精神乖離症の精神分析的研究』と題する論文に依つて學位を得られた。卒業後十年目であると云ふことであるが、年はまだ存外に若くて三十代である。併し見かけは四十四、五歲に見える。

×

分析室には寢臺と椅子二脚と小卓とが置かれ、壁間にはレオナルド・ダ・ヸンチの『モナ・リーザ像』の寫眞が揚げてある。「はゝア、母イマゴーがありますな？」と記者は笑つて云ひかけたが、氏はやゝ神經質さうな眼で額面を仰ぎつゝ、「いや別に意味はないので、たゞ昔か

ら手許にあるものだから」と辯明せられた。待合室と診察室とも見せて貰つたが、そこは共に日本間を改造したもので、椅子、卓子、寢臺、本箱など舞臺裝置の如く配置してあり、また廊下の押入は尿の試驗室として改造せられ、洗面器、試驗管、アルコールランプなどが適宜に置かれてある。

×

まだ開業早々であり患者は多くないが、氏の姉さん妹さんたちが近所に澤山居られるのでその方の紹介だけでも、多少はあるとのこと。ヒステリー患者が比較的多いと云ふことである。學生などが來ることを希望してゐられる。學生に對しては分析料を多少割引してもよいとのこと。殊に兒童の敎育相談に特別の關心を寄せてゐられる。

永く學校に勤務してゐたので、開業醫としての商賣氣が一向になく、廣告や看板を出したりするのも恥づかしいやうな感じがするとて、實際に初心な眼色で記者を見られるのであつた。

×

氏は趣味としては芝居を見るのが好きで、學生時代にはよく芝居を見て劇評をあちこちの雜誌に發表してゐたと云ふことである。近頃も歌舞伎座を訪れて、場内で富田義介氏に會つたと云ふことである。やがて氏の分析的劇評が本誌時評欄上に現れることであらう。讀者は樂しみにしてお待ちあらむことを希ふ。口繪に氏の肖像を揭げておいた。御參照を乞ふ。（記者）

## アプフウプ（拳闘の心理分析）

本號に戯曲を寄せてゐる元拳闘家嵐山君の云ふところに依ると、拳闘は屬國民が強いさうである。その闘爭力に復讐慾が混入するに對し、征服國民に於いては超自我の苛責がハンディキャップとなるのであらう。黑人の大選手ジョンソンの如きは永く白人を向ふに廻して選手權を保有し、また白人婦女を妾として取換へること三十餘人に及んだと云ふことである。そこにエディポス・コムプレクス的復讐慾・征服慾を豫想することは許されないであらうか。

（不老泉院主）

講座

# 術語の邦譯に就いて

大槻憲二

科學の術語を邦譯することは一般の人々の思ふよりも困難なことである。而も同じ學問に携はる人々の間で譯語が區々であると云ふことは甚だ不便であると共に、また後進に對して甚だ不親切なことでもある。我等は先輩の用ゐた譯語には差支へのない限りなるべく從順であらうと云ふ態度をとつて來たが、また自分等の用ゐ始めた譯語に對しても常に批判的な再考と改正とを怠らなかつたつもりであるが、またあまりに氣まぐれなやうな朝三暮四はこれを恥づべきものとして來た。

　譯語はまづ第一に正確明瞭でなければならぬことは申すまでもない。原語の包含する概念内容を能ふ限り全的に、過不足なく、傳へ得る如きものでなくてはならない。第二に、その譯語が日本人の傳統的語感に愬へて正常なものでなくてはならない。滑稽な感じや、不自然な感じや、無用な感情を附隨せしめたりしてはならない。例へば我等が今日一般に「抑壓」と譯し慣はしてゐるものは、その原語は Verdrängung であるが、或る人はこれを「排斥」と譯した。併し「排斥」と云ふ語は惡人や惡事に對する語で、そこに價値感情が豫想せられてゐる。が、科學は價値感情には無關係であるし、またあらねばならぬものだ。「排斥」と云ふ如き語は、從つて科學用語としては甚だ不適當である。「抑壓」の方が遙かに適當である。但し、語學的に云へば「排斥」は決して誤譯ではない。第三には、眼で見、耳で聽いて、直ちにその意義を大體正確に把握し得しむる如き語でなければならない。例へば、「轉換性ヒステリー」と云ふ譯語は、Konversionshysterie の譯語として申分ないが、これが「癲癇性ヒステリー」と誤聞せられる點のみが、この譯語の缺陷である。併しそんなことを云へば、完全な譯語などは殆どないと云つて過言でない。長所の比較的多く、短所の比較的少いものを以て、よき譯語と認めるより外に途はないであらう。

　これ等の見地からして、我等及び同學諸君の用ゐて來た分析學關係の譯語を批判して見ることも、後進諸君のための講義として意義がないとは云へないであらうと思ふ。

　一、我等が從來「纒綿」と譯して來たもの〻原語は

Besetzung であつて、これは恐らく電氣學の用語を借用して來たものと思はれる。電氣學に於いてはこれは「充電」と譯せられてゐる。分析學に於いてはこの語は心理エネルギーが一定の心的裝置に充實せしめられることを意味するもので、東北帝大精神科に於いてはこれを恐らくは登張獨和字典の譯語を採用して「備給」と譯してゐられるが、これは直譯として正確であるかも知れないが、目で見ても耳で聽いても直ちに我々の明確なる把握を豫期し難いと思ふ。「纒綿」と云ふ語は日本語史上に於いて愛情に關して用ゐられた傳統的の語であるから、その概念は直ちに容易に人々の心理に泛び易いが、如何にも表面にまつはり附いてゐる感じで內部までは浸透しない感があり、Besetzung の本來の觀念とはいさゝか隔たりがあると云ふことは、我々もこれを承認するに吝かでない。併しフランス語の譯語は investissement となつてをり、これは本來「着物を着せる」と云ふ意であるらしいから、わが「纒綿」(まつはりつく)と殆ど同義であるから、この譯語も、不適當とは云へないかも知れない。恐らくはインヴェスティスマンにもわが「纒綿」の場合と似たやうな傳統的な背景があるのかも知れないと云ふ感じがする。では「充塡」と云ふ語はどうかと云ふ說も出るであらう。さうして實際この語を用ゐた人もあつたと記憶してゐるが、これは何か固形體のものに就いて云はれてゐるやうな氣がして、エネルギーやリビドーのやうな目に見えないものに就いての語のやうな感じがしない缺點がある。併し何れにもせよ、分析學の用語の多くはフロイドに於いても既に初めから譬喩的表現であつたことは、屢々彼自身の告白してゐる通りであるから、どうせ譬喩的表現ならば人々の耳に馴れた、入り易い言葉を用ゐた方が却つて誤解を招くことが少いであらうと考へて、我々は今日までこの「纒綿」の語を用ゐて來た。それを最初に用ゐた人は、恐らく矢部八重吉氏であらう。

一、次に「轉嫁」であるが、その原語は Übertragung である。この語の譯としては丸井淸泰氏の「轉移」、木村廉吉氏の「轉付」などあるが、何れも結構である。たゞ難を云へば、「轉移」は「轉位」(Verschiebung)と同音である上に、「引越し」の意の「移轉」の語の逆轉であるために妙な感じがする(私だけの語感かも知れないが)のと、以上の理由のためにか何となく自動詞の感じがあつて他動詞の感じがないやうに思はれる。これはリビドーを對象に「交付」すると云ふ意味の語であつてリビドーを交付せず自己に引揚げるナルチスムスと對立するものであるから、必ず他動詞としての語感がそこに具

はつてゐなくてはならない。その點「轉付」は他動詞感を具へてゐるが、かう云ふ語の成立した習慣がないので、あまりに造語者の個人的仕業と云ふ感じがするのが缺點と云へば缺點である。言葉は必ず個人的の仕業であつてはならない。そこには必ず社會感覺が豫想せられ、要求せられ、期待せられねばならない。それならば一層の事「交付」と云ふ方が、寧ろ判然してゐてよい。たゞ「交付」と云ふと何か品物か文書に就いて云ふやうな感じがして、リビドーに就いて云つてゐるやうな氣がしないのが遺憾である。さう評して來ると「轉嫁」だとて決していゝ譯語ではなく、殊にその重大な缺點は、この語に歴史的背景があまりに濃厚で、「責任轉嫁」と云ふ成句を直ちに我々に想起せしむる點にある。たゞこの語は飽迄も他動詞である點と、如何にもリビドーに就いて云ふに適してゐるやうな氣がする（私一人の語感かも知れぬが）のとがその取柄のやうに思はれる。この語は矢部氏と私とが相談の上定めた語であつたが、あまり自信はない。誰かいゝ知慧を借して下さい。

一、それから「超自我」であるが、その原語は Über-ich であつて、東北帝大精神科では「上位自我」と譯してゐられるが、これは超自我の方がどうしてもいゝと私は信ずる。「上位自我」と譯すと、自我に上位と下位との別があるやうに聞えて面白くない。自我は飽くまでも自我であつて、超自我は「自我を超えて」作用する一つの心理部署（インスタンツ）であることは明かだからだ。超自我を上位自我と譯すならば、エスは下位自我と云はねばならぬことになる。無論、さう呼ぶならばそれも却つて面白いが、フロイドがこの語を用ゐた本來の意味は「自我を超えたもの」であつて、既に自我ではないと云ふ意味が强かつたのであらうと思ふ。それは丁度、「快不快原則を超え」たものが既に快不快原則それ自身ではないのと同じである。Postimpressionism を「後期印象派」と譯すべきではなく、「印象派以後派」と譯すべきであると同じである。

一、コムプレスク、アムビファレンツ、リビドーなどに就いては通常原語のまゝを用ゐることにしてゐるが、已むを得ざる場合には、第一は「復合」又は「錯綜」、第二は「相反並存」、第三は「愛慾」などゝしてゐる。第二はまづこれでいゝとしても（木村廉吉氏も賛成せられた。）第一、第三は不十分、又は適當であることを私もよく承知してゐる。「復合」や「錯綜」には「定着」の觀念が缺けてゐるし、「愛慾」には量的觀念が表れてゐない。「アプレアギーレン」も心的又は行動的「再經驗による發散」とでも、長たらしく譯すより外に途はないらし

く、これもやむなく我々はなるべく原語を用ゐることにしてゐる。東北帝大の早坂長一郎氏もこれについては原語採用主義であるさうである。

譯語に就いてはまだ云ふべきことは澤山にあるが、今日はこれ位にしておく。

## 精神分析學語彙（二七）

一、迷信 Aberglaube —— 迷信に就いて見て我々は原始人の精神狀態及び原始人の世界觀を窺ふことが出來る。彼等は知力の發達してゐる文明人よりも高度に、世界をば自分自身の精神的內容並びに活動の投出として感受し考察してゐた。從つて迷信は主として原始人に現はれるが、また爾餘の精神生活は高度の發展を遂げてゐるが、或る一部分の精神生活が原始人の考へ方や感じ方を保有してゐる如き文化人に於いても、現れるのである。知識階級者の間にありてその大部分を迷信的なものに驅立てるものは殊に强迫症である。時々迷信は獨特の技巧や詭計を用ゐる。例へば豫感、豫徵、夢などを實現して見せるのである。そのやうな場合には記憶違ひや忘却や間接的に物を見たり讀んだりすることが屢々その著しい手段となつてゐる。大抵、それは抑壓せられた、攻擊的な本能活動であつて、それ等諸活動が災害に對する迷信的恐怖と云ふ形をとつて外部から意識（その意識から元來閉め出されてあつたのだが）の中へと戻つて來るのである。また幼兒のナルチスムスから出來してゐるところの、魔術的な力への原始的な信仰は、種々な偶然的な出來事を迷信的に曲解せしめ、從つて迷信ある人々は偶然的な出來事を神か惡魔の仕業であるやうに解釋するのである。

一、發散 Abfuhr —— と云ふのは精神のエネルギー的な考へ方に由來してゐる概念である。それは、內的（本能的）刺戟又は外的刺戟によつて精神裝置內に導入せられた心的エネルギーを漏出させることを云ふのである。導入せられたエネルギー量の發散によつて心理裝置のエネルギー水準は、刺戟を受ける以前の高さにまで低下して來る。發散には二途がある。その人は原始人の動作や赤ん坊の泣き叫び、或は外界改變を目的さする意志的な行動の如き動作の途であり、他は本能感情滿足の途である。分析學の考へ方によると、激情、恥辱、悲哀その他の本能感情は分析學の操作に依つてそのエネルギーを發散せしめ得べき現象である例へば、私が自分の激情を自由に息抜きすると、それに依つて自分は心持が輕くなり、精神的に均衡のとれた正常狀態に復するが如きである。

或る刺戟を受けてその反應を言動的に、又は本能感情的に適當は解消することが出來ない（人格の格律又は外界の規則などによつて禁制せられてゐるために）場合にはその反應は、自我の强さ又はその發達の度に應じて、他方に押しやられ、そのエネルギーは、遂に別の形の目的に流用せられることにな

る。併しながらその緊張堪え難く、而も直接的發散が不可能である場合には、個人がその不快なる慾求に對して自己防衛をするに抑壓又は他の防禦機制に據る。早期に著書に於いてフロイドはこの過程を、本能感情の「閉め込み」(Einklemmung)と名付けた。抑壓しきれない發散慾はやがて歪められた形をとり神經症的症候となつて再出現する。その時その症候は同時に、その無意識的な滿足に依つて一つの何としても不適當な發散を意味することがある。流ひ流し法は病的になつてゐる本能感情量をアブレアギーレン(再經驗による發散)に依つて發散せしめんとする。分析的療法も亦、僾止められてゐる本能感情量を再經驗によつて發散(アブレアギーレン)せしめんとするものである。

一、自我の依屬 Abhängigkeiten des Ichs ——心理的部署として自我は三つの上層部署に依屬してゐる。(一)自我の一機能としての外界知覺に應じてゐる限りで、外界に依屬してゐる。(二)エスに依屬してゐる。換言すれば、エスのリビドー的慾求に依屬してゐる。但し言動への出口、即ち本能的發散への出口がたゞ自我の上に於いてのみ可能であると云ふ事實が條件となつてゐる。(三)超自我に依屬してゐる。この超自我は、自我の行動に對して、それのみならずエスの願望(それは自我にとつては無意識であるのに)に對してさへも、その責任を自我に問ふのである。これ等三種の依屬關係あるが故に自我の位置と課題とは、屢々甚だ困難なものとなる。殊に、これ等三人の君主から自我に對して下命せられる要求がそれ〴〵に矛盾憧着するものであるから猶更である。自我はそれ等三種の要求を何とか調停しようと試みるのである。が、その試みが失敗に終ると、不安症が生ずる。外界への依屬が十分に果されないと現實不安症が生じ、超自我の要求が十分に果されないと良心不安症が生じ、エスの本能的慾求があまり强烈であると神經症的不安が生ずる。

一、無意識の派生形成 Abkömmlinge des Unbewussten ——フロイドに依れば、これは顯在的(知覺し得べき)心理的諸現象にして、無意識的諸過程の連續として分析的に認識せられ得るものである。例へば、空想、代償形成、症候の如きものである。これ等は無意識の意識界への交流を示してゐる。無意識の派生形成は分析的治療に於いて大きな役割を果す。自由聯想想起の技法はそのやうな無意識派生形成の發現に導くものだからである。

一、拒否 Ablehnung ——屢々、防禦の同義語として用ゐらる。例へば、「外界を拒否する」とか、「本能的傾向が拒否する」とか云ふ如く。

一、アブセンツ Absenz ——一時的に大抵は部分的に意識喪失すること。性的滿足の高潮に於いてこの現象は來る。ヒステリー發作の場合にもアブゼンツは起るが、これは前者の延長の如きものとフロイドは認めてゐる。白日夢や癲癇に於ても常に起る。

——未完——

## イエーケルス博士の來翰

元ヰイン在住、現在スエーデン、ストックホルム在住の分析者ルドヰヒ・イエーケルス氏（Dr. Ludwig Jekels）と本研究所の大槻氏とは以前から文通があつたが、それはイエーケルス氏の夢と戯曲との比較研究の論文を大槻氏が參考にしてシエイクスピア『マクベス』論を物せられた時からの事であつた。大槻氏の同論文は雜誌『藝術殿』（昭和九年四月號）に發表せられてゐる。同誌同號をイエーケルス氏に贈られたに對して、本年五月二日付で大槻氏宛返書があつた。

「拜啓。雜誌藝術殿、貴所機關誌精神分析、並びに貴翰、何れも確に拜受、誠に有難う存じました。返事が甚だ延引いたし失禮いたしましたが、實は家内に病人があり、自分自身も永く病氣してをりましたゝめです。

マクベスに關する拙論を御參考下さつて、甚だ光榮に存じます。もし御論旨を簡單に書いて御一報下さらば誠に有難い仕合せであります。

御所望の小生寫眞及び略傳を喜んでお送り申上げます。小生は一八六七年に以前の墺國内に生れ、ヰインにて醫學を研め、同地病院に勤務いたしました。その後、神經病療養所長となり、精神分析學に興味を覺え始めました。爾來、斯學に愈々熱心に沒頭し今日に至つて既に三十二年になります。

拙論と致しましては、『本能論』、『ナポレオン一世の生涯の分岐點』、並びに『マクベス』論、その他只今別便送附の諸篇などであります。また一九三〇年度の『イマゴー』誌に出ました（さうして一九三二年度の『年鑑』に出ました）拙論『憐憫の心理』はやゝ見るべきものと思ひますが、只今手許にその拔刷が御座いません。

二年前から小生はスエーデンのストックホルムに居住いたし、精神分析學を教授いたしてゐます。

重ねて貴殿に感謝を述べ心からの御挨拶を申上げます。敬具

ルドヰヒ・イエーケルス」

## 『精神分析季刊』昨年度第四冊

米國ニウヨークにて發行の分析誌。

一、『催眠術覺醒後の暗示的效果に對する超自我の葛藤』リチヤード・ブリックナー及びロレンス・キウビー（ニウヨーク）

一、『尿道（攝護腺）の疾病に於ける心理的要素』カール・メニンガー（カンサス）——

一、『糖尿病を伴へる神經症の分析』ヂョーヂ・デーニエルズ（ニウヨーク）

一、『精神分析の醫學的價値への補説』フランツ・アレクザンダ（シカゴ）

一、『或る變態的兒童』エディタ・ステルバ（ギイン）
一、新刊批評

## 最近國內事實

▼本研究所客員宮田修氏は肺炎にて療養中であつたが藥石效なく、三月十九日午前五時十五分永眠せられた。同二十三日午後零時半より氏が生前校長たりし、成女學校々堂にて校葬あり、その後一般の告別式に移つた。本研究所よりも大槻憲二氏代表として列式し香花を供へた。氏は近來本誌上にアナ・フロイドの論文を譯載せられてゐる宮田齊氏の嚴父であり、また「心理研究ノート」を連載せらるゝ長谷川誠也氏の同窓舊友であつた。本研究所のためには公私ともに常に特別の好意を寄せられ、かつて『女性心理研究號』第二卷第二號）には、卷頭論文を寄稿せられた。その人今や亡し。茲に謹んで弔意を表す。

▼杉田直樹博士はこの度「九仁會」並びに「八事少年寮」を開設せられ、異常兒童保護並びに治療教育に從事せられることゝなつた。兩事業の略則を杉田博士稿「趣意書」中から拔萃、次に紹介しておく。

「九仁會は異常兒童の保護並に治療教育を行ふことを目的とし、事務所を名古屋醫科大學精神神經科教室内に置きます。事業としてはまづ保護兒童少年の收容所として八事少年寮を經營し、官廳の委託又は一般の希望によつて神經病的症候・精神異常症候性格異常等を有する兒童少年を收容し、之に對し合理的な醫學的治療教育を施します。そのため寮内に專門醫師の診療所を附設致し教育家の力と相俟つて努力します。本會の會長・副會長・理事の職員には愛知縣・少年審判所・少年院・名古屋醫科大學・方面事業等の有力な方々をお願ひし、其の外各方面の名士に顧問を依囑致す筈であります。又會員としては一般大方篤志の方々に御入會を願つて、本事業の經濟上の御援助を乞ひ、特に毎年金貳圓以上の定額の會費を醵出せられる方を普通會員とし、又一時に金五圓以上の寄附をせられる方を特別會員として、末長く事業の達成を希ふのであります。」

「八事少年寮は名古屋市中區川名山町一四九（八事中停留所より一丁）元八事腦病院の建物を購入して改造利用致し、高燥閑雅な風致に富む地域に少年收容室・運動遊戲場設備・教育娯樂設備を致すと共に、特に治療教育上の主體となるべき診療室設備・治療教育學的研究設備を寮内に設け、名古屋醫科大學より專門醫員を多數に囑託して十分な個別的治療教育を致しますし、一面には一般家庭に對し私共の體驗を知つて戴くために出版も試みる豫定であります。收容兒童少年の日常生活については保姆・教員・看護人・看護婦等の手で間然する所なくその身邊の世話を致す手筈であります。官廳よりの委託による外定員に餘力がありますれば、數名迄は一般御家庭からの御希望により些少の實費を頂いて異常兒童の治療教育を御引受け致してもよいと考へてゐます。」

▼『服飾品の持つ愛慾性』高橋鐵稿――『廣告の研究』五月號。
▼『服飾の精神分析』高橋鐵稿――『婦人畫報』三月增刊號。
▼『女性購買心理』同氏稿――『廣告界』五月號。
▼『戀愛觀破の祕訣』高橋鐵稿――『奥の奥』三月號。
▼『嫉妬の精神分析』古澤平作稿『ユマニテ』三月號。
▼『或る精神分析者夫人の話』竹田浩一郎稿――『母のペーヂ』誌三月號。(刀江書院發行)
▼『種族的支配者の心理』ユング談――『カレント・オウ・ザ・ワールド』誌四月號。
▼『精神分析と言語』山本新稿――京都帝國大學文學部哲學科本年度卒業論文として提出。
▼諸岡存氏は、澁谷區金王町七五（八幡上）に轉居。（電話・青山一、一六五番）
▼『精神分析學界の現狀』木村廉吉稿――『科學ペン』五月號。
▼倉橋久雄稿『芭蕉の戀愛と白憧憬』(本誌三・四月號所載)について、俳句雜誌『高潮』に於いて坂東太郎氏が細かく論及してゐる。
▼『子供の叱り方』霜田靜志談――都新聞家庭欄、四月十二日。
▼『子供への愛情にも技術が要る』大槻憲二談――中外商業新報家庭欄、三月卅一日。
▼大槻憲二氏は『秀吉と家康の精神分析』に就いて、二月二十五日夕六時廿分中央放送局より放送。
▼『ロレンスと精神分析』大槻憲二稿――『稻英』三月號。
▼『戀愛性慾の處置』大槻稿――『人生創造』四月及五月號。
▼『私生兒の問題』大槻稿――『女性の光』四月號。
▼フロイド精神分析學全集第三卷『社會・宗教・文明』(春陽堂)は三月一日再版を公刊した。
▼『アルフレッド・アードラーの個性心理學と世界觀』フランツ・ミュラー稿――『綜合科學』(協會發行) 第二卷第七號。
▼本誌前號内容に關しては本號卷頭廣告を參照ありたし。

## 本研究所講習會例會

三月例會は一日夜、研究所に於いて催された。『快不快原則を超えて』の最後の章を大槻氏擔任にて朗讀討議した。内に出てゐるブロイヤーの所謂「拘束されたる」本能と自由なる本能との區別に就いて疑問が附せられた。久しく研究して來た『快不快原則を超えて』は漸く終つたが、今次の改訂改譯がも少し早く出てゐなかつたことが殘念であつた。

會後、延島英一氏、アドヴタイザー紙に出てゐた日本人の性格に就いての西洋人の見方を紹介を試みられた。その見方に就いては本誌本號時評欄に明記してあるから讀者は參考せられたい。その後、高橋鐵氏が婦人の服飾についての論を試みられた。

出席者は右言及三氏の他に倉橋久雄、土屋喜一、北垣照雄、加藤巳酉三郎、大槻岐美の諸氏であつた。

×

四月例會は五日夜、同所に於いて催された。今夜から新にフロイド全集第九卷『分析戀愛論』をテキストとして朗讀討議す

ることになつた。『快不快原則』よりも分りやすいので、大變調子が出て最初の二論文を各自分擔朗讀し終へた。

その後、延島氏、本號時評欄の時評を朗讀して一同の批評を乞はれたが、何人も異議なく賛同と云ふことになつた。相當世間の反響を呼んで然るべき、ガッチリした時評文である。終つて、大阪在住研究會員廣井重一氏から講習會に贈られた大阪名物粟おこしの罐を開いて一同賞味し、寄書きにて同氏へ禮状を書いた。それに對する廣井氏の答禮は本號第八十八頁に掲げておいた。茶菓を喫しつゝ各自分析學入門當時の抵抗點について告白し合つた。

出席者は大槻憲二、倉橋久雄、北山隆、北垣照雄、延島英一、高橋鐵、土屋秋實、大槻岐美の諸氏であつた。

## 本研究所研究會例會

三月例會は十五日夕方から萬世橋驛前アメリカン・ベーカリに於いて催された。

食後、高橋鐵氏、「心理學としての精神分析學」に就いて、精神分析學と他の心理學との關係諸點を明かにし、その相互幇助を要望せられた。それに對して、長崎文治氏から質問が發せられ、二三の應酬的討議があつた。論は體質と素因との區別に亘り、木村氏精神病學の説を引用してその別を明にせられた。次に、大槻憲二氏立ち、先づ分析學徒としての自家の態度、及び氏自身現在に於いて可能なる活動範圍を明かにせられ、續いて「條件反射と精神分析」との關係についてパウル・シルダーの説を紹介しつゝその解説を試みられた。本誌本號の研究欄所載論文は即ちそれで、そこにはその後の完成を見たる結果として現れてゐる。なほ續いて「癲癇病」に就いて長谷川誠也氏と木村廉吉氏との間に質問應答が交され、今夕は比較的早く散會となつた。

出席者は言及諸氏の他に、小林一、富田義介、大槻岐美、田中虎男、岩倉具榮、塚崎茂明、內藤梅子、田內長太郎、小山良修、霜田靜志、竹田浩一郎、北垣照雄の諸氏であつた。なほ缺席挨拶のあつたのは小杉長平、平野弘、松井定之、土屋秋實、武田忠哉の諸氏であつた。

×

## 研究會五月例會

五月十七日（第三月曜日）

午後五時半から萬世橋驛前アメリカン・ベーカリに催します。「男性と女性」に就いての研究發表の他に、早稻田大學心理學教室內田勇三郎、戸川行男兩氏の運轉手試驗の興味ある報告あり。出席御希望の方は豫め御一報を　ふ。

# 編輯後記

こゝに『生理と心理』特輯號を讀者の前に送ることゝなつた。特輯題目論がやゝ固いので、それ以外はなるべく柔かくしたつもりですが如何でせうか。生理心理の關係に就いては、長谷川誠也氏も本誌第四巻第二號に『心身の問題』の題下で論じてゐられる。參照ありたし。

×

新筆者者は嵐山榮三氏と田中虎男氏さであります。嵐山氏は青山學院出身者で、ありますが、匿名にしておいてくれとのことでありますから精しい紹介は差控へます。田中虎男氏は製藥販賣業に從事してゐられる方であります。

×

最近の特別誌友加入者名簿は次の如くであります。今度は割合に少なう御座いました。何卒加盟の諸氏は御知人御親友を御勸誘下さい。

▼大阪府………ササキ・スケマサ氏
▼臺灣………遠藤潔氏
▼兵庫縣…………森島正武氏
▼福島縣…………塚本德太郎氏
▼朝鮮…………石川勝雄氏
▼東京市牛込區…吳無限氏

×

前號で本研究所創立十周年、雜誌創刊第五周年の記念の催しを五月中にしたいと云ふ希望を述べておきましたが、研究所は出版、執筆、診察相談などのために目下非常に多忙である上に人手に乏しく、何とも致方なく、延期することに致しました。あまり派手やかなことよりも、着實に仕事を進めたいと云ふのが研究所の信條でありますから必ずしもこの事は失望すべきことではありません。併し本誌も本號を以て完全に第五周年に入つたわけであります。讀者諸賢よ、お慶び下さい。

×

大槻氏新著『新しき立身道』は德富蘇峰氏や、高島平三郎氏や、多田不二氏のやうな有力な方々が諸方の一流新聞紙上で折紙を付けられ、讀者の間からも盛んな反響があります。この書ばかりは完全に始めから終りまで一字殘さず讀むのだと云つて來る人々が多う御座います。本誌前號には當研究所出版部にて取次販賣する旨附記するのを忘れましたが、どうぞ當部へも御申込みを願上げます。

×

『フロイド精神分析學全集』は大分長くかゝつて重版準備をして來ましたが、やうやく完成いたしました。何しろ只の重版にあらず、實に良心的改訂改譯の重版でありますので、出版者としても譯者としても一方ならぬ犧牲的な事業であります。『快不快原則を超えて』は全然改譯でありますから　お氣の毒ながらこの書ばかりはもう一度お買求め下さることを切に願上げます。非常に分り易くなつたことを保證いたします。

×

第二期刊行計畫に就いては、譯者大槻氏からフロイドに報告がありましたところ、フロトドも大層喜んだと承りました。本誌本號編輯終了後にヰインから手紙が着きましたので、こゝには紹介いたしませんでしたが、次號にはその內容を

精しく御披露申上げます。この大業完成への靡援を偏に讀者諸賢にお願ひ申上げます。讀者に援けて頂かないと殊更かう云ふ學術書の完成は不可能であります。

×

長谷川誠也氏著『文藝と心理分析』及び大槻憲二氏著『精神分析雜稿』は品切になり、當分重版の見込みが立ちません。前者の重版は著者の都合で延期になつてをります。後者に對しては今なほ盛んに需要があるのですが、出版元の岡倉書房で紙型を紛失して困つてゐるのであります。

×

合本『精神分析』は第一巻の上下が品切になつてゐますが、第二巻上下二册、第三巻及び、第四册は揃つてゐますから御註文を待ちます。

×

大阪の特別誌友澤潤一氏が先日上京の節に、研究所に來訪せられました。友あり遠方より來るの感あり、誠に愉快でした。

★次號は『男性と女性』と云ふ題目によつて特輯します。これは讀者諸氏の特に關心せらるゝところと存じます。

一、男性と女性とに關する分析的研究　大槻憲二
一、女性の性心理に就いて　高水力太郎
一、紀文大盡の分析　矢部八重吉
一、或る偏食兒童の心理　大東祝一
一、現實感の發展段階（フェレンチ）　伊藤龍朗
一、道化た生涯（ハクスリ作）　岩倉具榮譯
一、政治上のスター・システムの社會心理分析　延島英一
一、アレキサンダーの精神分析説　木村廉吉
一、心理研究ノート（續）　長谷川誠也

その他いろ〳〵計畫中のものもあります。雜誌編輯は一種の共同創作の如きものの、編輯者自身にも豫測し難いものがあり、そこが面白いところであります。

昭和十二年四月二十五日印刷
昭和十二年五月一日發行
（隔月刊）定價五十錢（郵税四錢）

編輯及發行　東京市本郷區駒込動坂町三二七　大槻憲二
印刷所　東京市淺草區北三筋町五五　三進堂印刷所

定價一部　五拾錢（郵税四錢）
半年分　一圓五十錢（送料共）
一年分　三圓（送料共）

御注文規定

・本誌の御注文は一切前金に御願ひ致します。
・御送金はなるべく安全至便なる振替を御利用下され度く、振替口座東京七八八一七番へ御拂込み下さい。
・郵券代用の場合は一割增に願ひます。
・本誌廣告に關しては、御照會次第部員を伺はせます。

發行所　東京市本郷區駒込動坂町三二七　東京精神分析學研究所　振替口座東京七八八一七番

大賣捌所　東京堂・東海堂・大東館・北隆館・（大阪）福音社

# 研究所事業案内

一、分　析　部

・神經症治療（ヒステリー、强迫症、恐怖症、妄症想、その他）

・性格改造（惡癖、奇習など現實生活に不適當なる性向にして無意識病根に基くもの）

・客員の診察（分析的又は醫術的）希望の方には、紹介の勞をとるべし

二、通信分析部

・分析法は毎日、患者が分析者の許に通ひて、處置を受けるが正當なれど、遠隔の地に居られたり、その他、經濟上、健康上、それの出來にくい人々のために、この部を設く。

・希望者は、その姓名、年齢、病歴、手記、感想、夢の記述などに、料金(十圓)を添へて當研究所にお送り下され度。分析診斷明細書を相當期日の後に送る。手記その他は絶對に他に洩らすことはなし。文字は明瞭に書かれたし。

・擔當者は研究所に御一任ありたし。それ〳〵適當の人々にふり向ける。

三、教　育　部

・當研究所主催の講演會、公開講習會、演劇、その他。

・所員並に客員に對して他より依頼の講演又は講習會。

四、出　版　部

精神分析に關する雜誌及び圖書の出版。

五、研　究　會

・研究の發表とその討議を目的とす。毎月一回、第三月曜夕、　　にて開催その都度通知、

出席希望者に對しては別に資格制限を設けず。會費は食費、會場費、通信費とも出席の都度、六十錢。（但し誌代を申受く。雜誌購讀は會員の義務とす。）

・雜誌のみに依りて研究の發表又は諸般の事業に參與せんと欲する向は特別誌友（直接購讀者）となるべし。

六、講　習　會

毎月一回、第一月曜夜、於研究所開催。當分主としてフロイド著書の精讀。會費二十錢。

岩倉具榮譯

# 理想の家族

## K・マンスフィールド短篇集

定價送料共金一圓九十錢　（四六判二百五十頁 布裝箱入美本）

精神分析學と露文豪チエホフとの影響を受けて、獨自の金屬的鋭さと可憐優美の光彩とを放つ英國現代文藝界の名花マンスフィールドの珠玉短篇は、從來、岩倉氏の名譯に依つて『精神分析』誌上に追次紹介せられて來たが、こゝにそれ等を纏めて待望の一書は遂ひに讀書界に送り出された。既發表のものは頁數その半に足らず、新發表のものにおいて殊に原作者の傑作を窺ふことが出來る。傳記と鑑賞案内とを添へ、かゝる親切の譯書はわが飜譯史上にも稀ではなからうか。

（口繪二葉）マンスフィールド及びその夫君ミドルトン・マリ

作品―

ルフト鑛泉場。炎。逃避。風は吹く。この花。心理學。芥の漬物。ブリル孃。理想の家族。密月。新月灣のほとり。

附錄―

一、マンスフィールドの生涯（ミドルトン・マリ）

二、作品分析鑑賞案内（譯者）

大槻憲二著（增訂第三版）

**精神分析概論**

（定價送料共・金八十六錢）

本郷區動坂町三二七・（振替）東京七八八一七番

東京精神分析學研究所出版部



性心理のデパートであり、女性心理のカリケチュアであり、大寫しである!!ひとり精神分析學のみがよく彼女の微妙な心理を闡明し得る。性心理、女性心理研究の國民的寶庫の秘帳は遂に開かれた!!

# 阿部定の精神分析的診斷

法醫學から觀た型…………金子準二
阿部定の精神分析…………長崎文治
定の無意識動機に就いて…………高橋鐵
阿部定の定イズム雜考…………高橋鐵
戒心すべき誰にでもある傾向…………諸岡存
愛慾葛藤問題としてのお定事件…………大槻憲二
下腹部切取事件の流行…………大槻憲二
幼少女時代…………
小學校時代…………
不良少女時代…………　編纂者
事件の時間的表示…………
参考文獻表…………

圖版（お定の肖像及び筆蹟・ビアヅリ作サロメの挿圖）

東京精神分析學研究所編
定價五十錢・送料共

東京精神分析學研究所出版部發行
本鄕區動坂町三二七番地
振替・東京七八八一七番

# 第五版出來!!

（第四版自序の内より）　本書がこのやうに需用せられることは、學界及び世人の間に斯學が益々眞劍な興味の對象となりつゝあることを示すものであるが、併し私はその故にとて斯學の將來を樂觀することは尙早であると思つてゐる。我等の前途はなほ遥遠であるが、たゞ確信と努力とを以て一歩一歩前進して行けばよいのだ。他人の毀譽褒貶になど一々神經を尖らせるには及ばない。その意味に於いて私は、斯學父祖フロイド博士の沈着冷靜な態度に學びたいと思ふ。

# 精神分析概論

## 大槻憲二著

增補改訂第四版・四六版・口繪二葉
定價80錢・送料6錢

**✱本書の四大特色**

一、現代日本人が讀者たる事を忘れてゐないこと
二、斯學の組織的知識を與へること
三、實例はみなわが國のものを擧げて興味多く說けること
四、その理論的根據につき明快にして要を得やすいこと

**第一章**　精神分析とは何か

（Ⅰ）無意識の發見。催眠術と精神分析（Ⅱ）夢の解釋。その方法と實例。典型的の夢。（Ⅲ）無意識と精神症、神經症、無意識の特徵。相反並存性とは。

**第二章**　精神分析の科學性

（Ⅰ）科學とは何か。（Ⅱ）種々な解釋の可能。（Ⅲ）解釋と認識。（Ⅳ）科學性の複雜。二者選一と無意識。（Ⅴ）重複決定。竹取物語分析。（Ⅵ）所謂科學者の偏見。

**第三章**　精神分析の機能

（Ⅰ）病的の心理。ナルチスムスとは。（Ⅱ）各種の理論。抑壓說。リビドー說。動力說。エディポス說。幼兒性慾說。生死本能說。（Ⅲ）病氣の治療。分析と綜合。非醫者の分析。（Ⅳ）理論の應用。言語學的興味。文藝學的興味。源氏物語分析。

**第四章**　超心理學としての精神分析

三つの見地とその綜合。（Ⅰ）動的見地。（Ⅱ）局所的見地。（Ⅲ）經濟的見地。

**第五章**　精神分析の發達

（Ⅰ）シャルコー及びジャネー。（Ⅱ）フロイドの史的地位及び特徵。汎性慾說解嘲。（Ⅲ）ユングアードラー、その他の分析學者の特徵。（Ⅳ）國際學會と研究機關。

**第六章**　精神分析研究手引

（Ⅰ）我が國に於ける研究史及び文獻。（Ⅱ）術語表解　（索引）。

東京精神分析學研究所出版部
東京市本郷區駒込動坂町三二七
（振替口座）東京七八八一七番

# 學問の世界性とエスペラント

**學問**は人類全體の共同の財産であつて、決して、一民族や、一國民の私すべきものではない。☆……したがつて、學問上の重要な新發見や新創意は、必ず世界へ發表して、文化促進の助けとするのが、學者の義務である。☆……ところが、その實行上、日本の學者は、一つの大きな困難に行當るのである。それは……**言語**の問題である。ヨーロッパの學者達は、自國の言葉であるドイツ語、イギリス語、フランス語等で、その業績を發表してをり、それによつて文化に貢獻してゐる。☆……が、日本人は、日本語が孤立してゐるため、これで發表したのでは、世界に認められるわけにゆかない。そこで、從來は**國辱**を忍んで外國語で發表したものである。科學日本の體面上甚だ情けないことであるが、それだけならば、文化の向上を願ふ者の襟度として、堪へ得るとしても、外國語の習得に、多大の貴重な時間を空費することは、學問を愛する者にとつて、實に惜しんでも餘りあることである。☆……外國語を讀み得るまでになる努力だけでも容易ではないが、讀むためだけに外國語を學ぶことは、まだやむを得ないであらう。そこで、せめて、最も困難な『外國語で書く』努力だけでも逃れる手段はあるまいか。この問題の解決策として、學界の一部に『學習に容易な……**國際**共通語エスペラントを學說發表用語とせよ』といふことが叫ばれ、現に活用されてゐる。高象氣象臺は、毎年浩瀚な報告書を、この言葉で出し、多くの醫學者や、理研の一部の科學者達は、その業績の發表に盛んに、これを利用し、全世界の科學界から注目されてゐる。**エス**ペラントで發表すればエスペランチストでなくとも、ヨーロッパの學者は、自分の專門のことなら、容易に理解し得るから、決して看過される心配はない。☆……語學の素養が相當にあれば、エスペラントで論文を書き得る程度に達することは、さほど困難でないから、日本の……**學者**は、すべてエスペラントを學んで、これによつて、人類のために、大いに貢獻すべきである。☆……エスペラントの學習法や學習書の選擇については、日本におけるエスペラント普及、研究の中心機關財團法人日本エスペラント學會（東京市本郷元町）あてに照會すれば、答へてくれるはずである。

田園調布驛東口際

# 精神分析學診療所

醫學博士　古澤平作

東京市世田谷區東玉川町一九〇
電話田園調布(102)三〇三二

昭和八年七月七日第三種郵便物認可
昭和十二年四月廿五日印刷納本 隔月一日一回發行
精神分析 五・六月號
定價五十錢 郵税四厘

V. Jahrgang, Heft 3. Mai — Juni, 1937. Erscheint zweimonatlich.

# ZEITSCHRIFT FÜR PSYCHOANALYSE

Herausgegeben vom „Tokio Institut für Psychoanalyse“

**(Sonderheft: Physiologie und Psychologie)**



**Preis des Einzelheftes, 50 sen**

**Tokio Psychoanalytischer Verlag**
329, Dozakacho, Hongoku Tokio Nippon